316
49

聖福音史

主ハリストス一代記 全

主教 フェオファン師 編

主降生千九百一年
正教會

聖福音史

基督實史

リストス一代記 全

主教 ヲオファン師編

主降生千九百一年

正教會

マリヤ女神生聖至び及.子神しれ生てしと兒嬰

聖福音史 主ハリストス一代記序

此の書は、神の福音、即神が昔時其預言者を以て、聖なる書に於て許約せし福音、其子即肉體に依りては、ダヰドの裔より生れ、聖德の神に依りては、大能に於て、死より復活するを以て、神の子と顯れし者の福音なり。（ロマ書一一―四）。

兄弟よ、我爾等に告ぐ、我が傳へし福音は人に由るに非ず、蓋我人より之を受け、之を學びしに非ず、乃主イイススハリストスの默示に由る。（ガラデヤ一一―一二）。且我等、斯の事を語るに、人の智慧の教ふる所の言を以てせずして、聖神の教ふる所を以てし、神に屬する言を以て、神に屬する事に當つるなり。（コリンフ前書三ノ一三）。我が嘗

て、爾等に傳へし福音を復爾等に告ぐ、乃爾等が受けし所、之を以て立ちし所なり。爾等若し之を我が福音せしが如く守り、且徒に信ずることなくば、之に由りて救を得ん。（コリンフ前書一五ノ一―二）。

蓋我等は、巧なる虚説に從ひて、爾等に我が主イエスハリストスの能力と降臨とを告げしに非ず、乃其威光を親しく見たる者として然せり。（ペトル後書一ノ一六）。

是の故に爾等一切の勉勵を用ゐて爾等の信に德を加へ、德に智識を加へ、智識に節制を加へ、節制に忍耐を加へ、忍耐に敬虔を加へ、敬虔に兄弟の親睦を加へ、兄弟の親睦に愛を加へよ。蓋若し此等の中に在りて、彌益さば、爾等が我等の主イエスハリストスを識るに於て進まざるなく、果を結ばざるなきを致さん。（ペトル後書一ノ五―八）。

此の故に、我等主イエスハリストスを傳へて、凡の人を諭し、悉くの智慧を以て之に誨ふ、凡の人を主ハリストスイエスに於て、完全なる者として立たしめ、（コロサイ一ノ二八）、且神は始より神の成聖と眞實を信ずる信とに因りて、爾等を救の爲に簡び、我等の福音を以て爾等を此に召せり、我が主イエスハリストスの光榮を得ん爲なり。（ツサロニカ後書二ノ一三―一四）。

主ハリストス降生二千一年十二月

平安なる、福音しんじ善事なる福音すものの足はいとうるはしき哉

（ロマ一〇、一五）

凡例

一　此の書は露國ダンボフの主教ヲオフン師が四福音書に記する所の事蹟を年月の順序を追ひ、歴史的に總合記述せるものなり。

一　主教ヲオフン師は、之を記述するに當りて、敢て己れの言を以てせずに、悉くみな四福音の言語を以てせり、故に此の譯書も日本正教會譯の四福音の言を、そのまゝ用ゐたれば、譯文は敢て飜譯者の私筆にあらずと知るべし。

一　故に此の書は、又敢て譯者の勞を致す所更になきを以て、こゝに本書の出版を見るを得たるは、全く正教會譯の聖書出版の賜物なり。

一　只憾むらくは飜譯聖書に依りて、四福音書の章句を配合するに當り、句調を傷め、行文の連絡を損せるもの尠からず、且・本文ならびに傍訓等に魯魚の誤り多きは、皆本書出版者たる譯者の責に歸す。

一　本文の傍らに「、」點を附したるは、行文を明瞭ならしめんが爲めに、原編纂者及び譯者の加へたる言語にして、聖書の言語にあらざる事を示すものなり。

一　原書には、主教ヲオフン師の研究に基く、福音の事蹟の順序に關する說およ

び四福音の對觀表を掲けあれど、一般の讀者に必要なきを以て此の書には之を省略せり。

一　本書に挿入せる聖畫は、友人イサイヤ水島行揚君が「聖畫帖」出版の際及び其後に尠からざる勞と苦心とを以て蒐集製版の功を全うせられしものなり、今本書に此の聖畫を挿入して、一層の光彩を添ゆるを得しは全く同氏の賜物なり。

聖福音史

主ハリストス一代記目次

(一) 福音の確證……一
(二) 「上」救主の御系圖……二
(三) 「下」同上……三
(四) 精身の事歴……四
(五) アルファンゲル、前驅者イオアンの誕生を報ず、及び其懷妊……五
(六) アルファンゲル、童貞女に彼が神子を生む事を福音せらる……七
(七) 至聖童貞女、エリザワエタを訪ふ……八
(八) 先驅イオアンの誕生及び割禮……九
(九) イオシフに神子の精身の奥儀を啓示せらる……一一
(一〇) 主ハリストスの降誕……一二
(一一) 神使の讃揚、並に牧者の來拜……一二
(一二) 主の割禮及び迎接……一三

(一一) 博士の來拜……一五
(一三) エギペトに遁るる事及び其歸還……一六
(一四) 聖城に於ける十二歳の主……一七
(一五) 先驅その職に就き、授洗す……一九
(一六) 先驅の教訓……二〇
(一七) 聖イオアン主ハリストスの事を宣ぶ……二一
(一八) 主の洗禮……二二
(一九) 四十日の齋……二二
(二〇) 惡魔の試誘、及び惡魔を退らる……二三
(二一) 授洗者イオアン、主ハリストスの事を證す……二四
(二二) 主は或る門徒を得らる……二五
(二三) カナの奇蹟……二七
(二四) 主、暫時カペルナウムに至る……二八
(二五) 第一の「パスハ」—主、貿易者を逐ひて聖殿を潔めらる……二八

(二六) 聖城イエルサリム民の信仰の端緒……二九
(二七) ニコデムとの說教……三〇
(二八) 授洗聖イオアンの主の事の最後の證言……三一
(二九) 授洗聖イオアン獄に四せらる……三三
(三〇) 主ガリレヤに往く……三三
(三一) ガリレヤに於ける滯在……三四
(三二) ガリレヤに往きナザレトを過ぐ……三七
(三三) カナに於ける第二の奇蹟……三七
(三四) 主カペルナウムに移る……三八
(三五) 四人の漁者を招かる……三九
(三六) 安息日に會堂にて教を宣べ、且魔を逐ふ……三九
(三七) シモンの岳母、其他多くの者の醫さる事……四〇
(三八) 主始めてガリレヤに傳道す……四一
(三九) 主ナザレトを訪はる……四一

(四〇) 癩病者の醫さるる事……四二
(四一) 海邊の說教及び奇蹟の漁……四三
(四二) 癲癇者を醫さる……四四
(四三) リワイマトフェイを招かる……四六
(四四) 第二の「パスハ」——三十八年になる病者を醫さるる事……四七
(四五) 第二の節筵——主が神父と同じき事の教訓……四九
(四六) 安息日に穗を摘みし事、其辨護……五一
(四七) 安息日に手の枯へたる者の醫さるる事及び「ファリセイ」等を詰めらる……五二
(四八) 「ファリセイ」等の激怒、主海濱に避く……五三
(四九) 人民の群集……五四
(五〇) 民大に醫さる……五四
(五一) 主ガリレヤに來る、主の終夜の祈禱……五四
(五二) 十二門徒を選ぶ……五五

(五三) 主、山を下りて醫を施さる……五五
(五四) 山上の教訓、マトフェイ福音に依る……五六
(五五) 山上の教訓、ルカの福音に依る……六五
(五六) 癲癇者を醫さる……六八
(五七) 百夫長の僕を醫す……六九
(五八) ナインの少者の復活……七〇
(五九) 授洗イオアン使を主の許に遣はす……七一
(六〇) 主、前驅イオアンを讃稱す……七一
(六一) 「ファリセイ」及び學士の不信を詰めらる……七二
(六二) 主或市の不信を詰めらる……七三
(六三) 主、父に感謝す、又衆民を己に招く……七三
(六四) シモンの家に於て罪人を憐恤せらる……七四
(六五) 主、尙ガリレヤを巡遊せらる……七六
(六六) カペルナウムに於て惡鬼、醫者、疲者等を醫さる……七六

(六七)「ファリセイ」等、主を誹る。主これを斥く。……七六
(六八)聖神を誹る罪は赦されず。……七八
(六九)惡言は何れより出るか。―虛言の譴責。……七八
(七〇)休徵を請ふ者に答ふ。……七九
(七一)人より出でし惡鬼の再び人に歸る事。……七九
(七二)主と人々との神の上の親近。……八〇
(七三)群集に譬喩を設けて敎訓せらる。……八〇
「イ」種播の譬。
「ロ」稗の譬。
「ハ」種の開發の譬。
「ニ」酵の譬。
「ホ」田に藏れたる寶の譬。
「ヘ」眞珠の譬。
「ト」魚網の譬。

「チ」譬喩の敎訓の終結。
(七四)譬の說明。……八四
「イ」何の譬を以て衆民に敎訓せられたるか。
「ロ」種播の譬の說明。
「ハ」稗の譬の說明。
「ニ」神の言に注意すべき事の敎訓。
「ホ」譬の敎訓の終り。
(七五)海邊にて、主に從はんとする者に對しての答へ。……八八
(七六)海を經て往く時、嵐を鎭む。……八八
(七七)ガダラに於て魔鬼を逐ふ。……八九
(七八)血漏を患ふる者を愈さる。……九一
(七九)イアイルの女の復活。……九二
(八〇)二人の瞽者及び魔鬼に憑られし瘖者を愈さる。……九三
(八一)再ナザレトを訪はる。……九四

(八二) 諸邑諸村を巡りて牧者無きの衆民を憐まる。……九五
(八三) 十二門徒を傳道に遣さる。……九五
(八四) 傳道に遣さる門徒等に對する教訓。……九六
(八五) 門徒等の働きの事の教訓。……九七
(八六) 主及び門徒相別れて傳道に往く。……九九
(八七) 先驅者イオアンの斬首。……九九
(八八) イロド、主の事を聞きて擾動す。……一〇〇
(八九) 門徒等の歸還。主ワイプサイダの野に往く。……一〇〇
(九〇) 奇蹟にて五千人を飽かしむ。……一〇一
(九一) 主、海を履みて往く。……一〇二
(九二) ゲンニサレトの地に於て奇蹟を行はる。……一〇四
(九三) カペルナウムに於ての、天の糧の事の教訓。……一〇五
(九四) 「ファリセイ」等、愚なる傳への爲に、主に躓めらる。……一〇五
(九五) シロフィニキヤの婦の女を醫さる。……一一〇

(九六) 聾にして訥れる者を醫さる。……一一三
(九七) 諸病を醫さる。……一一四
(九八) 奇蹟を以て四千人の飽かしむ。……一一五
(九九) マグダラダルマヌファの疆に於て休徵を請ふ者に答へらる。……一一四
(一〇〇) 「ファリセイ」「サドケイ」等の酵を防ぐ可し。……一一六
(一〇一) イオルダン外のワイプサイダに於て瞽者を醫さる。……一一六
(一〇二) 門徒等、主イエスハリストスの神の子たるを認む。……一一七
(一〇三) 主已の死と復活とを豫言せらる。……一一八
(一〇四) 十字架を負ふ可き事の教訓。……一一八
(一〇五) 主の顯榮。……一一九
(一〇六) 惡鬼に憑られし者を醫さる。……一二一
(一〇七) 主ガリレヤに往く。仍その死及び復活の事を豫言せらる。……一二三
(一〇八) カペルナウムに於て、殿稅および奇蹟の「スタティル」(古銀)。……一二四
(一〇九) カペルナウムに於ての門徒に對する說教。……一二四

「イ」 孰か大なる。
「ロ」 爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。
「ハ」 誘惑の事。
「ニ」 幼兒に注意すべき事。
「ホ」 若し兄弟罪を犯さば何を爲す可きや。
「ヘ」 罪を赦すべき事。

(一一〇) サマリヤの卿民主を受けず。……一三〇
(一一一) 主に從はんとする者に答へらる。……一三〇
(一一二) 七十門徒を傳敎に遣はさる。……一三一
(イ) 七十門徒の選定および派遣。
(ロ) 七十門徒に對する敎訓。
(ハ) 七十門徒の歸還および主の敎訓。
(一一三) 永世を繼ぐ事の問に答へらる。……一三三
(一一四) マルファ、マリヤの家庭に於ける主イイスス。……一三四

(一一五) 主の祈禱。……一三五
(一一六) 祈禱を止むべからざるの敎訓――譬。……一三六
(一一七) 啞なる魔鬼を逐はる。フェエルゼウルに藉りて云々の事に就きて「ファリセイ」等を譴めらる。……一三六
(一一八) 其後の他の敎訓。……一三八
(一一九) 「ファリセイ」人と共に食せし時「ファリセイ」及び學士等を譴めらる。其事に就きての他の敎訓。……一三九
(一二〇) 遺産の分配を問ふ者に答へらる――其事の敎訓。……一四〇
(一二一) (イ) 神に依らざる富の空しき事――譬。……一四一
(ロ) 慮る勿れ。
(ハ) 財を天に積め。
(二) 主を待ちて儆醒すべし。
注意的の敎訓。……一四五
(イ) 主よりの火と劍。

(ロ) 何ぞ此の時を別たざる。
(ハ) 途中に在りて釋を得よ。
(一二三) 悔改の教訓。……一四六
(イ) ピラトが其血を祭物に雜へしガリレヤ人の事の報知。
(ロ) 實を結ばざるの無花果樹よりの教訓。
(一二四) 安息日に、傴みて伸ぶる能はざる婦を愈さる。……一四七
(一二五) 芥種の譬。……一四八
(一二六) 救はるる者寡きかとの問に答へらる。……一四八
(一二七) イロド爾を殺さんと欲す、此處を離れよと言ふに答へらる。一四九
(一二八) 「ファリセイ」人の家に於て食せらる。(イ)此處にて水腫病者を愈さる。……一五〇
(一二九) (ロ)筵席の席順の教訓。(ハ)午餐に招ぐ可き者の教訓。……一五〇
(一三〇) (二)大なる晩餐の譬。……一五〇
(一三一) 途上の教訓。(イ)肉親を離れて、十字架を任ふ可き事。……一五一
(一三二) (ロ)建塔、戰爭、鹽の譬。……一五二
(一三三) 罪人に對する神の仁慈の譬。……一五三
(イ) 亡はれし羊の事。
(ロ) 失はれし金錢の事。
(一三四) 譬の續き。……一五四
(ハ) 放蕩なる子の事。
(一三五) 不正なる管理者の譬——其教訓。……一五六
(一三六) 富者とラザリの譬。……一五八
(一三七) 門徒に對する諸教訓。……一五九
(一三八) 十人の癩病者を愈さる。……一六〇
(一三九) 神國の來臨の事。……一六一
(一四〇) 不義なる裁判官の譬。……一六二
(一四一) 「ファリセイ」と稅吏との譬。……一六三
(一四二) 主張幕節に當りてイウデヤに往く。……一六三

(ロ) 何ぞ此の時を別たざる。
(ハ) 途中に在りて釋を得よ。
(一二三) 悔改の教訓。……一四六
(イ) ピラトが其血を祭物に雜へしガリレヤ人の事の報知。
(ロ) 實を結ばざるの無花果樹よりの教訓。
(一二四) 安息日に、傴みて伸ぶる能はざる婦を愈さる。……一四七
(一二五) 芥種の譬。……一四八
(一二六) 救はるる者寡きかとの問に答へらる。……一四八
(一二七) イロド爾を殺さんと欲す、此處を離れよと言ふに答へらる。一四九
(一二八) 「ファリセイ」人の家に於て食せらる。(イ)此處にて水腫病者を醫さる。……一五〇
(一二九) (ロ)筵席の席順の教訓。(ハ)午餐に招ぐ可き者の教訓。……一五〇
(一三〇) (二)大なる晩餐の譬。……一五一
(一三一) 途上の教訓。(イ)肉親を離れて、十字架を任ふ可き事。……一五二

(一三二) (ロ)建塔・戰爭・鹽の譬。……一五二
(一三三) 罪人に對する神の仁慈の譬。……一五三
(イ) 亡はれし羊の事。
(ロ) 失はれし金錢の事。
(一三四) 譬の積さ。……一五四
(ハ) 放蕩なる子の事。
(一三五) 不正なる管理者の譬——其教訓。……一五六
(一三六) 富者とラザリの譬。……一五八
(一三七) 門徒に對する諸教訓。……一五九
(一三八) 十人の癩病者を醫さる。……一六〇
(一三九) 神國の來臨の事。……一六一
(一四〇) 不義なる裁判官の譬。……一六二
(一四一) 「ファリセイ」と稅吏との譬。……一六三
(一四二) 主・張幕節に當りてイウデヤに往く。……一六三

(一四三) 張幕の節筵の半に、主イエス聖殿に上る。……六四
(一四四) 主イエス、節筵の末日に聖殿に上る。……六七
(一四五) 節筵の末日の朝に、主悔改せる罪人を赦す。……六八
(一四六) 衆民に對する主の教訓。(イ)我は世の光なり。……六九
(一四七) (ロ)主己の死の事を告ぐ。……七〇
(一四八) (ハ)罪の奴隷の事。……七一
(一四九) (ニ)主己の永在を說く、イウデヤ人此れが爲めに激す。……七三
(一五〇) 生れながらの瞽者を醫さる。……七四
(一五一) 此事の衆民の風說及び「ファリセイ」人の說明。……七五
(一五二) 醫されし瞽者の表信。……七七
(一五三) 善牧者の事の教訓。……七八
(一五四) 主重修節に臨まる。……七九
(一五五) 主イオルダンの外に在き彼處に居らる。……八一
(一五六) 離婚の事の問に答へらる。……八一

(一五七) 無妻の事の教訓。……八二
(一五八) 幼兒を祝福せらる。……八三
(一五九) 富める少年に一切を舍つる事を說かる。……八三
(一六〇) 主の爲に一切を舍てし者の許約。……八四
(一六一) 葡萄園に働く事の譬。……八五
(一六二) 主ラザリを復活せしめんとて往かる。……八六
(一六三) 主己の前途の死と復活の事を說く。……八八
(一六四) ゼワヱテイの子の母及び其子の願ひ、主の此に對する教訓。……八八
(一六五) イエリホンに入る時、一人の瞽者を愈さる。……九〇
(一六六) 主ザクヘイを悔改に導く。……九〇
(一六七) ザクヘイの家に於て、銀十斤の譬。……九一
(一六八) イエリホンを出る時、二人の瞽者を愈さる。……九三
(一六九) ラザリの復活。……九三
(一七〇) 「シネドリオン」主を殺さんと決議す。主エフライムに往く。……九六

(一七一) 衆民、主を尊ぬ。逾越節の六日前、ワイファニヤに於ける晩餐。……一九七
(一七二) 主殿かにイエルサリムに赴かる。……一九八
(一七三) 全城の騒擾。聖殿を浄めらる。醫を施す。童子の讃揚。……二〇一
(一七四) エルサリン人、主イエスを見んことを望む。……二〇二
(一七五) 主遂に城外に宿らる。……二〇四
(一七六) 無花果樹を詛はる。及び其教訓。……二〇五
(一七七) 再び聖殿を浄めらる。……二〇六
(一七八) 無花果樹を枯されし事に就きて、再び教訓せらる。……二〇六
(一七九) 聖殿に於ける説教。(イ)何の權を以て之を行ふかとの問ひに對する答。……二〇七
(一八〇) (ロ)二人の子の譬。……二〇八
(一八一) (ハ)葡萄園丁の譬。……二〇八
(一八二) (ニ)王子の婚筵に招がれたる者の譬。……二一〇
(一八三) 聖殿に於ける説教。税とケサリに納むるは宜しきや否や。……二一一

(一八四) 復活の事の問ひに就きて「サッドゥケイ」等を辱かしめらる。……二一二
(一八五) 聖殿に於ける説教。何の誡か大なる。……二一三
(一八六) 主、パリストスは誰の子なるか。……二一四
(一八七) 聖殿に於ける説教。學士「ファリセイ」等を詰めらる。……二一四
(一八八) 寡の献資。……二一八
(一八九) エレオン山の途にて、聖殿の運命を預言せらる。……二一八
(一九〇) エレオン山に於ける説教。主の再臨、及び世來の徴候。……二一九
(一九一) イエルサリムの運命の預言。……二二一
(一九二) 主の再臨の事。……二二二
(一九三) 警醒し且祈禱せよ。……二二三
(一九四) (上)怖る可き審判の狀。……二二七
(一九四) (下)十字架に釘せらるる二日前の主、パリストス。……二二九
(一九五) 主を殺さんとの「シネドリオン」の謀議。……二二九
(一九六) ワイファニヤのシモンの宅に於る晩餐。……二二九

(一九七) 主を賣りしイウダ……二三〇
(一九八) 機密の晩餐。—逾越節筵の準備……二三一
(一九九) 機密の晩餐—其始……二三一
(二〇〇) 主門徒の足を洗ひ給ふ……二三二
(二〇一) 主己を斥す者を告げらる……二三四
(二〇二) 聖體聖血の機密を立てらる……二三五
(二〇三) 誰か大なる……二三六
(二〇四) 告別の教訓—教訓の始……二三六
(二〇五) 門徒を慰めらる……二三七
(二〇六) 指導の教訓……二四〇
(二〇七) 約束……二四三
(二〇八) 救主の神父に對しての祈禱……二四六
(二〇九) 晩餐の終結……二四八
(二一〇) ゲフシヤニヤに趨かる……二四九

(二一一) 主の苦み—爵の事の祈禱……二五〇
(二一二) 主己を罪人の手に付さる……二五二
(二一三) アンナの館に於ける主イイエス……二五四
(二一四) カイアファの法庭に於ける主イイエス……二五六
(二一五) ペトル主を諱む……二五七
(第一)「イオアン福音に依る」
(二一六) ペトル主を諱む……二五八
(第二)「マトフェイ及びマルコ福音に依る」
(二一七) ペトル主を諱む……二五九
(第三)「ルカ福音に依る」
(二一八) 番卒主を辱かしむ……二五九
(二一九) 主の苦み—主ピラトに付さる……二六〇
(二二〇) ピラトの法庭に於ける主イイエス……二六〇
(二二一) 主イイエス、イロド王の前に曳かる……二六二

(二二二) ピラト、主を釋かんと力めて遂に得ず。……二六三
(二二三) 主を鞭つ。……二六五
(二二四) 視よ人なり。……二六五
(二二五) 裁判の宣告。……二六六
(二二六) ゴルゴファに曳かる。……二六七
(二二七) 主の苦み、—主十字架に釘せらる。……二六八
(二二八) 主の十字架上の七聖言。……二七〇
(二二九) (一)釘せし者の爲の祈禱。……二七〇
(二三〇) (二)敬虔なる盜賊に。……二七一
(二三一) (三)生神女及びイオアンに。……二七一
(二三二) (四)晦冥。(四)神父に向ひ。……二七一
(二三三) (五)渴く。……二七二
(二三三) (六)成れり。……二七二
(二三四) (七)父よ、爾の手に我が靈を付す。及び死。……二七二

(二三五) 主の死せし休徵。……二七二
(二三六) 主に從へる女徒の赤誠。……二七三
(二三七) 其脅を刺せり。……二七三
(二三八) 墓に置く。……二七四
(二三九) 墓に置かれし事を證するの女徒。……二七五
(二四〇) イウダの亡び。……二七七
(二四一) 安息日の夜に、女徒等墓に至る。……二七六
(二四二) 墓に番兵を置く。……二七七
(二四三) 主ハリストスの復活。……二七七
(二四四) 主復活後の現れの一般。……二七八
(二四五) 墓に於ける携香女「マグダリナ」のマリヤ。主始めて現はる。……二七八
(二四六) 同携香女 イオアンナ其他の婦。神使の現れ。……二八〇
(二四七) 同携香女 イアコフの母マリヤ及びサロミヤ。主の第二……二八一

(二四八) 婦の言に對する門徒の不信。主第三にペトルに現はる。……二八一
(二四九) イウデヤ人主の復活の眞實を覆はんと試ひ。……二八三
(二五〇) 主「エムマウス」に於て門徒等に現はる。……二八四
(二五一) 主其夜にフォマの外の諸門徒に現はる。……二八六
(二五二) 主第六にフォマ及び諸門徒に現はる。……二八七
(二五三) 主第七にプワイリアダの海濱に於て現はる。奇蹟の魚漁。……二八八
(二五四) 主の第七の現はれ。魚漁の後の教訓……二八九
(二五五) 主の第八の現れ。山に於て約五百人の兄弟に現はる。……二九一
(二五六) 主の第九の現れ。使徒イアコフに。……二九二
(二五七) 主の昇天。……二九三
(二五八) 第十の現れ……二九四

主イエスキリスト一代記

主教　フェオファン師編

福音の確證。(ルカ一ノ一—四。)

我等の中に明に知られたる事即始より言の實見者及び役者たりし者が、我等に傳へたる事に就きて多くの者が手を擧げて傳記を作るに因り、尊憲なるフェオフィルよ、我も凡の事を始より審に推し原ね、次第を以て爾の爲に書さんことの思を起せり、

(二) (上) 救主の御系圖。(マトフェイ一—一七。)

ダワイドの子アウラアムの子イイスハリストスの族譜

アウラアムはイサアクを生み、イサアクはイアコフを生み、イアコフはイウダ及び其兄弟を生み、イウダはファマリに因りてファレス及びザラを生み、ファレスはエスロムを生み、エスロムはアラムを生み、アラムはアミナダフを生み、アミナダフはナアッソンを生み、ナアッソンはサルモンを生み、サルモンはラハフに因りてワォズを生み、ワォ

史音聖

ヨズはルフに因りてオワドを生みオワドはイニッセイを生みイニッセイはダワド王を生みたり。

ダワド王はソリヤの妻に因りてソロモンを生みソロモンはロワアムを生みロワアムはアワヤを生みアワヤはアサを生みアサはイヨサフトを生みイヨサフトはイヨラムを生みイヨラムはオジヤを生みオジヤはイヨアフアムを生みイヨアフアムはアハズを生みアハズはエゼキヤを生みエゼキヤはマナシヤを生みマナシヤはアモンを生みアモンはイヨシヤを生みイヨシヤはイヨアキムを生みイヨアキムはワワイロンに徙さるる前イエホニヤ及び其兄弟を生みたり。

ワワイロンに徙されし後イエホニヤはサラフイイリを生みサラフイイリはゾロワワヒリを生みゾロワワヒリはアワイウドを生みアワイウドはエリアキムを生みエリアキムはアゾルを生みアゾルはサドクを生みサドクはアヒムを生みアヒムはエリウドを生みエリウドはエレアザルを生みエレアザルはマトフアンを生みマトフアンはイアコフを生みイアコフはイオシフを生めり。取はるマリヤの夫なり。マリヤよりハリストスと稱よる主イイスは生れたり。

神の獨一子
（第三章）

是の如く世を歴ることアウラアムよりダワィドに至るまで十四代、ダワィドよりワワィロンに徙さるるに至るまで亦十四代、ワワィロンに徙されしよりハリストスに至るまで又十四代なり。

（二）（下）同上。（ルカ三ノ二三―三八。）

斯の如くに主イイススハリストスを以て、イオシフの子となせり。イオシフの父はイリイ、其父はマトファト、其父は、レワィ、其父はメルヒ、其父はイアンナ、其父はイオシフ、其父はマッタフィイ、其父はアモス、其父はナウム、其父はエスリム、其父はナゲイ、其父はマアフ、其父はマッタフィイ、其父はセメイ、其父はイオシフ、其父はイウダ、其父はイオアンナ、其父はリサ、其父はゾロワワェリ、其父はサラフィイリ、其父はニリ、其父はメルヒ、其父はアディイ、其父はコサム、其父はエルモタム、其父はイル、其父はイオシイ、其父はエリエゼル、其父はイオリム、其父はマトファト、其父はレワィ、其父はシメオン、其父はイウダ、其父はイオシフ、其父はイオナン、其父はエリヤキム、其父はメレア、其父はアイナン、其父はマッタファ、其父はナファン、其父はダワィド、其父はイエッセイ、其父はオワィド、其父はワォヲズ、其父はサルモン、其父はナアッソン、其父はアミナダフ、其父はアラム、其父は

エスロム、其父はファレス、其父はイウダ、其父はイアコフ、其父はイサアク、其父はアウラアム、其父はテラ、其父はナホル、其父はセルフ、其父はラガフ、其父はフアレク、其父はエヘル、其父はサラ、其父はカイナン、其父はアルフアクサド、其父はシム、其父はノイ、其父はラメフ、其父はマフサラ、其父はエノフ、其父はイアレド、其父はマレレイル、其父はカイナン、其父はエノス、其父はシフ、其父はアダム、其父は神なり。

（三）藉身の事歴。（イオアンノー一―一八）。

太初に言有り、言は神と共に在り、言は即神なり。是の言は太初に神と共に在り。萬物は彼に由りて造られたり、凡そ造られたる者には、一も彼に由らずして造られしは無し。彼の中に生命有り、生命は人の光なり。光は暗に照り、暗は之を蔽はざりき。

神より遣されし人あり、其名はイオアンなり。彼は證の爲に來れり、光の事を證し衆人をして彼に因りて信せしめん爲なり。彼は光に非ず、乃光の事を證せん爲に遣されたり。

眞の光あり、凡そ世に來る人を照す者なり。彼嘗て世に在り、世は彼に由りて造られたり、而して世は彼を識らざりき。己に屬する者に來れり、而して己に屬する者は彼を受けざりき。彼を受け、其名を信ずる者には、彼神の子と爲る權を賜へり。是れ血氣に由るに非ず、情欲に由るに非ず、人欲に由るに非ず、乃神に由りて生れしの者なり。

言は肉體と成りて、我等の中に居りたり、恩寵と眞實とに滿てられたり。我等彼の光榮を見たり、父の獨生子の如き光榮なり。イオアン彼の事を證し、呼びて曰へり、我が嘗て、我の後に來る者は、我の前と爲れり、蓋其本我より先なる者なりと言ひしは、即斯の人なり。

彼の充滿より我等皆恩寵の上に恩寵を受けたり。蓋律法はモイセイに由りて授けられ、恩寵と眞實とは主イエスハリストスに由りて來れり。

神を見し人未だ嘗てあらず、唯獨生の子、父の懷に在る者は、彼を彰せり。

（四）アルファンゲル、前驅者イオアンの誕生を報ず。及び其懷妊（ルカ一ノ五―二五）。

イウデヤの主イロドの時、アヴィヤの班に屬する司祭にザハリヤと名づくる者あり、其妻はアアロンの裔にして、名をエリサヴェタと云ふ。二人ながら神の前に義なる

者にして、主の一切の誡命禮儀を虧くるなく行へり。彼等に子なかりき、エリサワエタは妊まざる者たりし故なり、二人共に年已に老いたり。ザハリヤが其班の次に依りて、司祭の職を神の前に行ふに値りて、司祭例に循ひ、籤を掣きて、主の殿に入りて香を焚くを得たり。香を焚く時、衆民外に在りて禱れり。主の天使ザハリヤに現れて香壇の右に立てり。ザハリヤ之を見て驚き且懼れたり。天使彼に謂へり、ザハリヤ、懼るる勿れ、蓋爾の祈禱は聞かれたり、爾の妻エリサワエタ子を生まん、爾之をイオアンと名づけん。爾には喜と樂とあらん、且多くの者は其生るるに因りて悅ばん。蓋彼は主の前に大なる者とならん、酒と諸醪とを飲まず、其母の胎よりして聖神に充てられん。彼はイズライリの諸子の多くの者を轉じて主彼等の神に歸せしめん。彼はイリヤの精神と能力とを以て主の前に行かん、父の心を子に逆ふ者を義者の智恵に歸らしめて、備へられたる民を主に進めん爲なり。ザハリヤ天使に謂へり我何を以て之を知らん、蓋我老いたり、我が妻も年邁けり。天使彼に答へて曰へり、我はガウリイル神の前に立つ者なり、使を奉じて爾に告げ、爾に此の福音を爲す。視よ、爾瘖となり、言ふ能はずして、此の事の成る日に至らん、我が言を

信せざりし故なり、是の言は時に及びて必應はん。時に民はザハリヤを候ちて、其殿の内に久しく在るを奇めり。遂に出でて彼等に言ふ能はざれば、乃其殿の内に異象を見しことを曉れり、彼は首を以て彼等に意を示し、而して瘖たりき。其職事の日滿つるに及びて、家に歸れり。此の日の後其妻エリサワエタ妊みて隱れ居りしこと五月にして曰へり、主は斯く我に爲せり、彼は此の日に於て我を眷みて、我が耻を人々の間に洒がしめたり。

（五）アルファンゲル、童貞女に彼が神子を生む事を福音せらる。（ルカ一二六—三八。）

第六月に於て、天使ガウリイルは神より使を奉じて、ガリレヤの邑ナザレトと名づくる所にダワイドの家の人、名はイオシフと云ふ者に聘せられたる處女に臨めり、處女の名はマリヤなり。天使入りて之に謂へり、恩寵を蒙れる者慶べよ、主は爾と偕にす、爾は女の中に祝福せられたり。女彼を見て其言を訝り、此の問安は何事ならんと思へり。天使之に謂へり、マリヤ懼るる勿れ、蓋爾は神の前に恩寵を獲たり。視よ、爾妊みて

子を生まん、其名をイエスと名づけん。彼は大なる者となりて、至上者の子と稱へられん、主神は彼に其祖ダヴィドの位を與へん、彼は世世ヤコブの家に王となりて、其國終なからん。

マリヤ天使に謂へり、我人に適かざるに、如何にして此の事あらん。天使彼に答へて曰へり聖神爾に臨み、至上者の能爾を蔭はん、故に生ひ所の聖なる者も神の子と稱へられん。視よ、爾の親戚エリサヴェタ年老いて子を妊めり、素妊まざる者と稱せられしに、今已に六月なり。蓋神に在りては凡そ其言ふ所能はざることなし。

マリヤ曰へり、我は主の婢なり、爾の言の如く我に成るべし。

（六）至聖童貞女、エリサヴェタを訪ふ。（九ルカ一ノ三—五六。）

當日マリヤ起ちて、丞に山地に適き、イウダの邑に至り、ザハリヤの家に入りて、エリサヴェタに安を問へり。エリサヴェタマリヤの安を問ふを聞きし時、胎兒其腹の内に躍れり。エリサヴェタ聖神に滿てられ、大聲に呼びて曰へり、爾は女の中に祝福せられたり、爾の腹の果も祝福せられたり。我が主の母我に臨めり、我何より此を得たるか。蓋爾が安を問ふ聲の我が耳に入りし時、胎兒我が腹の内に喜び躍れり。信

至聖童女の福音
（第五章）

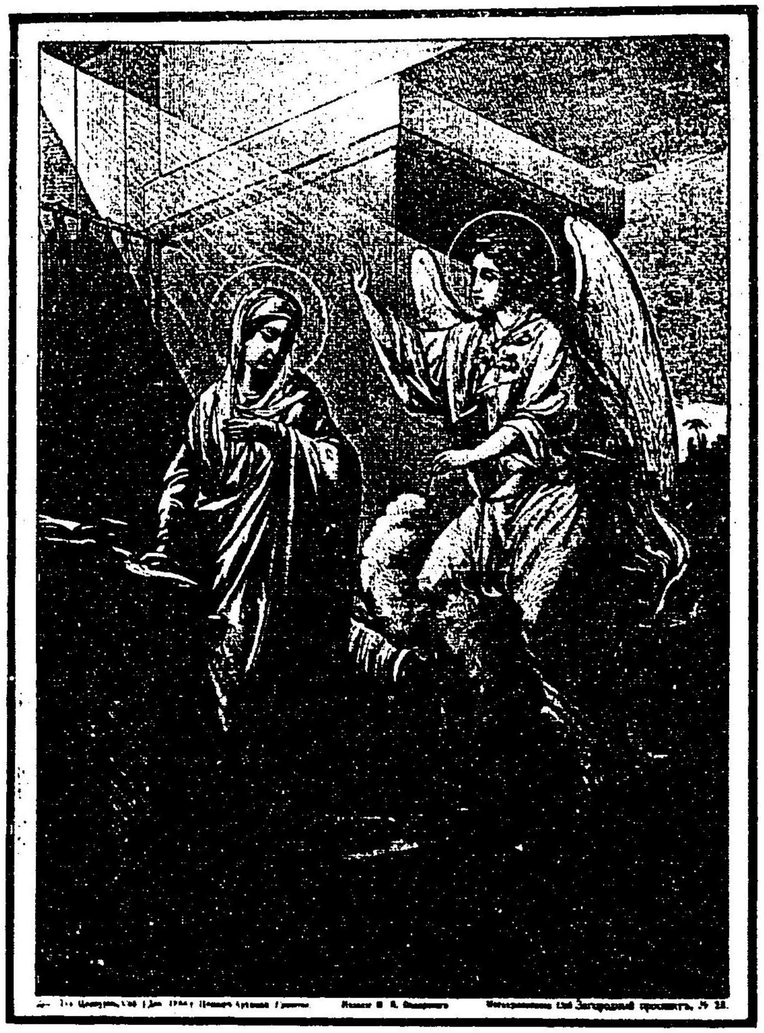
子を生まん、其名をイエスと名づけん。彼は大なる者となりて、至上者の子と稱へられん、主神は彼に其祖ダヴィドの位を與へん、彼は世世イアコフの家に王となりて、其國終なからん。

マリヤ天使に謂へり、我人に適かざるに、如何にして此の事あらん。天使彼に答へて曰へり聖神爾に臨み、至上者の能爾を蔭はん、故に生む所の聖なる者も神の子と稱へられん。視よ、爾の親戚エリサヴェタ年老いて子を妊めり、素妊まざる者と稱せられしに、今已に六月なり。蓋神に在りては凡そ其言ふ所能はざることなし。

マリヤ曰へり、我は主の婢なり、爾の言の如く我に成るべし。

（六）至聖童貞女、エリサヴェタを訪ふ。（ルカ一ノ三一—五六。）

當日マリヤ起ちて、丞に山地に適き、イウダの邑に至り、ザハリヤの家に入りて、エリサヴェタに安を問へり。エリサヴェタマリヤの安を問ふを聞きし時、胎兒其腹の内に躍れり。エリサヴェタ聖神に滿てられ、大聲に呼びて曰へり、爾は女の中に祝福せられたり、爾の腹の果も祝福せられたり。我が主の母我に臨めり、我何より此を得たるか。蓋爾が安を問ふ聲の我が耳に入りし時、胎兒我が腹の内に喜び躍れり。信



至聖童女の福音
（第五章）

せし者は福なり、蓋主より彼に告げられし事は必成らん。マリヤ曰へり、我が靈は主を崇め我が神は神我が救主を悅べり、蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂はん。蓋權能者は我に大なる事を成せり、其名は聖なり、其矜恤は世世彼を畏るる者に臨まん。彼は其臂の力を顯し、心の意の驕れる者を散らせり。權ある者を位より黜け、卑しき者を擧げ、飢うる者を善き物に飽かしめ、富める者を空しく返らしめたり。其僕イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其裔とを世世に恤まんことを記念せり。マリヤはエリサワェタと共に居りしこと三月にして、其家に歸れり。

(七) 先驅イオアンの誕生及び割禮。(ルカ一ノ七—八〇。五)

エリサワェタに產期屆りて乃子を生めり、彼の近隣と親戚とは主が其大なる矜恤を彼に垂れしを聞きて彼と偕に喜べり。

第八日に及びて、子に割禮を行はんが爲に來り、之を其父の名に依りて、ザハリヤと名づけんとせしに、其母答へて曰へり、否之をイオアンと名づく可し、彼等曰へり爾が親戚の中に一人も此の名を名つくる者なし。

遂に其父に形を以て、如何に之を名づけんと欲するを問ひしに、彼簡を請ひて、書して曰へり其名はイオダンなりと、皆之を奇とせり、直に其口啓け、舌解け、彼言を發して神を祝讃せり、其近隣の者皆懼れ、且此等の事遍くイウデヤの山地に揚れり、凡そ聞きし者其心に之を藏めて曰へり、此の子は若何にならんと、主の手は彼と偕にせり。

其父ザハリヤ聖神に滿てられ預言して曰へり。

祝讃せらるる哉主イズライリの神、蓋其民を眷みて之に贖を爲し、我等の爲に救の角を其僕ダヴィドの家に興せり、古世より其聖なる預言者の口を以て言ひしが如し、即我等を我が諸敵及び凡そ我等を惡む者の手より救ひ、以て矜恤を我が先祖に施し、其聖なる約、即我が祖アウラアムに矢ひたる誓を記念せん、謂ふ我等に我が諸敵の手より救はれし後、懼なく、彼の前に在りて聖を以て義を以て、生涯彼に事へしめんと。

子よ爾も至上者の預言者と稱へられん、蓋主の面前に行きて、其道を備へ、彼の民に其救は即諸罪の赦にして、我が神の矜恤に因ることを知らしめん。此の矜恤に因り

て、東旭は上より我等に臨めり、幽暗と死の蔭とに坐する者を照し、我等の足を平安の道に向はしめん爲なり。

子は漸く成長し、精神益强健にして、其イズライリに顯るる日に至るまで野に居りき。

（八）

イオシフに神子の藉身の奥儀を啓示せらる。（マトフエイ一ノ二八―二五。）

主イイスの母マリヤイオシフに聘せられて未だ婚せざる先に、聖神に由りて孕めること見れたり、其夫イオシフは義人にして、之を顯にせんことを欲せず、私に彼を離さんことを望めり。然れども此の事を思へる時、視よ、主の使夢に彼に現れて曰へり、ダヴィドの子イオシフよ、爾の妻マリヤを納ることを懼るる勿れ、蓋其内に孕まれし者は聖神に由るなり、彼は子を生まん、爾其名をイイスと名づけん、彼其民を其罪より救はんとすればなり。

凡そ此の事の成りしは、主が預言者を以て言ひし所に應ふを致す、曰く、視よ、童女孕みて、子を生まん、其名はエムマヌイルと稱へられん、譯すれば神我等と偕にするなり。

イオシフ寐より起きて、主の使の彼に命せし如く行ひ、其妻を納れたり、惟未だ室を同じくせざるに其家子を生むに迫べり、則其名をイエスと名づけたり。

（九）主ハリストスの降誕。（マトフェイ一ノ一八。ルカ二ノ一七。）

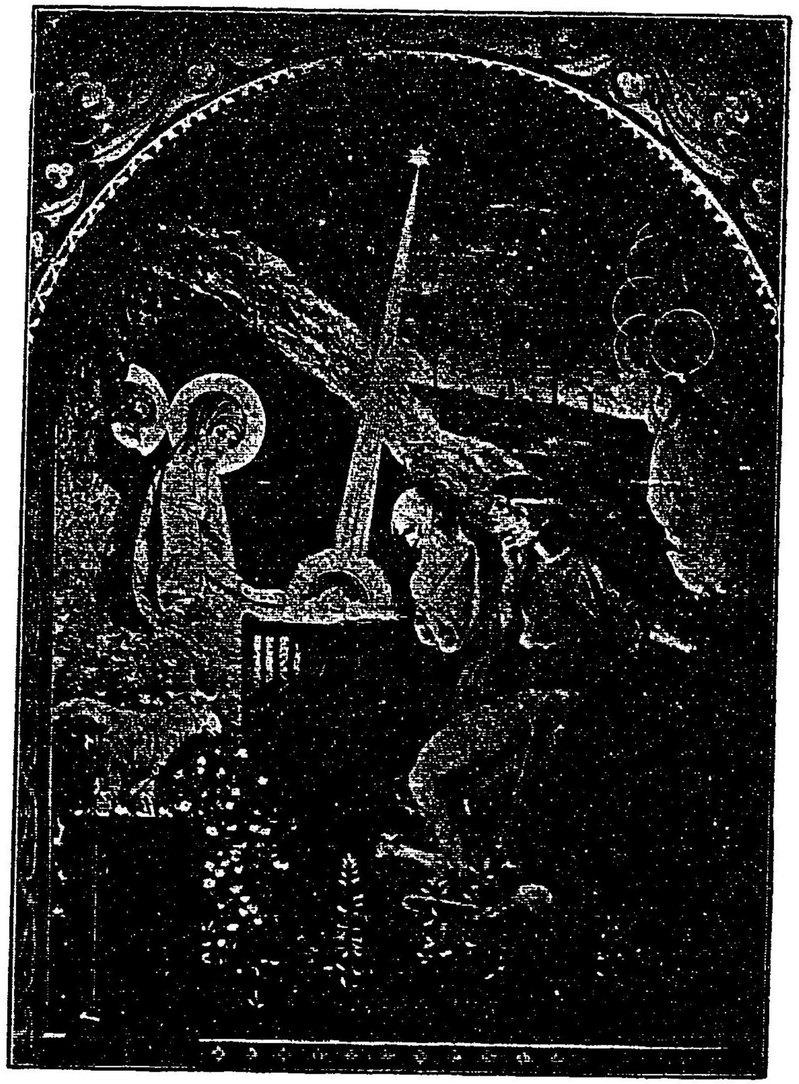
是に於て衆人籍に登らん爲に各其邑に往けり。

イオシフも亦ダヴィドの宗族と血統となるを以て、マリヤ、其聘せられたる妻、已に孕める者と偕に籍に登らん爲に、ガリレヤの邑ナザレトより、イウデヤに、ダヴィドの邑ヴィフレエムと名づくる處に往けり。

彼等が彼處に在る時に、產日屆れり。乃其家子を生み、之を襁褓に裹みて、櫃に置けり、旅館には彼等の爲に居る所なかりし故なり。

（一〇）神使の讃揚並に牧者の來拜。（ルカ二ノ八―二〇）。

斯の地に牧者あり、夜間野に於て其羊の群を守れり、視よ、主の天使彼等の前に立ち、主の光榮彼等を環り照せり、彼等大に懼れたり。天使彼等に謂へり、懼るる勿れ、蓋視よ我爾等に大なる喜、万民に及ばんとする者を福音す。今日爾等の爲に、ダヴィドの邑に於て、救主、即主ハリストス生れたり。爾等襁褓に裹まれたる嬰兒の櫃に臥



主ハリストストの降誕
（第十章）

せるを見ん、是れ其徴なり。

倏天使と偕に、衆くの天軍あり、神を讃美して曰へり、至高きには光榮神に歸し地には平安降り、人には惠臨めり。

天使等が彼等を離れて天に升りし時、牧者互に言へり、ワイプレエムに往きて、彼處に成りし事、主が我等に示しし所を觀ん、乃急ぎ來りて、マリヤとイオシフ及び槽に臥せる嬰兒を見たり。既に見て此の兒に關して、彼等に告げられし事を語れり。聞きし者皆牧者が語りし事を奇とせり。惟マリヤは、此等の言を悉く、其心に藏めて之を守れり。

牧者は凡そ彼等に告げられし如く、聞きし事見し事の爲に神を讃榮讃美して返れり。

（一一）主の割禮及び迎接。（ルカ二ノ一―廿九。二）。

八日滿ちて、嬰兒に割禮を行ふべき時至りたれば、其名をイエスと名づけたり。即其未だ孕まれざる先に、天使の名づけし所なり。

モイセイの律法に依りて潔の日の滿つるに及び、嬰兒を携へてイエルサリムに上

れ、之を主に奉らん爲なり。主の律法に錄されしが如し、曰く凡そ初めて胎を開く男子は、主に聖なりと稱へらるべしと。又主の律法に言ふ所に依りて、雙の班鳩或は二の雛鴿を祭に獻げん爲なり。

視よ、イエルサリムにシメオンと名づくる人あり。斯の人義にして敬虔なり。イスライリを慰むる者を俟ち、而して聖神彼に臨めり、彼に聖神に由りて主のハリストを見ざる先には死を見ざらんと示されたり。

彼神に依りて殿に來れり、父母が嬰兒主イイスを携へて、之に律法の例を行はん爲に入りし時、彼は嬰兒を其手に取り、神を祝讃して曰へり。

主宰よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり、爾が万民の前に備へし者なり、是れ異邦人を照す光、及び爾の民イズライリの榮なり。

イオシフ及び嬰兒の母は、彼に關して言はるる事を奇とせり。シメオン彼等を祝福して其母マリヤに謂へり、視よ、此の子は置かれてイズライリの中に衆くの者の頽れ、又は興るを致し、且駁論の號と爲ちん、衆くの心の念の露れん爲なり、爾にも劒

主の迎接
（第十一章）

は、靈を貫かん。

又預言女アンナあり、アシルの支派ファヌイルの女なり。處女の時より夫と偕に居りしこと七載、年大に老いたり、齡約八十四の嫠にして、殿を離れず、齊と祈禱とを以て晝夜奉事せし者なり。彼も斯の時來り就きて主を讃榮し、且此の嬰兒の事を、凡そイエルサリムに在りて贖を俟つ者に語れり。

既に主の律法に遵ひ、悉く之を竟りて、ガリレヤの故邑ナザレトに歸れり。

（一二）博士の來拜。（マートフェイ二一一二〇）。

主イエスはイロド王の時、イウデヤのワイフレエムに生れしに、視よ、博士數人東よりイエルサリムに來りて曰く、生れたるイウデヤ人の王は何處に在るか、蓋我等其星を東に見たれば、彼を拜せん爲に來れり。

イロド王之を聞きて心騷げりイエルサリム舉りて亦然り、乃凡の司祭長と民間の學士とを集めて彼等に問へり、ハリストスは何處に生るべきか。彼等曰へり、イウデヤのワイフレエムに於てす。蓋預言者に因りて斯く錄されたり、云くイウダの地ワイフレエムよ、爾はイウダの諸郡の中に於て、聊も小しとせず、蓋爾より我が民イズ

ライリを牧せんとする君は出でんと。

是に於て、イロド密に博士を召し、詳に星の現れし時を問ひ、彼等をワイフレエムに遣して曰へり、往きて細に嬰兒の事を尋ね、之に遇はば我に告げよ、我も往きて彼を拜せん爲なり。

彼等王に聞きて往けり。視よ、嘗て東に見たる星は、彼等に先だちて行き、遂に嬰兒の在る所に至りて其上に止れり。彼等星を見て喜に勝へざりき。乃家に入りて、嬰兒の其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し、其寶盒を啓きて、之に禮物を獻じたり。即黃金・乳香・沒藥なり。

博士等既にして、夢の中にイロドに返る可からずとの默示を得て、他の途より其本地に歸れり。

（一三）エギペトに遁るる事及び其歸還。（マトフエイ二ノ一三―二三。）

博士等の歸りし後、視よ、主の使夢にイオシフに現れて曰く、起きて嬰兒と其母とを携へてエギペトに奔り、彼處に在りて、我が爾に告ぐるを待て、蓋イロドは嬰兒を索めて、之を殺さんと謀る。彼起きて夜間嬰兒と其母とを携へて、エギペトに往き、彼

處に在りて、イロドの死するに至れり。是れ主が、預言者を以て言ひし所に應ふを致す、云く我吾が子を召してエギペトより出だせりと。

當時イロドは己が博士に欺かれたるを見て大に怒り、人を遣して、曾て詳に博士に問ひし時を按り、ワイフレエム及び其四の境の內なる、二歲以下の嬰兒を盡く殺せり。是に於て預言者イエレミヤの言ひし事應へり。云くラマに悲み哭き甚しく號ぶ聲は聞ゆ、ラヒリは其子の爲に哭きて慰むるを欲せず、子の無きが故なりと。

イロドの死せし後、視よ、主の使エギペトに於て、夢にイオシフに現れて曰く、起きて嬰兒と其母とを携へて、イズライリの地に往け、蓋嬰兒の生命を索むる者は死せり。

彼起きて嬰兒と其母とを携へて、イズライリの地に來れり。

惟アルヘライが其父イロドに繼きて、イウデヤに王たりと聞きて、彼處に往くことを懼れ、乃夢の中に默示を得て、ガリレヤの境に往き、ナザレトと名づくる邑に來りて、此に居りたり。諸預言者を以て、彼はナザレイと稱へられんと言はれし事に應ふを致す。

（一四）聖城に於ける十二歳の主。（ルカ二ノ四〜五二。）

子たる主イエスは漸く成長し、精神益〻強健にして、智慧充ち神の恩寵は彼に臨めり。

其母父歳毎に逾越節筵にイエルサリムに往けり、彼の十二歳になりし時、亦節筵の例に遊ひて、イエルサリムに上りしに、日卒りて返る時、童子主イエスイエルサリムに留れり。イオシフと其母とは之を知らずして、彼は同行者の中に在りと意へり。一日程を行きて、彼を親戚知己の間に尋ねしに遇ざりき。乃彼を尋ねてイエルサリムに返れり。

三日の後、彼に殿に遇へるに、彼教師の中に坐して、且聽き且問へり。彼に聞く者皆其智慧と其應對とを奇とせり。父母彼を見て駭けり。其母彼に謂へり、兒よ何ぞ我等に斯く行ひたる、視よ、爾の父と我と憂ひて、爾を尋ねたり、彼曰へり、奚ぞ我を尋ねたる、豈我は我が父に屬する所に在るべきを知らずや。

然れども彼等は其言ひし言を曉らざりき。イエス彼等と偕に下りて、ナザレトに來り、彼等に順ひ居りき。彼の母は此等の言を悉く其心に藏めたり。

主イエスは智慧と齢と神及び人人の寵愛とに益〻進めり。

（一五）先驅その職に就き授洗す。（マトフエイ三ノ一〜六。マルコ一ノ一〜五。ルカ三ノ一〜六。）

ティベリイケサリ在位の十五年、ポンティイピラトイウデヤの方伯たり、イロドガリレヤの分封の君たり、其兄弟フィリップトゥレヤ及びトラホニダの地の分封の君たり、リサニイアアビリニヤの分封の君たり、アンナ及びカイアファの司祭長たる時、神の言はザハリヤの子イオアンに野に臨めり。

彼はイオルダンの近傍を周く行きて、罪の赦の爲に悔改の洗禮を傳へたり。

曰く、悔改せよ、蓋天國は邇づけり。

是れ神の子主イエスハリストスの福音の始なり。諸預言者に錄されしが如し、

云く視よ、我が使を爾の面前に遣はし、爾に先たちて爾の道を備へしめん（第三章第一節）。

此の人は乃預言者イサイヤの言ひし者なり。預言者イサイヤの言の書に錄せるが如し、云く野に呼ぶ者の聲ありて云ふ、主の道を備へ、其徑を直くせよ、凡の谷は塡められ、凡の山と岡とは卑くせられ、曲れるは直くせられ、險しきは平にせられん。而して凡の肉身は神の救を見んと（〇イサイヤ四〇ノ三〜五。）

イオアンは駱駝の毛衣を衣、腰に皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜とを食へり。

當時イエルサリムと、全イウデヤと、イオルダンの四方と出でて彼に就き、己の罪を認めて、イオルダンに於て彼より洗禮を受けたり。

イオアンの證は左の如し、イウデヤ人イエルサリムより司祭及び「レワイト」等を遣して、彼に爾は誰たると問ひし時、彼承けて諍まざりき、承けて曰く、我はハリストスに非ず。

又彼に問へり、然らば何ぞ、爾はイリヤなるか。曰く、非ず。預言者なるか。答へて曰へり、否。彼等之に謂へり、爾は誰ぞ、我等を遣しし者に答へを爲さしめよ、爾は己の事を如何に云ふか。彼曰へり、我は野に呼ぶ者の聲、主の道を直くせよと云ふ者なり、預言者イサイヤの言ひしが如し。

遣されし者は「ファリセイ」等に屬せり。彼等又之に問ひて曰へり、爾ハリストスに非ず、イリヤに非ず、預言者に非ざれば何ぞ洗を授くる。

（一六）先驅の教訓。（マトフェイ三ノ七―一〇。ルカ三ノ七―一四。）

イオアンは「ファリセイ」及び「サッドゥケイ」等の多く其洗を受けん爲に來るを見て、之に謂へり、蝮の類よ誰か爾等に將來の怒を避くることを示したる、然らば悔改に合ふ果を結べ、自ら意ひて我等の父はアウラアムなりと云ふ勿れ、蓋我爾等に語ぐ神は此の石よりアウラアムの爲に子を興すを能す、既に斧も樹の根に置かる、凡そ善き果を結ばざる樹は斫られて火に投げられん。

民彼に問ひて曰へり、然らば我等何を爲すべきか。彼答へて曰へり、二の衣を有てる者は有たざる者に與へよ、食を有てる者も然せよ。

稅吏も亦洗を受くる爲に來りて彼に謂へり、師よ我等何を爲すべきか。彼答へて曰へり、爾等に定められたる者より多く取る勿れ。

軍士も亦彼に問ひて曰へり、我等は何を爲すべきか。彼等に謂へり、人を劫ず勿れ誣ふる勿れ、爾等の俸給を以て足れりとせよ。

（一七）聖イオアン主ハリストスの事を宣ぶ。（ルカ三ノ一五―一八。マトフェイ三ノ一―一一。マルコ一ノ七―八。）

民が望を懷きて、皆其心にイオアンを是れハリストスに非ずやと度りし時、イオアン衆に答へて曰へり、我水を以て爾等に洗を授く然れども更に我より强き者は來

る、我其履の帶を解くにも堪へず、彼は聖神及び火を以て爾等に洗を授けん。其箕は其手に在り、彼は其禾場を淨めて、麥を其倉に斂め、糠を滅ざる火に燼かん。其他多くの事を敎へて民に福音せり。

（一八）主の洗禮。（マトフェイ三ノ一三―一七。マルコ一ノ九―一一。ルカ三ノ二一―二三。）

彼の日に當り、民皆イオアンより洗を受くる時、イエスガリレヤのナザレトより來りて、イオルダンに於てイオアンより洗を受けんとせり。

イオアン彼を止めて曰く、我爾より洗を受くべきに、爾我に就くか。

而して主イエスはイオルダンに於てイオアンより洗を受けたり。

彼洗を受けて祈れるに、視よ、天開けて、聖神見ゆる形を以て鴿の如く其上に降れり。

イオアンも亦直に天開け、神の神鴿の如く、降りて其上に臨むを見たり。且視よ、天より聲ありて、洗を受けし者に云ふを聽きたり、曰く爾は我の至愛の子我が喜べる者なり。又授洗者に云ふ、此は我の至愛の子我が喜べる者なり。

主ハリストス斯く洗を受けて直に水より上れり。彼は此時齡三十歲なりき。

（一九）四十日の齋。（マトフェイ四ノ一―二。マルコ一ノ一二―一三。ルカ四ノ一―二。）

主の洗禮
（第十八章）

其後、主イエス聖神に滿てられ、惡魔に試みらるる爲、此の神に導かれて野に適き彼れは彼の野に在ること四十日、惡魔に試みられ、野獸と共に居れり。彼は此の諸日には一切食はざりき、既に齋せしこと、四十日四十夜にして、其卒るに及びて遂に飢ゑたり。

（二〇）魔鬼の試誘及び惡魔を退けらる。（マトフェイ四ノ三―一一。マルコ一ノ一三。ルカ四ノ三―一三。）

厥時、惡魔―試る者彼に就きて曰へり、爾若し神の子ならば、此の石に命じて餅と爲らしめよ。彼答へて曰へり、錄せるあり、人は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃凡そ神の口より出づる言を以てすと。其時惡魔は彼を携へて、聖なる城イエルサリムに至り、彼を殿の頂に立たしめて言ふ、爾若し神の子ならば、自ら下に投せよ、蓋錄せるあり、主神は爾の爲に其天使に命せん、彼等其手にて爾を抱へて、爾の足を石に蹶かざらしめんと。主イエス之に謂へり、亦錄せるあり、主爾の神を試むる勿れと。惡魔復彼を携へて、最高き山に至り、瞬の間に世界萬國と其榮華とを示して、彼に謂へり、爾若し俯伏して我を拜せば、此等の一切の權威と榮華とを爾に與へん、蓋此れ我に委ねられたり、我欲する者に之を與ふ。故に爾若し我を拜せば、悉く爾の有となな

らん。主イエスス之に答へて曰へり、サタナ、我より退け、蓋し錄せるあり、主爾の神を拜せよ、獨彼のみに事へよと。

是に於て、惡魔は既に試誘を盡して彼を離れたり、視よ、天使等就きて、彼に奉事せり。

（三一）授洗者イオアン主ハリストスの事を證す。（イオアン一ノ一九―三四。）

イオアンの證は、左の如し、イウデヤ人イエルサリムより司祭及び「レワイト」等を遣して、彼に爾は誰たると問ひし時、彼承けて諱まざりき、承けて曰く、我はハリストスに非ず。

又彼に問へり、然らば何ぞ、爾はイリヤなるか。曰く非ず。預言者なるか。答へて曰へり、否。彼等之に謂へり、爾は誰ぞ、我等を遣ししし者に答へを爲さしめよ、爾は己の事を如何に云ふか。彼曰へり我は野に呼ぶ者の聲主の道を直くせよと云ふ者なり。

預言者イサイヤの言ひしが如し。

遣されし者は、「ファリセイ」等に屬せり。彼等又之に問ひて曰へり、爾ハリストスに非ず、イリヤに非ず、預言者に非ざれば何ぞ洗を授くる。イオアン彼等に答へて曰へ

主が魔鬼に試みらる
（第二十章）

り、我は水を以て洗を授く、然れども爾等の中に立てる者あり、爾等の識らざる者なり。彼は則我の後に來りて、我の前と爲れる者なり。我は其履の帶を解くにも堪へず。

此の事はイオルダンの外なるワイファワラ即イオアンの洗を授くる處に行はれたり。

明日イオアンは主イエスの己に來るを見て曰く、視よ神の羔、世の罪を任ふ者なり。我が嘗て我の後に來る者ありて、我の前と爲れり蓋其本我より先なる者なりと云ひしは、即斯の人なり。我は彼を識らざりき、然れども來りて、水を以て洗を授くるは、殊に彼がイズライリに顯されん爲なり。

イオアン又證して曰へり、我は聖神、鴿の如く天より降りて、彼に止るを見たり。我は彼を識らざりき、然れども水を以て洗を授けん爲に我を遣しし者は我に謂へり、爾が聖神の降りて、之に止るを見る者此れ即聖神を以て洗を授くる者なりと。我之を見而して其神の子たるを證せり。

（三五―五一。）

（二二）主は或る門徒を得らる。（イオアン一。）

明日イオアン又立てり、其門徒の二人倍にせり。主イエスの行くを見て曰く、視

よ、神の羔なり。

二門徒其言を聞きて、主イイスに從へり。主イイス顧みて、彼等の其後に從ふを見て、之に謂ふ、爾等何を求むるか。彼等曰へり、ラウワイ(譯すれば夫子)爾何にか居る。曰く、來りて觀よ。彼等來りて、其居る所を觀、是の日彼と偕に居たり。時約十時なりき。

イオアンに聽きて、主イイスに從ひし二人の中、一はアンドレイ即シモンペトルの兄弟なり。彼先づ其兄弟シモンに遇ひて、之に謂ふ、我等メッシヤ(譯すればハリストスに遇へり。乃彼を主イイスに携へたり。主イイス彼に目を注きて曰へり、爾はイオナの子シモンなり、爾はキフア(譯すればペトル)と稱へられん。明日主イイスガリレヤに往かんと欲し、フィリップに遇ひて之に謂ふ、我に從へ。フィリップはワイフサイダの人にして、アンドレイ及びペトルと邑を同じくせり。

フィリップはナファナイルに遇ひて、之に謂ふ、我等はモイセイが其律法に及び諸預言者が記しし所の者に遇へり、是れイオシフの子ナザレトの人主イイスなり。ナファナイル之に謂へり、豈ナザレトより善き者の出づるあらんや。フィリップ曰く來り

て觀よ。

主イイスはナファナイルの己に來るを見て、彼を指して曰く、視よ、誠にイズライリ人にして、詭譎なき者なり。ナファナイル彼に謂ふ、爾何に由りて、我を知れるか。主イイス答へて曰へり、フィリップが未だ爾を呼ばざる先、爾が無花果樹の下に在る時、我爾を見たり。ナファナイル答へて彼に謂ふ、夫子、爾は神の子、爾はイズライリの王なり。主イイス答へて曰へり、我が爾を無花果樹の下に見たりと言ひしに因りて、爾信ず、爾此よりも大なる事を見ん。

又彼に謂ふ、我誠に爾等に語ぐ、是より爾等は天開けて神の使等が人の子の上に陟降するを見ん。

(二三) カナに於ける奇蹟。(イオアン二ノ一—一一)。

第三日に、ガリレヤのカナに婚筵あり、主イイスの母も彼處に在りき。主イイスも及び其門徒も亦婚筵に招かれたり。

酒の乏しきに因りて主イイスの母之に謂ふ、彼等に酒なし。主イイス曰く、婦よ、我と爾と何ぞ與らん、我の時未だ至らず。其母諸僕に謂ふ、彼が爾等に命ずる所

を行へ。

彼處にイウデヤ人の潔の例に從ひて、石の水甕六あり、各二三斗を容る。主イイス諸僕に謂ふ、甕に水を滿たせ。之に滿たして、幾ど溢る。又彼等に謂ふ、今掬みて、司筵者に遞れ。乃遞れり。

司筵者は酒に變じたる水を嘗めて、(其奚れよりするを知らざりき、唯水を掬みし諸僕之を知れり)、新婚者を呼びて、彼に謂ふ、凡の人は先づ旨酒を進め、酣なるに及びて、魯酒を進む、爾は旨酒を留めて今に至れり。

是くの如く主イイス、ガリレヤのカナに於て休徵の始を立てて、其光榮を顯せり、其門徒彼を信せり。

(二四) 主暫時カペルナウムに滯在せらる。(イオアン二ノ一二)。

カナに於て奇蹟を行はれし後、主自ら、及び其母、其兄弟、其門徒はカペルナウムに下りて、彼處に居りし日多からず。

(二五) 第一の「パスハ」貿易者を逐ひて聖殿を潔めらる。(イオアン二ノ一三—二二)。

イウデヤ人の逾越節近づきて、主イイスイエルサリムに上れり。殿に於て牛羊鴿を市り、及び兌錢する者の坐せるを見たれば、繩を以て鞭を爲りて、其衆及び羊牛を殿より逐ひ出だし、兌錢する者の金を散らし、其案を倒し、鴿を市る者に謂へり、此の物を此より取れ、我が父の家を貿易の家と爲す勿れ。

是に於て彼の門徒は、錄して、爾の家に於ける熱心は我を蝕ひと云へるを憶ひ起せり。

イウデヤ人彼に謂へり、爾は此等の事を行ふ權ありを、何の休徵を以て我等に示さんか。主イイス彼等に答へて曰へり、爾等此の殿を毀て、我三日にして之を興さん。イウデヤ人曰へり、此の殿を建つるには四十六年を經たるに、爾三日にして之を興さんか。

然れども彼は其內體の殿を指して云ひしなり。彼が死より復活せし後、其門徒は彼が曾て之を言ひしことを憶ひ起して、聖書と主イイスの言ひし言とを信せり。

(二六) 聖城イエルサリム民の信仰の端緒。(イオアン二ノ二三—二五)。

彼が逾越節にイエルサリムに在りし時、多くの者彼が行ひし休徵を見て、其名を信せり。然れども主イイス自ら己を彼等に託せざりき。蓋衆人を知れり、又他人

が人を證するを要せざりき、自ら人の中藏を知りたればなり。

（二七）ニコディムとの說教。（イオアン三ノ一―二一。）

「ファリセイ」等の中に名はニコディムと云ふ人あり、イウデヤ人の宰の一なり、此の人夜主イイススに來りて、彼に謂へり、夫子、我等は爾が神より來りし師なるを知る、蓋爾が行ふ所の休徵は、若し神之と偕にせずば、人行ふ能はず。

主イイスス彼に答へて曰へり、我誠に誠に爾に語ぐ、人若し上より生れずば、神の國を見るを得ず。ニコディム彼に謂ふ、人既に老ゆれば、如何ぞ生るるを得ん、豈再其母の腹に入りて、生るるを得んや。主イイスス答へて曰へり、我誠に誠に爾に語ぐ、人若し水及び神より生れずば、神の國に入るを得ず。肉より生れし者は肉なり、神より生れし者は神なり。我が爾に爾等上より生るべしと云ひしを奇しむ勿れ。風は欲する所に吹く、爾其聲を聞けども、其何より來り、何へ往くを知らず、凡そ神より生れし者は是くの如し。

ニコディム彼に答へて曰へり、焉ぞ斯の事あるを得ん。主イイスス答へて曰へり、爾はイズライリの師たるに、猶斯の事を知らざるか。我誠に誠に爾に語ぐ、我等は知る所を言ひ、見し所を證す、而して爾等は我等の證を受けず。我地の事を言ひしに爾等信せざれば、若し天の事を言はば、爾等安ぞ信せん。

天より降りし人の子、仍天に在る者の外に、天に升りし者なし。モイセイが野に在りて蛇を擧げし如く、人の子も是くの如く擧げらるべし、凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得んなり。

蓋神は世を愛して、其獨生の子を賜ふに至れり、凡そ彼を信ずる者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得んなり。蓋神が其子を世に遣しし、世を定罪せんに非ず、乃世の彼に由りて救はれんなり。彼を信ずる者は定罪せられず、信せざる者は已に定罪せられたり、神の獨生の子の名を信せざりし故なり。定罪とは左の如し、光世に來りしに、人人光よりも多く暗を愛せり、彼等の行の惡かりし故なり。蓋凡そ不善を作す者は光を惡みて、光に就かず、彼の行の責められざらんなり、其惡しき故なり。然れども眞實を行ふ者は光に就く、彼の行の顯れんなり、神に在りて行はれし故なり。

（二八）授洗聖イオアンの主の事の最後の證言。（イオアン三ノ二〇―三六。）

斯の後主イイスス其門徒と與にイウデヤの地に來り、彼等と偕に彼處に居りて、洗を授けたり。イオアンも亦サリムに近きエノンに在りて、洗を授けたり、彼處には水多き故なり、人人來りて洗を受けたり。蓋イオアン未だ獄に下されざりき。

時にイオアンの門徒は、イウデヤ人と潔の事に就きて論を起せり。イオアンに來りて、之に謂へり、夫子爾と偕にイオルダンの外に在りて、爾が證せし所の者、視よ、彼は洗を授け、人皆彼に往く。

イオアン答へて曰へり、天より授けられしに非ざれば、人一も受くる能はず。我が嘗て我はハリストスに非ず、乃其前に遣されし者なりと云ひしことは、爾等自ら我が爲に證す。新婦ある者は新婿者なり、新婿者の友、立ちて彼に聽く者は、新婿者の聲の爲に甚喜ぶ。今我が此の喜は滿てられたり。彼は長ずべく、我は消すべし。

上より來る者は萬有の上に在り、地よりする者は地に屬し、其言ふ所も亦地に屬す、天より來る者は萬有の上に在り。彼は其見し所聞きし所を證す、而して彼の證を受くる者なし。其證を受けし者は神の眞なるを印證せり。蓋神の遣しし者は神の言を言ふ、神が神を與ふるには限量を以てせざればなり。父は子を愛し、而して

萬物を其手に授けたり。子を信ずる者は永遠の生命を有ち、子を信せざる者は生命を見ざらん、乃神の怒は其上に止る。

（二九）授洗聖イオアン獄に囚せらる。（マトフェイ一四ノ三—五。マルコ六ノ一七—二〇。ルカ三ノ一九—二〇。）

分封の君イロド、其兄弟の妻イロデアダの爲及び凡そイロドの行ひし惡の爲に、彼に責められて、凡の事に又之を增せり、即イオアンを獄に閉せり。

蓋此のイロドは人を遣して、イオアンを執へて、之を獄に繫げり、其兄弟フィリップの妻イロデアダの爲の故なり、其之を娶りたればなり。蓋イオアンはイロドに謂へり、爾兄弟の妻を娶るは宜しからずと。

イロデアダ彼を怨みて、殺さんと欲したれども、能はざりき。蓋イロドはイオアンの義にして聖なる人たるを知りて、彼を恐れ、及び彼を護り、彼に聞きて多くの事を行ひ、且欣びて彼に聞けり。

（三〇）主、ガリレヤに往く。（マトフェイ四ノ一二。マルコ一ノ一四。イオアン四ノ一—三。）

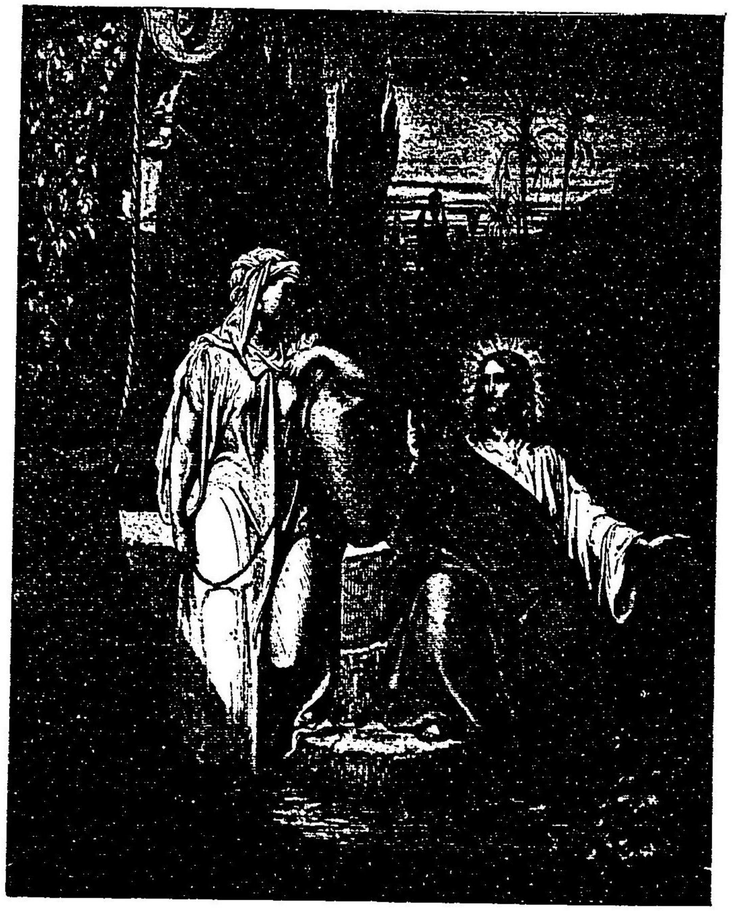
イオアンの囚はれし後、主イイスス其門徒を得、及び洗を授くることイオアンより多きを、ファリセイ人が聞きたりと知り、（然れども、イイスス親ら洗を授けしに非ず、其

門徒此を爲せり。乃イウデヤを離れて、復ガリレヤに往けり。

（三一）ガリレヤに於ける滯在。（イオアン四ノ四―四三）。

彼サマリヤを過ぐべきに由りて、サマリヤの邑シハリと名づくる處に來れり、イアコフが其子イオシフに與へたる地に近し。彼處にイアコフの井あり。主イイスス旅に疲れて井の傍に坐せり。時約六時なり。

サマリヤの婦水を汲む爲に來れり。主イイスス之に謂ふ、我に飲ましめよ。蓋其門徒は食を市はん爲に邑に往けり。サマリヤの婦彼に謂ふ、爾はイウデヤ人たるに如何にして我サマリヤの婦に飲むを求むるか。蓋イウデヤ人とサマリヤ人とは相交際せざるなり。主イイスス之に答へて曰へり、若し爾は神の賜及び我に飲ましめよと、爾に言ふ者の誰たるを知らば、爾自ら彼に求めん、而して彼は爾に活ける水を與へん。婦彼に謂ふ、主よ爾に汲む器なく井も亦深し、然らば何より爾は活ける水あるか。爾豈我が祖イアコフより大なるか、彼は我等に此の井を與へ、己も其諸子も其家畜も之より飲みたり。主イイスス答へて謂へり、凡そ此の水を飲む者は復渴かん、然れども我が與へんとする水を飲む者は世世に渴かざらん、乃我が



救主サマリヤの婦人に教訓せらる
（第三十一章）

彼に與へんとする水は、其中に於て永遠の生命に湧く水の泉と爲らん。婦彼に謂ふ、主よ我に此の水を與へよ、我が渴かず、亦此に來りて汲まざらん爲なり。

主イイスス之に謂ふ、往きて爾の夫を呼びて此に來れ。婦對へて曰へり、我に夫なし。

主イイスス之に謂ふ、爾が夫なしと言ひしは是なり、蓋爾に五人の夫ありき、而して今有る者は爾の夫に非ず、此れ爾眞を言へり。

婦彼に謂ふ、主よ、我觀るに爾は預言者なり。我が先祖は此の山に拜せり、然るに爾等は拜すべき處はイエルサリムに在りと言ふ。

主イイスス之に謂ふ、婦よ、我を信せよ、此の山にも非ず、イエルサリムにも非ずして父を拜せん時は來る。爾等は拜する所を知らず、我等は拜する所を知る、蓋救はイウデヤ人よりするなり、然れども時は來る、今は是なり、眞の禮拜者は神を以て眞を以て父を拜せん、蓋父は是くの如く彼を拜する者を覓む。神は神なり、彼を拜する者は神を以て眞を以て拜すべし。

婦彼に謂ふ、我知る、「メッシヤ」即パリストスは來らん、彼來る時悉く我等に告げん。

主イイスス之に謂ふ、是れ我爾と語る者なり。

適其門徒來りて、彼が婦と語れるを異みたれども、一も爾は何を求むるか、或は之と

何を語るかと云ひし者なし。

時に婦其水瓶を遺して、邑に往きて、人人に謂ふ、來りて、我が凡そ行ひし事を我に告げし人を觀よ、是れハリストスに非ずや。人々邑を出でて、彼に往けり。

此の際門徒彼に請ひて曰へり、夫子、食へ。然れども彼は之に謂へり我に食ふべき糧あり、爾等が知らざる者なり、故に門徒互に言へり、豈孰か彼に食を餌りたる。主イイスス彼等に謂ふ、我が糧は我を遣しし者の旨を行ひ、其功を成就するに在り。

爾等は尙四月にして收穫は來らんと云ふに非ずや、我爾等に語ぐ、爾等の目を擧げて、田を觀よ、已に白くして穫るべし。穫る者は値を得て實を永遠の生命に積む、播く者も穫る者も共に喜ばん爲なり。蓋彼は播き此は穫ると云へるは、斯に於て眞なり。我爾等を遣して、爾等が勞せざりし所を穫らしむ、他人は勞し、爾等は其勞に入れり。

彼の邑の多くのサマリヤ人は、婦が、彼は我が凡そ行ひし事を我に告げたりと、證せし言に因りて彼を信せり。故にサマリヤ人は彼に就きし時、偕に留らんことを請へり、彼は彼處に留りしこと二日なり。尙多くの者は彼の言に因りて信せり。

而して婦に謂へり、我等は已に爾の言に因りて信ずるに非ず、蓋自ら聞きて、彼は誠に世の救主ハリストスなりと知れり。

二日を越して、彼彼處を出でて、ガリレヤに往けり。

（三二）ガリレヤに往きナザレトを過ぐ。（マトフェイ四ノ一三。ルカ四ノ二四。イオアン四ノ四四—四五。）

主イイスス神の能を滿てて、ガリレヤに歸れり、此に來りし時、ガリレヤ人彼を接けたり、凡そ彼がイエルサリムに節筵の時に行ひし事を見たればなり、蓋彼等も亦節筵に往けり。

主はガリレヤに入り其故土ナザレトを過ぎ、カペルナウムに赴けり、彼此に久しく居らん爲なり、蓋主イイスス親ら預言者は其故土に於て尊ばれずと證せり。途にカナあり、主は此に來れり。

（三三）カナに於ける第二の奇蹟。（イオアン四ノ四六—五四。）

是に於て主イイスス復ガリレヤのカナに來れり、嘗て水を酒に變せし處なり。

適一の王臣あり、其子カペルナウムに在りて病めり。彼は主イイススのイウデヤよりガリレヤに來りしを聞きて、之に就き、下りて其子を醫さんことを請へり。蓋

子は死に瀕めり。主イイスス之に謂へり、爾等若し休徵と奇蹟とを見ずば、信せざらん。王臣彼に謂ふ、主よ請ふ、我が子の死せざる先に下れ。主イイスス之に謂ふ、往け、爾の子は生く、人は主イイススの之に言ひし言を信じて往けり。往く時、其諸僕彼に遇ひて、告げて曰へり、爾の子は生く。彼は之に其何の時に愈え始めしを問ひたれば、彼に謂へり、昨日第七時に熱退けり。父は、此れ即主イイススが彼に爾の子は生くと言ひし時なるを知れり。是に於て彼自ら及び其全家皆信じたり。

此れ第二の休徵なり、主イイススイウデヤよりガリレヤに來りて之を行へり。

（三四）主カペルナウムに移る。（マトフエイ四ノ一三―一七。マルコ一ノ一一―一五。）

主はナザレトを離れて、ザワロン及びヨフアリムの境の内なるカペルナウムに來りて此に居りたり、預言者イサイヤを以て言はれしことに應ふを致す、曰く、ザワロンの地、ヨフアリムの地海濱の路にイオルダンの外に在る異邦のガリレヤ、幽暗に坐する民は大なる光を見、死の地及び蔭に坐する者に光は輝けりと。是より主イイスス始めて神の國の福音を傳へて曰へり、期は滿ち、神の國は迫づけり、悔改して、福音を信せよ。彼其諸會堂に於て教を宣べ、衆人に讃榮せられたり。

（三五）四人の漁者を招かる。（マトフエイ四ノ一八―二二。マルコ一ノ一六―二〇。）

ガリレヤの海邊を行く時、彼は兄弟二人即シモン稱してペトルと曰ふ者、及び其兄弟アンドレイが網を海に施せるを見たり、蓋彼等は漁者なりき。乃彼等に謂ふ、我に從へ、我爾等を人を漁する者と爲さん。彼等直に網を遺して、之に從へり。彼處より往きて、別に兄弟二人即ゼワエデイの子イアコフ及び其兄弟イオアンが父ゼワエデイと偕に舟に在りて、網を補へるを見て之を召せり。彼等直に舟と父とを遺して之に從へり。

後、彼等は皆カペルナウムに往きたり。

（三六）安息日に會堂にて教を宣べ且魔を逐ふ。（マルコ一ノ二一。ルカ四ノ三一―三七。）

其後安息日に遇ひて彼會堂に入りて、教を宣べたり。人々其訓を奇とせり、蓋彼等を教ふること權ある者の如し、學士等の如きに非ず。

會堂に汚鬼に憑らるる人あり、大聲に呼びて曰へり、嗟ナザレトのイイスよ、我等と爾と何ぞ與らん、爾は我等を滅さん爲に來りしか、我爾が誰なるを知る、乃神の聖

なる者なり、主イイスス彼を禁めて曰へり、口を緘ぢて、此の人より出でよ。魔鬼之を堂中に仆し、少しも之を傷はずして出でたり。衆皆驚きて、相語りて曰へり、是れ如何なる言ぞ、蓋彼權を以て、汚鬼に命じて、彼等出づ。

其聲名忽ガリレヤの四方に播まれり。

(三七) シモンの岳母、其他多くの者の醫さる事。(マトフェイ八ノ一四—一七。マルコ一ノ二九—三四。)

主は會堂より出でて、イアコフ、イオアンと偕に、シモン及びアンドレイの家に來れり。シモンの岳母、熱を病みて臥したるに、或人直に之を主イイススに告ぐ。彼就きて、其手を執りて、之を起したれば、熱忽退きて、婦彼等に供事せり。

暮に及びて、日の入る時、凡そ病を負ひ魔鬼に憑らるる者を彼に舁き來れるあり、邑舉りて門に集れり。

主は一一手を其上に按せて、之を醫せり、而して斯の如く彼は種々の病に苦める多くの者を醫せり。

彼又言を以て惡鬼を逐ひ、魔鬼を逐ひ出せり。

(三八) 主始めてガリレヤに傳道す。(マトフェイ四ノ二三。マルコ一ノ三五—三九。ルカ四ノ四二—四四。)

朝未だ夜の明けざる前に、彼起きて、出でて野の處に適き、彼處に於て祈禱せり。シモン及び之と偕に在りし者其跡を追ひ、既に遇ひて、彼に謂ふ、皆爾を尋ぬ。彼は之に謂ふ、我等近傍の村と邑とに往くべし、我が彼處にも教を宣べん爲なり、蓋我は是が爲に來れり。

民彼を尋ね、彼に來りて、其彼等を離れ去らんことを止めたり。然れども彼は之に謂へり、我他の邑にも神の國を福音す可し、蓋我は是が爲に遣されたり。

主イイスス偏くガリレヤを巡りて、其諸會堂に於て教を傳へ天國の福音を宣べ、民間の諸の病諸の疾を醫せり。

(三九) 主ナザレトを訪はる。(ルカ四ノ二六—三〇。)

彼は其養育せられし所のナザレトに來り、安息日に其常例に依りて、會堂に入り、讀まんと欲して起てり。預言者イサイヤの書を彼に與ふるあり、彼は書を披きて、左に錄せる所を出だせり、云く、主の神我に在り、蓋彼は我に膏して、貧しき者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擄者に釋を、瞽者に見ることを傳へ、壓せらる

る者に自由を與へ、主の禧年を傳へしめたりと。乃書を掩ひ役者に與へて坐せしに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。

彼宣べ始めて曰へり、此の爾等が聽きし所の書は今應へり。衆皆之を證し、且其口より出づる恩寵の言を奇として曰へり、是れイオシフの子に非ずや。

主イエス彼等に謂へり、爾等必我に該を引きて云はん、醫師よ、己を醫せ、我等が聞きし所カペルナウムに行はれし事を、此に爾の故土にも行へと。又曰へり、我誠に爾等に語ぐ、預言者は其故土に在りて納れらるる者あらず。我眞實に爾等に語ぐ、イリヤの日に三年六月天閉ぢて、大なる饑饉全地に至りし時イズライリの中に多くの嫠ありたれども、イリヤは其一人にも遣されざりき、唯シドンのサレプタにのみ嫠なる婦に遣されたり。又預言者エリセイの時イズライリの中に多くの癩病者ありたれども、其一人も潔められざりき、唯シリヤのナエマンのみ潔められたり。

會堂に在る者此を聞きて、皆大に怒り、起ちて彼を邑の外に逐ひ、曳きて、其邑の建てられたる山の崖に至り、彼を推し下さんとせしに、彼は衆の中を過ぎて去れり。

（四〇）癩病者の醫さるゝ事。（マルコ一ノ四〇―四五。ルカ五ノ一二―一六。）

主イエス一の邑に在りし時、全身癩病を患ふる人來り、主イエスを見て俯伏し彼に求めて曰へり、主よ、爾若し望まば、我を潔むるを能す。主イエス憫みて、手を伸べ、彼に觸れて曰く、我望む、潔まれ、言ひ畢れば、癩病直に離れ、其人潔まれり。

主イエス嚴しく彼を戒めて、直に去らしめ、又彼に謂ふ、愼みて、何事をも人に語ぐる勿れ、乃往きて、司祭に示せ、且爾の潔まりし爲に、モイセイの命せし物を獻じて、彼等に證を爲せ、然れども其人出でて後、多く宣べて、其事を播揚し、主イエス是より顯に城に入るを得ずして、外なる野の處に居るに至れり、而して人四方より來り、衆くの民は教を聽き、又其諸病を醫されん爲に、彼に集れり。唯彼は退きて野に適き

て禱れり。

（四一）海邊の説教及び奇蹟の漁。（マルコ二ノ一―一〇。ルカ五ノ一―一一。）

數日を越えて、彼復カペルナウムに入れり。

民が神の言を聽かん爲に、彼に擁し迫りし時、彼ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二の舟の湖に在るを見たり、漁者は舟を離れて網を洗へり。彼はシモンに屬する一の舟に登りて、少しく岸より離れんことを請ひ、坐して舟より民を教へたり。

語り竟りて、シモンに謂へり、深き處に移り、網を下して漁せよ。シモン彼に對へて曰へり、夫子よ、我等終夜勞して、得る所なかりき、然れども爾の言に依りて、我網を下さん。既に之を行ひて、魚を圍めること甚多く、網裂くるに至れり。乃他の舟に在る侶を招ぎて來り助けしむるに、彼等來りて、魚二の舟に物ちて、幾と沈まんとせり。

シモンペトル之を見て、主イエスの膝下に伏して曰へり、主よ我を離れよ、我罪人なればなり。蓋彼及び彼と偕に在りし者は、皆漁りたる魚の爲に甚驚けり、シモンの侶たりしゼベダイの子ヤコブ及びヨハネも亦然り。

主イエス、シモンに謂へり懼るる勿れ今より後爾人を漁らん。

彼等舟を岸に曳き、一切を舍てて彼に從へり。

（四二）　癩瘋者を醫さる。（マトフエイ九ノ二八。マルコ二ノ一―一二。ルカ五ノ一七―二六。）

一日主が家に在ることを聞えたれば、直に多くの人集りて、門の傍にも身を容るる處なきに至れり、彼は之に教を宣たり。

斯の如く彼教を宣べし時、「ファリセイ」等と教法師等と、ガリレヤの諸鄙、イウデヤ及びイエルサリムより來りし者は坐し、主の能は病者を醫すことに於て顯れたり。視

よ、人癩瘋の者を牀に載せて、昇き來り、之を家に入れて、主イエスの前に置かんと欲したれども、人の衆きに因りて昇き入るる所を得ざれば、屋上に昇り瓦の間より彼を牀のまゝに縋り下して、中に主イエスの前に置けり。

主イエス彼等の信を見て、其人に謂へり、人よ、爾の罪は爾に赦さる。學士等及び「ファリセイ」等竊に議して曰へり、此の瀆濟を言ふ者は誰ぞ、獨神より外に、誰か罪を赦すを得ん。

主イエス其神を以て、直に彼等が斯く己の衷に議するを知りて、彼等に謂へり爾等何ぞ心の中に斯く議する、癩瘋の者に、爾の罪赦さると言ひ、或は起きて爾の牀を取りて行けと言ふは孰か易き、然れども、爾等が人の子の、地に在りて、罪を赦す權あることを知らん爲（癩瘋の者に向ひて）爾に謂ふ、起きて爾の牀を取りて、爾の家に往け。

彼直に起き、臥し居たる牀を取りて衆の前に出で、神を讃榮して、其家に往けり。衆駭きて且大に懼れ是の如き權を人に賜ひし神を讃揚し、我等今日奇異なることを見たり、我等未だ嘗て斯くの如きことを見ざりきと云ふを致せり。

（四三）リワイ、マトフェイを招がる。（マトフェイ九―一七。マルコ二ノ一三―二二。ルカ五ノ二七―三九。）

アルフェイの子リワイ、又はマトフェイと曰ふ者の稅關に坐せるを見て、之に謂へり、我に從へ。彼一切を舍てて、起ちて、彼に從へり。

レワイ、マトフェイ其家に於て、彼の爲に大なる筵を設けたり。

主イエスス家に席坐せし時、親よ、多くの稅吏及び罪人來りて、彼及び其門徒と偕に席坐せり。蓋、此等の者多く有り、而して彼に從へり。

學士等と「ファリセイ」等とは彼が稅吏及び罪人と偕に食するを見て、其門徒に謂へり、彼は何ぞ稅吏及び罪人と偕に食飲するや。主イエスス之を聞きて、彼等に謂へり、康强なる者は醫師を需めず、乃病を負ふ者は之を需む、爾等往きて、我矜恤を欲して祭祀を欲せずと、云ふ事の意如何を學べ、蓋我が來りしは、義人を召す爲に非ず、乃罪人を召して悔改せしめん爲なり。

イオアンと「ファリセイ」等の門徒は常に齋せり、來りて、彼に謂へり、イオアンの門徒は屢齋して祈禱を爲す、「ファリセイ」等の門徒も亦然り、惟爾の門徒が食飲するは何ぞや。

主イエスス彼等に謂へり、婚筵の客は、新娶者の尙之と偕に在る時、豈哀しむを得んや、婚筵の客は新娶者の尙彼等と共に在る時、豈齋するを得んや、新娶者の彼等と偕に在る時は、齋するを得ず。然れども新娶者の彼等より取らるる日至らん、其日には、齋せん。

又譬を設けて彼等に謂へり、新しき布片を用て舊き衣を補ふ者あらず、蓋補ひし片は衣を壞りて、其綻更に甚しからん。

聖ルカの福音には、此の譬を左の如く書せり、（彼等に謂へり、新しき衣の布を取りて、舊き衣を補ふ者あらず、然らずば新しき衣をも裂き、且新しき者より取りたる布は舊き者と合はざらん。これ主は此の譬を斯の如き樣子に述べて復されし事あり。しならん）。

又新しき酒を舊き革囊に盛る者あらず、然らずば新しき酒は囊を敗りて、酒漏れ、囊も亡びん、乃新しき酒は新しき囊に盛るべし、然らば兩の者存せん。

又舊き酒を飲みて、直に新しきを欲する者あらず、蓋曰ふ、舊きは更に善し。

（四四）第二の「パスハ」＝三十八年になる病者を醫さるる事。（イオアン五ノ一―一六）。

厥後イウデヤ人の節筵ありて、主イエススイエルサリムに上れり。

イエルサリムに羊の門の側に池あり、エウレイの言にワイフェズダと曰ふ。之に傍ひて五の廊あり。此の中に多くの病者、瞽者、跛者、血枯るる者臥して、水の動くを待てり。蓋主の使時ありて池に下りて、水を動かせり、水の動く後先づ池に入る者は、何の病を患ふるに論なく、愈ゆるを得たり。

彼處に一人三十八年病を患ふる者ありき。主イイスス彼が臥せるを見、其之を患ふること已に久しきを知りて、彼に謂ふ、爾愈えんことを欲するか。病者答へて曰へり、主よ然り、但水の動く時、我を扶けて池に下す人なし、我が來る時は、他人我に先だちて下る。

主イイスス彼に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて行け。其人直に愈え、其牀を取りて行けり。

是の日は安息日なり、故にイウデヤ人愈されし者に謂へり、安息日なり、爾牀を取るは宜しからず。彼答へて曰へり、我を愈しし者は、我に爾の牀を取りて行けと言へり。彼等問へり、爾に牀を取りて行けと言ひし人は誰ぞ。愈されし者は其誰たるを知らざりき、蓋彼處に人の衆きに因りて、主イイスス隱れたり。

厥後、主イイスス此の人に殿に遇ひて、之に謂へり、視よ、爾は愈えたり、復罪を犯す勿れ、恐らくは患に遭ふこと更に甚しからん。彼往きて、イウデヤ人に、我を愈しし者は主イイスなりと告げたり。是に於てイウデヤ人、主イイスを窘逐して殺さんことを謀れり、彼が安息日に此くの如き事を行ひし故なり。

（四五）第二の節筵。主が神父と同じき事の教訓。（イオアン五ノ一七—四七）。

主イイスス彼等に謂へり、我が父は今に至るまで爲し、我も亦爲し。此に繰りてイウデヤ人愈彼を殺さんことを謀れり、其第安息日を犯ししのみならず、乃父神を己の父と言ひて、己を神と齊しく爲ししが故なり。主イイスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、子は若し父の行ふ所を見ずば、己に由りて何事をも行ふ能はず、父の行ふ所は、子も亦同じく之を行ふ。蓋父は子を愛して、凡そ己の行ふ所を彼に示す、且此より大なる事を彼に示さん、爾等の奇まん爲なり。

蓋父が死せし者を起して、之を生かすが如く、子も亦欲する所の者を生かす。蓋父は何人をも審判せず、乃悉くの審判を子に委ねたり、衆皆子を敬ふこと、父を敬ふが如くせん爲なり。子を敬はざる者は、彼を遣しし父を敬はず。

我誠に誠に爾等に語ぐ、我が言を聞きて、我を遣しし者を信ずる人は永遠の生命を有ち、且審判の爲に來らず、乃死より生命に移れり。　我誠に誠に爾等に語ぐ、時は來る、今は是れなり、死せし者は神の子の聲を聞かん、之を聞きて生きん。　蓋父が己の中に生命を有つが如く、此くの如く子にも己の中に生命を有たしむ。

且彼に審判を行ふ權を與へたり、其人の子たるに因りてなり。　之を奇む勿れ、蓋時は來る、凡そ墓の中に在る者は神の子の聲を聞かん、而して善を行ひし者は生命の復活に出で、惡を爲しし者は定罪の復活に出でん。　我何事をも己に由りて行ふ能はず、聞く所に遵ひて審判す、而して我が審判は義なり、蓋我己の旨を求めず、乃我を遣しし父の旨を求むるなり。

若し我自ら己の事を證せば、我が證は眞ならず、別に我の事を證する者あり、我其我を證する證の眞なるを知る。　爾等嘗て人をイオアンに遣ししに、彼は眞實の爲に證を作せり。　然れども我は人より證を受けず、乃此を言ふは爾等の救はれん爲なり。　彼は燃え且光る燈たりき、爾等は其光に在りて暫く喜ばんと欲せり。

然るに我にはイオアンの證より大なる者あり、蓋父が我に與へて成さしむる事此

の我が行ふ所の事は我の爲に父が我を遣ししことを證す。

且我を遣しし父自ら我の爲に證を作せり。　惟爾等未だ曾て其聲を聞かず、其形を見ざりき。　且其言を爾等の裏に存せず、蓋彼の遣しし者は、爾等之を信せざるなり。

聖書を探れ、蓋爾等は此に由りて永遠の生命を得んと意ふ、此れ我の事を證するなり。　然れども爾等は生命を得ん爲に我に就くを欲せず。

我榮を人より受けず、惟我爾等を知る、爾等の裏には神に於ける愛なし。　我は我が父の名に因りて來りしに、爾等我を接けず、若し他人己の名に因りて來らば、爾等之を接けん。　爾等互に榮を相受け、獨一の神よりする榮を求めずして、豈信ずるを得んや。

我爾等を父の前に訴へんと意ふ勿れ、爾等を訴ふる者にモイセイあり、爾等が恃む所の者なり。　蓋爾等若しモイセイを信せば、我をも信せん、彼は我の事を書したればなり。　若し爾等彼の書を信せずば、焉ぞ我の言を信せん。

（四六）　安息日に穗を摘みし事、其辨護。（マトフェイ一二ノ一―八。マルコ二ノ二三―二八。ルカ六ノ一―五。）

逾越節の二日の後の首の安息日に、主イイスス禾田を過ぎ行けることあり、彼の門

徒穂を摘み手に搏みて食へり。

「ファリセイ」等之を見て、彼に謂へり、視よ、爾の門徒は安息日に行ふべからざることを行ふ。

或「ファリセイ」等其門徒等に謂へり、爾等何ぞ安息日に行ふべからざることを行ふ。

主イイスス彼等に答へて謂へり、爾等はダワイドが乏しくして、己及び其從者の飢ゑし時に行ひし事、即如何にして彼は、司祭長アワイアフルの時に、神の家に入りて、司祭等の外何人も食ふべからざる供前の餅を食ひ、且之を從者に與へしを未だ曾て讀まざりしか。抑爾等は、司祭等が安息日に於て、殿の内に安息日を犯すとも罪なきことを律法に讀まざりしか、然れども我爾等に語ぐ、此には殿より大なる者あり。若し爾等は、我矜恤を欲して祭祀を欲せずと、云ふことの意如何を知りしならば、辜なき者を罪せざりしならん、又彼等に謂へり、安息日は人の爲に設けられたり、人は安息日の爲に非ず、故に人の子は亦安息日の主なり。

（四七）安息日に手の枯へたる者の醫さるゝ事及び「ファリセイ」等を譴めらる。（マトフェイ九ノ一三。マルコ三ノ一。ルカ六ノ六―一〇。）

他の安息日に、彼會堂に入りて、教ふることありしに、彼處に右の手の枯へたる人ありき。學士等と「ファリセイ」等とは、彼が安息日に於て、斯の人を醫すや否やを窺へり、彼を罪する間を得んが爲なり。且之に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。彼は其意を知りて、手の枯へたる人に謂へり、起きて、中に立て、彼起きて立てり。主イイスス彼等に謂へり、我爾等に問はん、安息日には善を行ひ、或は惡を行ふ、生命を救ひ、或は之を滅す、孰か宜しき、彼等默然たり。

彼曰へり、爾等の中、孰か一の羊有りて、若し此れ安息日に坑に陷らば、之を拔けて上げざらんか、人は羊より貴きこと幾何ぞ、故に安息日に善を行ふは宜しきなり。

主イイスス怒を含みて、彼等を圜視し、其心の頑なるを憂ひて、斯の人に謂ふ、爾の手を伸べよ。之を伸ぶれば其手は健になりしこと、他の手の如し。

（四八）「ファリセイ」等の激怒、主海濱に避く。（マトフェイ一二ノ一四。マルコ三ノ六―七。ルカ六ノ一一。）

「ファリセイ」等狂ひ怒りて互に何を主イイスに爲さんと議れり。「ファリセイ」等出でて、直に「イロド」の黨と共に、如何にして彼を滅さんと謀れり。主イイスス彼等の惡謀を知り、其門徒と偕に海濱に往けり。

衆くの民はガリレヤより、又イウデヤ、イエルサリム、イトゥメヤ及びイオルダンの外より彼に從ひ、又ティルとシドンとの邊に居る者、其行ひしことを聞き、甚多く彼に來れり。主は民の衆きに因りて、其門徒に己が爲に小舟を備へんことを命せり、人の彼に逼らざらん爲なり。

此の時彼は多くの者を醫ししに因りて、凡そ疾ある者は、彼に捫らん爲に、擁し迫るに至れり。彼悉ぐ之を醫し、又汚鬼は彼を見し時、其前に俯伏して、呼びて曰へり、爾は神の子なり、惟彼は之に己を顯す勿らんことを嚴しく戒めたり。預言者イサイヤを以て言はれし事に應ふを致す、云く、視よ、我が選びし我の僕我が靈の悅ぶ所の我の至愛の者、我は我が神を彼に賦せん、彼は諸民に審判を示さん、彼は爭はず、號ばず、人其聲を衢に聞かざらん、傷める葦を折らず、烟れる麻を熄ざずして、審判に勝を得しむるに至らん、諸民彼の名を賴まんと。

（五一）主、ガリレヤに來る。主の終夜の祈禱。（マトフェイ四ノ二三―二五。マルコ三ノ一三。ルカ六ノ一二。）

（四九）人民の群集。（五〇）民大に醫さる。（マトフェイ一二ノ一五―二一。マルコ三ノ七―一二。）

其後復主イイスス徧くガリレヤを巡りて其諸會堂に於て敎を傳へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病諸の疾を醫せり。而して衆くの民彼に從へり。

當日彼は祈禱の爲に山に登りて、終夜神に禱れり。

（五二）十二門徒を選ぶ。（マルコ三ノ一三―一九。ルカ六ノ一三―一九。）

夜の明くるに及びて、其門徒の中より自ら欲する所の者を召したれば、來りて彼に就けり。彼等の中より十二人を選びて、之を使徒と名づけたり。彼等が己れと偕に居り、又之を遣はして、敎を傳へしめ、且權を以て病を醫し、魔鬼を逐ひ出ださしめん爲なり。乃シモン之をペトルと名けたり、其兄弟アンドレイ、ゼワェライの子イアコフ、及び其兄弟イオアン、彼等をワェアネルゲス、譯すれば、雷の子と名づけたり、ブィリップ、ワルフォロメイ（或はナファナイル）、マトフェイ、フォマ、アルフェイの子イアコフ、シモン、カナニト稱してジロドと云ふ者、ファデイ（即イアコフの兄弟イウダ）及びイウダ、イスカリオト、即後に彼を賣りし者なり。

（五三）主、山を下りて醫を施さる。（ルカ六ノ一七―一九。マトフェイ四ノ二四。）

主イイスス彼等と偕に山より下りて、平地に立てり、爰に其衆くの門徒、及び衆くの

民イウデヤの四方イエルサリム幷にティルとシドンとの海濱よりして、彼に聽かんため且己の疾の醫されん爲に來りし者、又汚鬼を患ふる者ありき、彼等醫されたり、衆民彼に捫らんと欲せり、蓋能彼より出でて、衆を醫せり。

彼の聲名徧くシリヤに揚れり、人凡の患へる者種々の病及び痛苦を負へる者、魔鬼に憑らるる者、癲癇の者、癱瘓の者を携へて、彼に就きたるに、彼之を醫せり。

（五四）山上の教訓「マトフェイ福音に依る」。（マトフェイ五ノ一七―七二九。）

主イエスス群衆を見て山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。彼口を啓きて之を教へて曰へり。

神の貧しき者は福なり、天國は彼等の者なればなり。泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり。温柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。義に飢え渴く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。矜恤ある者は福なり、彼等矜恤を得んとすればなり。心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事

山上の教訓
（第五十四章）

を偽りて諸の惡しき言を言はん時は、爾等福なり。喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり、蓋人是くの如く爾等より先なりし預言者を窘逐せり。

爾等は地の鹽なり、若し鹽其味を失はば、何を以て其鹹に復さん、後復用ゐる所なく惟外に棄てられて、人に踐まれんのみ。爾等は世の光なり、山の上に建てる邑は隱るる能はず。人燈を燃して之を斗の下に置かず、乃燈臺の上に置く、然らば凡そ家に在る者に照る。是くの如く爾等の光は人人の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て、天に在す爾等の父を讃榮せん爲なり。

我律法或は預言者を毀たん爲に來れりと意ふ勿れ、我が來れるは之を毀つに非ず乃之を成さん爲なり。蓋我誠に爾等に語ぐ、天地の廢するに至るまでは、律法の一點一畫も廢せずして、盡く成らん。故に此の至と小き誡の一を毀ち、且是くの如く人に敎へん者は、天國に於て至と小き者と稱へられん、惟之を行ひ、且敎へん者は、天國に於て大なる者と稱へられん。蓋我爾等に語ぐ、若し爾等の義は學士及びファリセイ等の義に勝らずば、爾等天國に入るを得ず。

爾等古の人に言へるあるを聞けり、殺す勿れ、殺す者は審判に干らんと。然れども

我爾等に語ぐ、凡そ故なくして其兄弟を怒る者は審判に干らん、其兄弟に愚拙よと曰ふ者は公會に干らん、狂妄よと曰ふ者は火の地獄に干らん。故に爾若し禮物を祭壇に携へ至り、彼處に於て、爾が兄弟の爾と隙あるを憶ひ起さば、爾の禮物を祭壇の前に置き往きて、先づ爾の兄弟と和き、後來りて爾の禮物を献せよ。爾を訟ふる者と偕に猶途に在る時、急に之と和げ、恐くは訟ふる者爾を裁判官に付し、裁判官爾を下吏に付して、爾獄に投せられん、我誠に爾に語ぐ、爾毫釐だに償はずば、彼より出づるを得ず。

爾等古の人に言へるあるを聞けり、淫する勿れと。然れども我爾等に語ぐ、凡そ慾を懷きて婦を見る者は、心の中已に之と淫せしなり。若し爾の右の目爾を罪に誘はば抉りて之を棄てよ、蓋爾が百体の一を失ふは、全身地獄に投せらるるより勝れり。若し爾の右の手爾を罪に誘はゞ斷ちて之を棄てよ、蓋爾が百体の一を失ふは、全身地獄に投せらるるより勝れり。

又言へるあり、若し人其妻を出ださば、之に離書を與ふべしと。然れども我爾等に語ぐ、淫の故に非ずして其妻を出だす者は、之に姦淫を行はしむるなり、出だされた

る婦を娶る者も姦淫を行ふなり。

又爾等古の人に言へるあるを聞けり、誓に背く勿れ、乃爾の誓を主の前に守れと。然れども我爾等に語く一切誓ふ勿れ、天を指して誓ふ勿れ、是れ神の寶座なればなり、地を指して誓ふ勿れ、是れ其足の発なればなり、イエルサリムを指して誓ふ勿れ、是れ大王の城なればなり、爾の首を指して誓ふ勿れ、爾一縷の髪だに白く或は黑くする能はざればなり。爾等の言は是是否否たるべし、此に過ぐる者は惡よりするなり、

爾等言へるあるを聞けり、目を以て目を償ひ、齒を以て齒を償へと。然れども我爾等に語ぐ、惡に敵する勿れ、乃人爾の右の頰を批たば、他の頰をも之に向けよ。爾を訟へて、爾の裏衣を取らんと欲する者には、外服をも取ることを聽せ。人爾を強ひて偕に一里を行かしめば、之と偕に二里を行け、爾に求むる者には與へ、爾に借らんと欲する者を卻くる勿れ。

爾等言へるあるを聞けり、爾の隣を愛し、爾の敵を憎めと。然れども我爾等に語ぐ、爾等の敵を愛し、爾等を詛ふ者を祝福し、爾等を憎む者に善を爲し、爾等を虐げ、爾等

を窘逐する者の爲に禱れ、天に在す爾等の父の子と爲らん爲なり、蓋彼は其日を惡しき者と善き者の上に照し、雨を義なる者と不義なる者の上に降らす。蓋爾等若し爾等を愛する者を愛せば、何の賞かあらん、稅吏も是くの如き事を行ふに非ずや、爾等若し爾等の兄弟にのみ安を問はば、何の過ぎたることをか爲さん、異邦人も是くの如く行ふに非ずや。故に爾等純全なること、爾等の天の父の純全なるが如く爲れ。

爾等愼みて人に見られん爲に、施濟を其前に爲す勿れ、然らずば天に在す爾等の父より賞を獲ざらん。故に施濟を爲す時は、僞善者が人より榮を得ん爲に、會堂及び街衢に於て爲すが如く、己の前に笛を吹く勿れ、我誠に爾等に語ぐ、彼等は已に其賞を受く。爾施濟を爲す時、爾が左の手に爾が右の手の爲す所を知らしむる勿れ。爾の施濟の隱ならん爲なり、然らば隱なるを鑒みる爾の父は顯に爾に報いん。

爾禱る時、僞善者の如くする勿れ、彼等は人に見られん爲に、會堂及び通衢の隅に立ちて禱るを好む、我誠に爾等に語ぐ、彼等は已に其賞を受く。爾禱る時、爾の室に入り、戸を閉ぢて隱なる處に在す爾の父に禱れ、然らば隱なるを鑒みる父は顯に爾に報いん。又禱る時、異邦人の如く贅語を言ふ勿れ、蓋彼等は言の多きを以て聽かれんと意ふ。彼等に效ふ勿れ、蓋爾等の父は、爾等が願はざる先に、爾等の需むる所を知る。

故に爾等是くの如く禱れ。天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は、天に行はるが如く、地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、惡我等を凶惡より救ひ給へ、蓋國と權能と光榮は爾に世世に歸す、「アミン」。

蓋若し爾等人に其過を免さば爾等の天の父も爾等に過を免さざらん。

さすば爾等の父も爾等に過を免さざらん。

又爾等齋する時、僞善者の如く憂はしき容を爲す勿れ、蓋彼等は其齋の人に顯れん爲に顏色を損ふ、我誠に爾等に語ぐ、彼等は已に其賞を受く。爾齋する時、首に膏ぬり、面を洗へ、爾の齋の人に顯れずして、隱なる處に在す爾の父に顯れん爲なり、然らば隱なるを鑒みる爾の父は顯に爾を報いん。

爾等の爲に財を地に積む勿れ、此處には蠹と銹と損ひ、此處には盜穿ちて竊む。乃

爾等の爲に財を天に積め、彼處には蠹も銹も損はず、彼處には盜穿ちて竊まず。蓋爾等の財の在る所には、爾等の心も在らん。

身の燈は目なり、故に若し爾の目淨からば、爾の全身明ならん、若し爾の目惡からば、爾の全身暗からん、故に若し爾の中の光は暗たらば、則暗は如何にぞや。

人は二人の主に事ふる能はず、蓋或は此を惡み彼を愛し、或は此を重んじ、彼を輕んせん、爾等は神と財とに兼ね事ふる能はず。

故に我爾等に語ぐ爾等の生命の爲に何を食ひ、何を飲み、爾等の身体の爲に何を衣んと慮る勿れ。生命は糧より大にして、身体は衣より大なるに非ずや。試に天空の鳥を觀よ彼等は稼かず穡らず、倉に積まず而して爾等の天の父は之を養ふ、爾等は彼等より甚貴きに非ずや。且爾等の中誰か慮りて、其身の長一尺だに延ぶるを得ん。衣の爲にも何ぞ慮る、試に野の百合の如何にか長ずるを觀よ、勞かず紡かず、然れども我爾等に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此の花の一に及ばざりき、今日在り明日爐に投げらるる野の草にも神は斯く衣すれば、況や爾等をや、小信の者よ。

故に慮りて、我等何を食ひ或は何を飲み、或は何を衣んと云ふ勿れ、蓋此れ

皆異邦人の求むる所なり、爾等の天の父は此等の者の皆爾等に必要なるを知る。

爾等先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の者皆爾等に加はらん。故に明日の事を慮る勿れ、蓋明日は自ら己の事を慮らん、一日の心勞は一日の爲に足れり。

人を議する勿れ、議せられざらん爲なり、蓋爾等何の議を以てか人を議せば、亦是くの如く議せられん、何の量を以てか人に量らば、是くの如く爾等にも量られん。

何ぞ兄弟の目に物屑の在るを視て、己の目に梁木の在るを覺えざる、或は己の目に梁木の在るに、如何ぞ爾の兄弟に告げて、我に物屑を爾の目より出だすを容せと曰はん、僞善者よ先づ梁木を己の目より出だせ、其時如何に兄弟の目より物屑を出だすべきを見ん。

聖物を犬に與ふる勿れ、爾等の眞珠を豕の前に投ぐる勿れ、恐らくは彼等其足にて之を踐み、且轉じて爾等を噬まん。

求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん、蓋凡そ求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者には啓かれん。爾等の中孰か其子餅を求めんに、之に石を與ふる者あらん、又魚を求めんに、之に蛇を與

ふる者あらん。然らば爾等惡しき者なるに、尙善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す爾等の父は、之に求むる者に善き物を與へざらんや。

故に凡の事、人の爾等に行はんと欲する者は、爾等も是くの如く之を人に行へ、蓋律法と預言者とは即是なり。

窄き門より入れ、蓋沈淪に導く門は闊く、其路は寬くして、之に入る者多し、惟生命に導く門は窄く、其路は細くして、之を得る者少し。

謹みて僞の預言者を防げ、彼等は羊の衣にて爾等に來れども、內は殘き狼なり、爾等其果に由りて彼等を識らん、豈荊棘より葡萄を摘み、或は蒺藜より無花果を採らんや。是くの如く凡そ善き樹は善き果を結び、惡しき樹は惡しき果を結ぶ能はず、又惡しき樹は善き果を結ぶ能はず。凡そ善き果を結ばざる樹は、斫られて火に投げらる。故に爾等其果に由りて彼等を識らん。

凡そ我に主よ、主よと謂ふ者は、必しも天國に入るに非ず、惟天に在す我が父の旨を行ふ者は入らん。彼の日多くの者我に謂はん、主よ、主よ、我等爾の名に由りて預言し、爾の名に由りて魔鬼を逐ひ、爾の名に由りて多くの異能を行ひしに非ずやと。

其時我彼等に告げて曰はん、我嘗て爾等を識らざりき、不法を作す者我を離れよと。

故に凡そ我が此の言を聞きて之を行ふ者は、我之を磐の上に其家を建てたる智き人に譬へん、雨降り、河溢れ、風吹きて其家を撞ちたれども、倒れざりき、磐の上に基けたればなり。凡そ我が此の言を聞きて之を行はざる者は、沙の上に其家を建てたる愚なる人に譬へられん、雨降り、河溢れ、風吹きて其家を衝きたれば、倒れたり、且其倒れは大なりき。

主イエスス此等の言を竟りし時、民其訓を奇とせり、蓋彼等を敎へしこと權ある者の如し、學士及び「ファリセイ」等の如きに非ず。

（五五）山上の敎訓「ルカ」の福音に依る。（〇—ルカ六ノ二—四九。）

主は目を擧げて其門徒を視て曰へり。

神の貧しき者は福なり、神の國は爾等の有なればなり。

今飢うる者は福なり、爾等飽くを得んとすればなり。今泣く者は福なり、爾等笑ふを得んとすればなり。人の子の爲に人人爾等を憎み、爾等を絕ち且詬り爾の名を惡しき者として棄つる時は爾等福なり、其日に喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければ

なり、蓋彼等の先祖は是くの如く預言者に行へり。

然るに爾等富める者は、禍なる哉、爾等既に慰を得たればなり。今飽たる者は、禍なる哉、爾等飢ゑんとすればなり。今笑ふ者は、禍なる哉、爾等哀み哭かんとすればなり。人皆爾等の事を善く言はん時は、爾等禍なる哉、蓋彼等の先祖は是くの如く偽預言者に行へり。

我爾等聴く者に語ぐ、爾等の敵を愛し、爾等を憎む者に善を爲し、爾等を詛ふ者を祝福し、爾等を虐ぐる者の爲に禱れ。爾の頰を批つ者には、他の頰をも向けよ、爾の外服を奪ふ者には、裏衣をも取ることを拒む勿れ。

凡そ爾に求むる者には與へ、爾の物を取る者には、復之を促す勿れ。人の爾等に行はんと欲する事は爾等も是くの如く之を人に行へ。

爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も彼等を愛する者を愛す。若し爾等に善を行ふ者に善を行はば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も是くの如き事を行ふ。若し返さるる望ある者に借さば、爾等に何の感謝かあらん、蓋罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借すなり。然れども爾等敵を愛し、何をも望まずして善を行ひ、又借し與へよ、則爾等の賞は多からん、爾等至上者の子と爲らん、蓋彼は恩に負く者及び惡しき者に慈愛を施す。故に爾等慈憐なること、爾等の父の慈憐なるが如くなれ。

人を議する勿れ、然らば議せられざらん、人を罪する勿れ、然らば罪せられざらん、人を恕せ、然らば爾等恕されん。人に與へよ、然らば爾等に與へられん、嘉き量を以て、押し容れ、搖り容れ充ち溢れしめて、爾等の懷に納れられん、蓋何の量を以てか人に量らば、之を以て爾等にも量られん。

又彼等に譬を言へり、瞽は瞽を導くを得るか、二人ながら坑に陷らざらんや。

門徒は其師の上に在らず、凡そ全備したる者も其師の如くならん。

爾何ぞ兄弟の目に物屑の在るを視て、己の目に梁木の在るを覺えざる、或は己の目に梁木の在るを視ずして、如何ぞ爾の兄弟に語げて、兄弟よ、我に爾の目に在る物屑を出だすを容せと曰ふを得ん、僞善者よ、先づ梁木を己の目より出だせ、其時如何に兄弟の目より物屑を出だすべきを見ん。

善き樹には惡しき果を結ぶ者なく、又惡しき樹には善き果を結ぶ者なし。凡の樹

は其果に由りて識らる、蓋・荊棘よりは無花果を摘まず、又蒺藜よりは葡萄を採らず。善き人は其心の善き寶庫より善き者を出だし、惡しき人は其心の惡しき寶庫より惡しき者を出だす、蓋・心に充つる者は口に言ふなり。

爾等何ぞ我を主よ、主よ、と稱へ、而して我が言ふ所を行はざる。凡そ我に來り、我が言を聞きて、之を行ふ者は、我其何人に似たるを爾等に示さん。彼は家を建つるに、掘り且深くし、基を磐の上に置きたる人に似たり、洪水の有りし時、横流は其家を衝きたれども、之を動かす能はざりき、磐の上に基けたればなり。

聞きて行はざる者は家を土の上に基なくして建てたる人に似たり、横流の之を衝きし時、直に倒れたり、且其家の頽壞は大なりき。

（ルカ七ノ一。マタ八ノ一一四。）

（五六）癩病者を醫さる。

彼は、悉く其言を民に聽かしめ畢りて、彼山を下りしに、衆くの民彼に隨へり。視よ、癩病の者來りて彼を拜して曰へり、主よ爾若し望まば、我を潔むるを能す。主イエスス手を伸べて、之に觸れて曰へり、我望む、潔まれ、其癩病直に潔まれり。主イエスス之に謂ふ、愼みて人に告ぐる勿れ、乃往きて己を司祭に示せ、且モイセイの命せし

禮物を獻じて、彼等に證を爲せ。

（マタ八ノ五—一三。ルカ七ノ二—一〇。）

（五七）百夫長の僕を醫す。

其後、主イエススカペルナウムに入りし時、或百夫長、其愛する僕病みて死せんとせしに、主イエススの事を聞きてイウデヤの長老等を彼に遣し、來りて其僕を醫さんことを請ひ百夫長に代りて曰へり、主よ、我の僕癱瘓にて家に臥し、若むこと甚し。主イエススカペルナウムに入りし時、道はされし者彼に來りて百夫長の言を述べ切に求めて曰へり、爾此の人の爲に此を爲すは宜しきなり、蓋・彼は我が民を愛し我等の爲に會堂を建てたり。主イエス彼に謂ふ、我往きて之を醫さん、而して彼等と偕に往けり。

既に其家に遠からざる時、百夫長友を遣して、彼に謂へり、主よ勞する勿れ、蓋・爾が我の舍に入るは我當らず。故に我亦己を以て爾に就くに堪へずとせり、乃・一言を出だせ、然らば我が僕愈えん。蓋・我人の權に屬すれども、我が下に兵卒ありて、我此に往げと云へば往き、彼に來れと云へば來り、我が僕に是を行へと云へば行ふ。

主イエススこれを聞きて、彼を奇とし、顧みて、從へる民に謂へり、我爾等に語ぐ、イズラ

イリの中にも我是くの如き信を見ざりき。我又爾等に語ぐ、衆くの者東より西より來りて、アウラアム、イサアク、イアコフと偕に天國に席坐し、而して國の諸子は外の幽暗に逐はれん、彼處には哀哭と切齒とあらん。

主イイスス又百夫長に謂へり、往け、爾の信せし如く爾に成るべし、斯の時其僕愈えたり。

（五八）ナインの少者の復活。（ルカ七ノ一一―一七。）

遣されし者家に歸りて、病める僕の已に愈されしを見たり。

其後主イイススナインと名づくる邑に往けるに、其門徒の多人及び衆くの民は彼と偕に行けり。邑の門に近づきし時、彼處に死者の昇き出ださるるあり、母の獨の子にして其母は嫠なり、邑の民多く彼と偕にせり。

主彼を見て、憫みて彼に謂へり、哭く勿れ。乃近づきて、櫬に觸れたれば、昇く者止れり、彼曰へり、少者よ、爾に謂ふ、起きよ。死者起きて坐し且言へり、主イイスス之を其母に與へたり。

衆皆懼れて、神を讃榮して曰へり、大なる預言者は我等の中に興れり、神は其民を眷

みたり。彼に於ける此の壁聞はイウデヤの全國及び其四方に揚れり。

（五九）授洗イオアン使を主の許に遣はす。（マトフェイ一一ノ二―六。ルカ七ノ一八―二三。）

イオアンの門徒は、悉く此等の事を彼に告げたれば、イオアン獄に在りて、ハリストスの行ふ所を聞き、其門徒の二人を遣せり。

彼等主イイススに來りて曰へり、授洗イオアン我等を爾に遣して云く、來るべき者は爾なるか、抑我等他の者を俟つべきかと。

斯の時彼は多くの者を諸の疾病及び惡鬼より醫し、又多くの瞽者に見ることを賜へり。主イイスス彼等に答へて曰へり、往きて、見し所聞きし所をイオアンに告げよ、即瞽者は明き、跛者は歩み、癩者は潔まり、聾者は聽き、死者は起き、貧者は福音す。凡そ我の爲に惑はざる者は福なり。

（六〇）主前驅イオアンを讃稱す。（マトフェイ一一ノ七―一五。ルカ七ノ二四―二八。）

イオアンの使者が去りし後、主イイスス、イオアンの事を擧げて民に謂へり、爾等何を觀んとして野に出でしか、風に動かさるる葦か、抑何を觀んとして出でしか、柔き衣を衣たる人か、視よ、錦を衣て奢れる者は王の宮に在り。然らば何を觀んとして

出でしか、預言者か、然り、我爾等に語ぐ、彼は預言者よりも大なり。蓋彼は夫の錄して、視よ、我我が使を爾の面前に遣し、爾に先だちて、爾の道を備へしめんと、曰はれたる者なり。

我誠に爾等に語ぐ、婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる者は起らざりき、然れども天國に於て、至て小き者は、彼より大なり。

授洗イオアンの日より今に至るまで、天國は力を以て得らる、而して力を用ゐる者は之を奪ふ、蓋悉くの預言者と律法とは預言してイオアンまでに終れり。且若し爾等承けんことを欲せば、彼は來るべきイリヤなり。

耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

（六一）「ファリセイ」及び學士の不信を譏めらる。（マトフェイ一一ノ一六—一九。ルカ七ノ二九—三五〇）。

主は言を續けて曰く、彼に聞きし衆民及び稅吏等はイオアンの洗禮を受けて、神の義を稱せり。然れども「ファリセイ」等及び律法師等は彼より洗禮を受けずして、彼等に於ける神の旨を拒みたり。

抑我斯の世を誰に譬へんか、是れ童子、街に坐して、其侶に呼びて、我等は爾等に簫を

吹きたれども、爾等踊らざりき、爾等に悲の歌を謠ひたれども、爾等哭かざりきと云ふ者に似たり。蓋イオアン來りて、食はず、飲まず、人は言ふ、彼魔鬼に憑らると、人の子來りて、食ひ飲む、又言ふ、視よ、是れ食を嗜み酒を好む者、稅吏及び罪人の友なりと。惟睿智の子は睿智の義を明にせり。

（六二）主、或る市の不信を譴めらる。（マトフェイ一一ノ二〇—二四）。

其時主イエスス殊に多く異能の行はれし諸邑の悔改せざるに因りて、之を責めて曰へり、禍なる哉爾ホラシンよ、禍なる哉爾ワイフサイダよ、蓋爾等の中に行はれし異能は、若しティル及びシドンに行はれしならば彼等は早く麻を衣、灰を蒙りて、悔改せしならん。故に我爾等に語ぐ、審判の日に於て、ティル及びシドンは爾等より忍び易からん。天にまで擧げられしカペルナウムよ、爾も地獄にまで落されん、蓋爾の中に行はれし異能は、若しソドムに行はれしならば、彼尙存して今日に至りしならん。故に我爾等に語ぐ、審判の日に於て、ソドムの地は爾より忍び易からん。

（六三）主、父に感謝す、又衆民を己に招ぐ。（マトフェイ一一ノ二五—三〇）。

其時主イエスス語を續ぎて曰へり、父、天地の主よ、我爾を讃榮す、爾此等を智者及び

達者に隠して、之を赤子に顕ししに因る、父よ、然り、蓋是くの如きは爾の旨の嘉せし所なり。

萬物は我が父より我に授けられたり、父の外に子を識る者なく、子及び子が顕さんと欲する者の外に父を識る者なし。

凡そ勞苦する者及び重を任ふ者は我に來れ、我爾等を安んせしめん、我が軛を負ひて我に學べ、我は心温柔にして謙遜なればなり、爾等は其靈に安息を獲ん、蓋我が軛は易く、我が任は輕し。

（六四）シモンの家に於て罪人を憐恤せらる。（ルカ七ノ三。六―五〇。）

「ファリセイ」等の一人彼に共に食せんことを請ひたれば、彼は「ファリセイ」の家に入りて席坐せり。時に其邑の婦にして罪ある者、彼が「ファリセイ」の家に席坐するを知りて、香膏を盛れる玉の盒を携へ來り、其後に足の下に立ち、哭きて、涙を以て其足を濡し、己の首の髪を以て之を拭ひ、其足に接吻して、之に香膏を抹れり。

彼を招きたる「ファリセイ」は此を見て、己の中に謂へり、此の人若し預言者たらば、彼に捫る者の誰たり、如何なる婦たるかを知らん、蓋是れ罪女なり。主イイスス彼に答へて曰へり、シモンよ、我爾に言ふべき事あり。彼曰く、師よ、之を言へ。

主イイスス曰へり、或債主に二人の負債者ありて、一人は銀五百枚、一人は五十枚を負へり。其償ふ能はざるに因りて、彼は二人に免せり、然らば二人の中彼を愛すること孰か多からん試に言へ。シモン對へて曰へり、意ふに、多く免されし者ならん。彼は之に謂へり、爾が議りしこと正し。

是に於て婦を顧みて、シモンに謂へり、爾此の婦を見るか、我爾の家に入りしに、爾は我が足の爲に水を給へざりき、然るに彼は涙を以て我が足を濡し首の髪を以て之を拭へり。爾は我に接吻せざりき、然るに彼は、我が此に入りし時より、我が足に接吻して已めず。爾は我が首に油を抹らざりき、然るに彼は香膏を我が足に抹れり。是の故に我爾に語ぐ、彼の多くの罪は赦さる、蓋彼多く愛せり、然れども少く赦さる者は少く愛するなり。乃婦に謂へり、爾の罪は赦さる。

彼と共に席坐する者己の中に言へり、此れ何人にして罪をも赦すか。彼婦に謂へり爾の信は爾を救へり安然として往け。

（六五）主、尚ガリレヤを巡遊せらる。（ルカ八ノ一―三。）

厥後、彼は、諸の邑及び村を巡りて、教を宣べ、神の國を福音せり、彼と偕に十二徒あり亦曾て、惡鬼及び諸病より痊されたる數人の婦あり、即七の魔鬼の出でたるマリヤ稱して「マグタリナ」と云ふ者、又イロドの家宰フザの妻イオアンナ、又スサンナ及び其他多くの婦、其所有を以て彼に事へし者なり。

（六六）カペルナウムに於て惡鬼、聾者、疲者等を醫さる。

（マトフェイ一二ノ二―二三。マルコ三ノ二〇―二一。）

カペルナウムに歸り、主は門徒等と偕に家に入りしに、民復集り、彼等餅を食ふ遑なきに至れり。彼の親屬は聞きて彼を取らん爲に出でたり、蓋他の者彼等に、彼は狂へりと言へり。

時に魔鬼に憑らるる瞽にして瘖なる者を彼に携へ來れるあり、彼之を醫し、瞽にして瘖なる者は言ひ且見るを得たり。衆民駭きて曰へり、此れダヴィトの子ハリストスなるに非ずや。

（六七）「ファリセイ」等、主を誹る。主これを斥く。（マトフェイ一二ノ二四―三〇。マルコ三ノ二二―二七。）

然れども「ファリセイ」等之を聞きて曰へり、彼が魔鬼を逐ひ出だすは、魔鬼の魁ヴェルゼウルに藉るに外ならず。又イエルサリムより下れる學士等は、彼はヴェルゼウルに憑られ、魔鬼の魁に藉りて、魔鬼を逐ひ出だすと云へり。

主イイスス其意を知りて、彼は之を召して、譬を以て之に謂へり、サタナ如何ぞサタナを逐ひ出だすを得ん。若し國自ら分れ爭はば、其國立つ能はず。若し家分れ爭はば、其家立つ能はず。凡の國自ら分爭はば、荒墟となり、凡の邑或は家自ら分れ爭はば、立たざらん。

若しサタナにしてサタナを逐ひ出ださば、彼自ら分れ爭ふなり、然らば其國如何にして立能はず、即其終至れるなり。

若し我ヴェルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出だすか、故に彼等は爾等の審判者と爲らん。然れども若し我神の神に藉りて、魔鬼を逐ひ出ださば、則神の國果して爾等に臨みしなり。

或は人如何にして強き者の家に入りて、其器を劫すを得るか、豈先づ強き者を縛りて然る後其家を劫すに非ずや。我と偕にせざる者は我に敵し、我と偕に聚めざる

者は散らすなり。

（六八）聖神を誹る罪は赦されず。（マトフェイ一二ノ三〇—三二。マルコ三ノ二八—三〇。）

我誠に爾等に語ぐ、凡の罪と褻瀆と、人之を以て瀆さば、人の子に赦されん、然れども神に對するの褻瀆は人人に赦されざらん。然れども聖神を瀆さん者は世世に赦されず、乃永遠の定罪に干らん。

人の子に敵して言を出ださば、其人赦されん、然れども聖神に敵して言を出ださば、其人今世にも來世にも赦されざらん。

（六九）惡言は何れより出るか。虛言の證責。（マトフェイ一二ノ三三—三七。）

斯く言へるは、人人が彼は汚鬼に憑らると言ひし故なり。

或は樹を善しとし、其果をも善しとせよ、或は樹を惡しとし、其果をも惡しとせよ、蓋樹は其果に由りて識らる。蛇の類よ、爾等惡しき者にして、何ぞ善きこと言ふを得ん、蓋心に充つる者は口に言ふなり。善き人は善き寶庫より善き者を出だし、惡しき人は惡しき寶庫より惡しき者を出だす。

我爾等に語ぐ、凡ろ人の言ふ所の虛しき言は、審判の日に於て之が答を爲さん、蓋爾

は己の言に由りて義とせられ、亦己の言に由りて罪に定められん。

（七〇）休徵を請ふ者に答ふ。（マトフェイ一二ノ三八—四二。）

其時或る學士及び「ファリセイ」等曰へり、師よ我等爾よりする休徵を覩んと欲す。彼答へて曰へり、姦惡の世は休徵を求む、而して預言者イオナの休徵の外、之に休徵は與へられざらん、蓋イオナが三日三夜鯨の腹に在りし如く、人の子も三日三夜地の心に在らん。

ニヂワイヤの人は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改せり、視よ、此にはイオナより大なる者あり。南方の女王は審判の時に斯の世と共に起ちて、之を罪せん、蓋彼は地の極よりソロモンの智慧を聽かんが爲に來れり、視よ、此にはソロモンより大なる者あり。（マトフェイ一二ノ四三—四五。）

（七一）人より出でし惡鬼の再び人に歸る事。

汚鬼人より出でて後水なき地を巡り、安息を求むれども得ず、其時曰く、我曾て出でし我が家に歸らんと、既に來りて其家の虛しくして、掃き且飾りたるを見、乃往きて己よりも惡しき他の七鬼を携へ來り、偕に入りて彼處に居るなり、是に於て其人の

爲に、後の忠は先より更に甚し、斯の惡しき世にも亦是くの如くならん。

（七二）主と人人との神の上の親近。（マトフェイ一二ノ四六―五〇。マルコ三ノ三一―三五。ルカ八ノ一九―二四。）

主イエスが尙民に語れる時、彼の母及び兄弟外に立ちて、彼と言はんと欲せり、然れども群集の爲に近づくを得ざりき。故に外に立ち、人を遣はして、彼を呼べり。時に民彼を環りて坐せり、或彼に謂へり、視よ爾の母及び爾の兄弟外に在りて爾を見且言はんと欲して爾を尋ぬ。

彼は言ひし者に答へて曰へり、孰か我が母たり、孰か我が兄弟たる、乃手を伸べて其門徒を指し環り坐せる者を圖視して曰く、是れ我が母及び我が兄弟なり、我が母及び我が兄弟とは、神の言を聽きて行ふ者是なり。蓋凡そ天に在す我が父の旨を行はん者は、彼即我が兄弟なり、姉妹なり、母なり。

（七三）群集に譬を設けて敎訓せらる。（マトフェイ一三ノ一―三。マルコ四ノ二。ルカ八ノ四。）

當日主イエス家を出でて、海濱に坐せり。復海濱に於て敎へ始めしに、衆くの民諸の邑より集りて、彼に就きたれば、彼舟に登りて坐するに至れり、民皆海に沿ひて、

陸に在りき。

乃多く譬を以て彼等を敎へたり、其敎に於て彼等に斯く謂へり、

（イ）種播の譬。（マトフェイ一三ノ三―九。マルコ四ノ三―九。ルカ八ノ五―八。）

之を聽け、種を播く者は播かんが爲に出でたり。播く時、路の旁に遺ちし者あり、鳥來りて之を啄めり。土の薄き磽地に遺ちし者あり、土の深からざるに因りて、直に萠え出でしが、日の出でて後萎み、根なきに因りて槁れたり。棘の中に遺ちし者あり、棘起きて、之を蔽ひたれば、實を結ばざりき。沃壤に遺ちし者あり、乃發し長ずる實を結びて、或は三十倍、或は六拾倍、或は百倍と爲れり。

之を言ひて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

「ロ」稗の譬。（マトフェイ一三ノ二四―三〇。）

又譬を設けて彼等に謂へり、天國は人の其田に美種を播きたるが如し。人人の寢ぬる時、其敵來り、麥の中に稗を播きて去れり。苗秀でて實るに及び、稗も亦見れたり。家主の諸僕來りて之に謂へり、主よ、爾は美種を爾の田に播きたるに非ずや、然らば何に由りて稗あるか、彼は之に謂へり、敵人之を爲せり。諸僕彼に謂へり、然ら

ば爾は我等が往きて、之を拔かんことを欲するか、彼曰へり、否、恐らくは爾等稗を拔く時、之と共に麥をも拔かん。二の者共に長ずるを容して、收穫に至れ、收穫の時、我苅る者に謂はん、先づ稗を集め、之を束ねて、焚かん爲に備へ、而して麥を我が倉に斂めよと。

「ハ」 種の開發の譬。（マルコ四ノ二六―二九。）。

主は復言へり、神の國は人種を地に投ずるが如し、夜に寢ね興き、種の如何に發し長ずるを知らず。蓋地は自ら始に苗、次に穗、次に穗の中に穀を盈たす。實の熟するに及びて、直に鎌を遣す、穫る時至りたればなり。

『マトフェイ福音に因るの譬』。又譬を設けて彼等に謂へり、天國は芥種、人取りて其田に播きたる者の如し、是れ萬の種の中に最も小き者なれども、長ずるに及びては、悉くの野菜より大にして、樹と爲り、天空の鳥來りて、其枝に棲むに至る。

『マルコ福音に因るの譬』。又曰へり、我等神の國を何に比へんか、抑何の譬を以て之を譬へんか、此れ芥種の如し、其地に播かるる時は、地上の悉くの種より小しと雖、播かれたる後は萌え出でて、悉くの野菜より大になり、巨なる枝を出だし、天空の鳥其

蔭に棲むを得べきに至る。

「ニ」 酵の譬。（マトフェイ三ノ三三。一）。

又譬を彼等に語りて曰へり、天國は酵の如し、婦之を取りて、三斗の粉の中に納れしに、悉く發酵するに至れり。

「ホ」 田に藏れたる寶の譬。（マトフェイ三ノ四四。一）。

又天國は田に藏れたる寶の如し、人之を見出だしたれば秘し、喜びて往き、盡く其所有を鬻ぎて、斯の田を買ふ。

「ヘ」 眞珠の譬。（マトフェイ一三ノ四五―四六。）。

又天國は美き眞珠を求むる商賈の如し、彼一の値貴き眞珠を見出だしたれば、往きて、盡く其所有を鬻ぎて、之を買へり。

「ト」 魚網の譬。（マトフェイ一三ノ四七―五〇。）。

又天國は海に施して、種種の魚を集むる網の如し、既に盈ちたれば、之を岸に曳き上げ、坐して、嘉き者を擇びて、器に入れ、惡しき者を外に棄てたり。世の終末にも是くの如くならん、天使等出でて、惡者を義者の中より分けて、之を火の爐に投せん、彼處

には哀哭と切齒とあらん。

「チ」　譬喩の教訓の終結。（マトフェイ一三ノ三四―三五。マルコ四ノ三三―三四。）

此れ皆主イエスス譬を以て民に語れり、斯くの如き多くの譬を以て彼等が聽くを得る所に循ひて、教を宣べたり。譬に非ずしては神の國の事を彼等に語らざりき。預言者を以て言はれし事に應ふを致す云く、我が口を啓きて譬を言ひ、創世以來隱れたることを述べんと。獨處の時悉く之を其門徒に解けり。

「七四」　譬の説明。「イ」　何の譬を以て衆民に教訓せられたるか。（マトフェイ一三ノ一〇―一七。マルコ四ノ一〇―一七。ルカ八ノ一〇。）

主イエスス民を散じて家に入り、民無く、獨處に在りし時彼を環れる者は十二徒と偕に、彼に譬の事を問へり。爾何の故に譬を以て民に語るか、彼答へて曰へり、爾等には天國の奥義を知ることを與へられたれども、彼等には與へられざりし故なり。彼の外の者には凡て譬を用ゐる、蓋有てる者は、之に與へて餘あらしめ、有たざる者は、其有てる物も之より奪はれん。我が譬を以て彼等に語るは、彼等が視て見ず聽きて聞かず、又悟らざる故なり。恐らくは轉じて其罪の赦されん、斯く彼等に於てイ

サイヤの預言應へり、云く、爾等耳にて聽けども悟らず、目にて視れども見ざらん、蓋此の民の心は頑になれり、耳は聽くに怖く、目は自ら閉ぢたり、恐らくは目にて見、耳にて聞き、心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さんと。

然れども爾等の目は見、爾等の耳は聞くが故に福なり、蓋我誠に爾等に語ぐ、多くの預言者と義人とは、爾等が見る所を見んと欲して見ざりき、爾等が聞く所を聞かんと欲して聞かざりき。

「ロ」　種播の譬の説明。（マトフェイ一三ノ一八―二〇。マルコ四ノ一三―二〇。ルカ八ノ一九。）

其門徒彼に問ひて曰へり、種播の譬は何ぞ。爾等斯の譬を悟らざるか、然らば如何にして凡ての譬を識らん、此の譬の義は左の如し。

播く者は言を播くなり、種は神の言なり。

路の旁に落し種は、これ天國の言を聞きて悟らざる者には、凶惡者「サタナ」來りて其心に播かれたる言を奪ふ、彼等が信じて救はれざらんが爲なり、此れ路の旁に播かれたる者なり。

礫地に播かれたる者は、同じく是れ言を聽きて、直に喜びて受くれども、己に根なき

が故に、暫時のみ、後、言の爲に艱難或は窘逐に遇はば直に躓く。

棘の中に播かれたる者は、是れ言を聽けども、斯の世の慮と、貨財の惑と、其他の慾とは入りて、言を蔽ひて、實を結ばしめず。是れ神の言を聽きて去り、而して棘の中に遺ちし者は、是れ聽きて去り、而して度生の慮と貨財と宴樂とに、蔽はれて、實を結はず。

沃壤に播かれたる者は、是れ言を聽きて之を受け、且悟り實を結ぶ者となり、一言を聽きて清潔良善なる心に之を守り、忍耐して實を結ぶこと、或は三十倍或は六十倍或は百倍なり。

「八」 稗の譬の説明 (マトフェイ一三〇。ノ三六—三四。)

其門徒等、主に問ふて曰く、請ふ田の稗の譬を我等に解け。彼は之に答へて曰へり、美種を播く者は人の子なり、田は世界なり、美種は天國の子、稗は凶惡者の子なり、之を播きたる敵は惡魔なり、收穫は世の終末なり、刈る者は天使等なり。故に稗を集めて、火に焚くが如く、此の世の終末にも是くの如くならん。人の子は其天使等を遣して、其國より凡の誘惑と不法を行ふ者とを集めて、之を火の爐に投せん、彼處に哀哭と切齒とあらん。時に義人等は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて

聽くを得る者は聽くべし。

「九」 神の言に注意すべき事の教訓。(マルコ四ノ二一—二五。ルカ八ノ一六—一八。)

主、又門徒等に謂へり、燈を取り來るは豈之を斗の下或は牀の下に置かん爲なるか、之を燈臺の上に置かん爲に非ずや然り。

燈を燃し、而して器を以て之を覆ひ、或は牀の下に置く者あらず、乃燈臺の上に置く入る者が光を見ん爲なり。

蓋隱れて顯れざる者なく、藏して知られず、且露ならざる者なし。耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

主、又曰く聽く所を愼め、爾等何の量を以てか人に量らば、是くの如く爾等にも量られん、且爾等聽く者に加へられん。

蓋有てる者は之に與へられ、有たざる者は、其有てりと意ふ物も、之より奪はれん。

「十」 譬の教訓の終結。(マトフェイ一三〇。ノ五一—五二。)

主イエス彼等に謂ふ、皆爾等悟りしか、彼等曰く、主よ、然り、彼は之に謂へり、故に凡そ天國を學びたる學士は、其寶庫より新しき物と舊き物とを出だす家主の如し。

（七五）海邊にて、主に從はんとする者に對しての答。（マトフェイ八ノ一—二二。マルコ四ノ三五。）

譬を以て教を宣べたる其日の暮に及びて、主門徒に彼の岸に往かんことを命じ、海に向ひて赴けり。

時に一の學士彼に就きて曰へり、師よ、爾何處に往くとも、我爾に從はん。主イイスス之に謂ふ、狐には穴あり、天空の鳥には巢あり、惟人の子には首を枕する處なし。又一の門徒彼に謂へり、主よ、我に先づ往きて我が父を葬るを任せよ。然れども主イイスス之に謂へり、我に從へ、死者に其死者を葬るを任せよ。

（七六）海を經て往く時嵐を鎮む。（マトフェイ八ノ二三—二七。マルコ四ノ三五—四一。ルカ八ノ二二—二五。）

主は群衆を見て、舟に登りし時、門徒も亦民を去らしめて、主に從へり。而して主は彼等に謂へり、我等今湖の彼岸に濟るべし、乃行けり。他の舟も亦彼と偕に在りき。行く時彼寢ねたり。視よ、颶風大に起り、浪舟に打ち入りて、殆ど滿つるに至り、危きこと甚だし。時に主は舟尾に在りて枕して寢ねたり、門徒就きて彼を醒して曰へり、夫子我等亡ぶ、主よ我等を救ひ給へと亡ぶ。師よ、我等が亡ぶるを爾顧みざるか。

主は之に謂へり、小信の者よ、何ぞ怯る、彼起きて、風を禁め、海に謂へり、默せ、靖まれ、風即息みて、大に穩になれり。人人有りし事を視て、懼れ驚きて互に言へり、此れ何人ぞ、風にも水にも命じて、亦彼に順ふ。

（七七）ガダラに於て魔鬼を逐ふ。（マトフェイ八ノ二八—九ノ一。マルコ五ノ一—二一。ルカ八ノ二六—三九。）

ガリレヤに對へるガダラ或はゲルゲシンの地に着きて、彼が舟を離れし時、魔鬼に憑らるる者二人墓より出でて、彼を迎ふ、甚猛し、人の敢て其路を過ぐるなきに至れり。視よ彼等號びて曰へり、神の子イイスよ、我等と爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我等を苦めん爲に此に來りしか。其中一人は特に猛しかりき。邑の一人の者彼を迎へたり、乃久しく魔鬼に憑られ、衣を衣ず、家に住まずして、墓に住める者なり。此の人は鐵索を以てすとも、何人も彼を繫ぐ能はざりき、蓋彼は屢桎梏と鐵索とに繫がれたれども、鐵索を斷ち、桎梏を毀り、人彼を制するを得ざりき。夜も晝も恒に山と墓とに在りて號び又其身を石に打てり。

彼は他の者と偕に遙に主イイスを見て趨り附きて、之を拜し、大なる聲を以て呼

びて曰へり、至上なる神の子イエスよ、我と爾と何ぞ與らん、神に因りて爾に求む、我を苦むる勿れ。蓋主イエスの之に謂へり、汚鬼斯の人より出でよ。又之に問へり、爾の名は何ぞ。答へて曰へり、我の名は大隊我等多き故なり。乃切に彼等を此の地の外に逐はざらんことを求めたり。

魔鬼皆彼に求めて曰へり、我等を豕に遣して、其中に入らしめよ。彼は之に謂へり、往け、魔鬼出でて豕の群に入りしに、視よ、豕の群悉く山坡より海に逸けて、水に溺れたり。豕は約二千匹なりき。牧ふ者有りし事を覩て、奔り往きて、此等の事と魔鬼に憑らるる者の事を、邑と諸村に告げたれば、人人有りし所を覩んが爲に出で、主イエスに來りて魔鬼の出でたる人が衣を着、心慥にして、主イエスの足下に坐せるを見て懼れたり。

見し者は、魔鬼を患ひたる者に、有りし事の如何、及び豕の事を彼等に語げたれば、ガダラ地方の民は、皆主イエスに彼等を離れんことを請へり、大に懼れし彼なり。

彼舟に登りて返れり。

彼が舟に登れる時、魔鬼に憑られたる者、彼と偕にせんことを求めたり。主イエス

許さずして、之に謂ふ、爾の家に爾の親屬に歸りて、彼等に主が如何なる事を爾に行ひ、及び如何に爾を憐みしを告げよ。彼往きてデカポリに於て主イエスが彼に如何なる事を行ひしを宣べたれば、人皆之を奇とせり。

彼舟に登り、濟りて己の邑に來れり。

（七四）血漏を患ふる者を愈さる。（マトフェイ九ノ一八―二二。マルコ五ノ二一―三四。ルカ八ノ四〇―四八。）

主イエス舟に乘りて、復彼の岸に濟りし時、衆くの民は彼に集まり、民彼等を接けたり、皆彼を俟ちたればなり。

彼は尚海濱に在りき。視よ、イアイルと名づくる人にして會堂の宰たる者、來りて主イエスの足下に俯伏し、其家に入らんことを求めたり、蓋彼に獨の女、年約十二の者ありて、今死せんとせり。切に彼に求めて曰く、我が女死せんとす、請ふ、來りて、之に手を按せ、之をして愈えて、生くるを得しめよ。

主イエス之と偕に往けり、時に衆くの民從ひて、彼に擁し逼れり。

或婦十二年血漏を患ひ、多くの醫師に因りて多く苦み、其所有を盡く費したれども聊も益なくして、益惡しくなれり。此の婦主イエスの事を聞きて、民の中に後よ

り來りて、彼の衣に捫れり、蓋曰へり、我第其衣に捫らば、愈ゆるを得んと。直に其血の源涸れて、婦其身に病の愈されしを覺えたり。

主イエス忽自ら能の己より出でたるを覺え、民の中に顧みて曰へり、誰か我が衣に捫りたる。衆の認めざる時ペトル及び彼と偕に在りし者曰へり、夫子、民爾を繞りて擁し迫るに、爾は誰か我に捫りたると謂ふか。然れども主イエス曰へり、我に捫りし者あり、蓋我能の我より出でしを覺えたり。

然れども彼は圜視して、之を行ひし者を見んと欲せり。婦は自ら隱す能はざるを見て、戰ぎて來り、彼の前に俯伏して、彼に捫りし故、又如何にして立に愈されしを、彼に衆民の前に告げたり。

彼は之に謂へり、女よ、爾の信は爾を救へり、安然として往き、爾の病より健になれ。

（七九）イアイルの女の復活。（マトフェイ九ノ二三―二六。マルコ五ノ三五―四三。ルカ九ノ四九―五六。）

彼が尚言ふ時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾の女已に死せり、何ぞ復師を煩はす。師を煩す勿れ。主イエス語ぐる所の言を聞きて、直に會堂の宰に謂ふ、懼る勿れ、惟信せよ彼は救はれん。

會堂の宰の家に來りし時、己に從ひ家の内に入るを許さず。主イエス家に入りて、人人の號哭其哭きて大に叫ぶを見たり。衆人爲に哭き哀めるに、彼曰へり、哭く勿れ、彼は死せしに非ず、乃寢ぬるなり。人人其死せしを知りて、彼を哂へり。主は退けと謂ひて、彼等を退かしめたり。民の出されし後、小女の父母と彼に從へる者とを率ゐて、小女の臥せる處に入り、小女の手を執りて、之に謂へ、タリファ、クミ、譯すれば女よ、爾に言ふ、起きよ。其神返りて直に起き、且歩めり。蓋其年十二なりき、主は之に食を與へんことを命せり。

見し者及び兩親大に駭けり。主イエス嚴しく彼等に之を人に知らしめんことを禁せり、然るに此の事の聲聞、徧く其地に傳はれり。

（八〇）二人の瞽者及び魔鬼に憑られし瘖者を愈さる。（マトフェイ九ノ二七―三四。）

主イエス、イアイルの家より往く時、二人の瞽者彼に從ひて、呼びて曰へり、ダヴィドの子イエスよ、我等を憐め。彼家に入りしに、瞽者彼に就けり、主イエス之に謂ふ、我之を成すことを能すと信ずるか、彼等曰く、主よ、然り。是に於て其目に觸れて曰へり、爾等の信の如く爾等に成るべし。其目即啓きたり、主イエス嚴しく彼等

を戒めて曰へり、慎みて人に知らしむる勿れ。然れども彼等出でて、其名を遍く、其地に揚げたり。

彼等の出づる時、視よ、瘖にして魔鬼に憑らるる人を主イエスに携へ來れるあり、魔鬼逐ひ出だされて、瘖者言へり。民奇として曰へり、イスラエルの中に未だ是くの如き事あらざりき。然れども、ファリセイ等曰へり、彼は魔鬼の魁に藉りて魔鬼を逐ひ出だす。

（八一）再ナザレトを訪はる。（マトフェイ一三ノ五三―五八。マルコ六ノ一―六。）

其後、主はカペルナウムを出でて、己の故郷に至れり、其門徒彼に從へり。己の故土に來りて、會堂に於て彼等を教へたるに彼等奇とするに至れり、曰く、斯の人何より斯る智慧と異能とを得たる、彼は木工の子なるに非ずや、其母はマリヤと名づけらるるに非ずや、其兄弟はイアコフ、イオシイ、シモン、イウダなるに非ずや、其姉妹は皆我等の間に在るに非ずや、然らば此等皆斯の人何より得たるか、遂に彼の爲に惑へり。

主イエス彼等に謂へり、預言者は其故郷、其親屬、其家の外に於て尊ばれざるなし。

乃、彼處に於ては何の異能をも行ふを得ざりき、唯數人の病者に手を按せて、之を醫せり。

（八二）諸邑諸村を巡りて牧者無きの衆民を憐む。（マトフェイ九ノ三五―三八。マルコ六ノ六。）

主イエス徧く邑と村とを巡りて、其諸會堂に於て教へ、天國の福音を宣べ、民間の諸の病諸の疾を醫せり。彼群衆を見て、之を憫みたり、其牧者なき羊の如く、飄れ且散りたるが故なり。是に於て其門徒に謂ふ、穡は多く、工は少し、故に穡主に工を遣せとを求めよ。

（八三）十二門徒を傳道に遣さる。（マトフェイ一〇ノ一―五。マルコ六ノ七。ルカ九ノ一―二。）

主イエス其門徒を召して、彼等に汚鬼を制する權を與へたり、之を逐ひ出だし、又諸の病諸の疾を醫さん爲なり。二人つつ彼等を神の國を傳へ、亦病者を醫さん爲に遣せり。

十二使徒の名左の如し、第一にはシモン、名づけてペトルと云ふ者及び其兄弟アンドレイ、セワエデイの子イアコフ及び其兄弟イオアン、フィリップ及びワルフォロメイ、フォマ及び稅吏マトフェイ、アルフェイの子イアコフ及びレワエイ、稱してファデイと云ふ者シモ

ン「カナニト」及びイウダ「イスカリオト」即彼を賣りし者なり。

（八四）傳道に遣さるる門徒等に對する教訓。（マトフェイ一〇ノ五―一五。マルコ六ノ八―一一。ルカ九ノ三―五。）

主イエス此の十二使徒を遣し、之に戒めて曰へり、異邦の途に往く勿れ、サマリヤの邑に入る勿れ、寧ろイスライリの家の亡びし羊に往け。往く時宣べて曰へ、天國は邇けりと。病者を醫し、癩者を潔め、死者を起し、魔鬼を逐ひ出だせ、費なくして受けたり、費なくして與へよ。

又彼等に、旅の爲に、一の杖の外、金をも銀をも銅をも爾等の帶に貯ふる勿れ、行囊をも二の衣をも履をも杖をも執る勿れ、蓋勞する者の其糧を得るは宜しきなり。留りて亦彼處より途に出でよ。

何の邑或は村に入るとも、其中に孰か可なる者たるを尋ね、彼處に留りて出づるに至れ。家に入る時は、其安を問ひて、此の家に平安と云へ、若し其家之に當らば、爾等の平安は之に臨まん、若し當らずば、爾等の平安は爾等に歸らん。

若し爾等を接けず、爾等の言を聽かざる者あらば、其家或は其邑を出づる時、爾等の足の塵を拂へ、これ彼等に對する證を爲さん爲なり。

（八五）門徒等の働きの事の教訓。（マトフェイ一〇ノ一六―四二。）

視よ、我が爾等を遣すは、羊を狼の中に入るるが如し、故に智きこと蛇の如く、玷なきこと鴿の如くなれ。謹みて人人に意を用ねよ、蓋彼等は爾等を其公會に解し、其會堂に鞭うたん。且爾等は我が爲の故に、諸侯諸王の前に曳かれん、彼等と異邦民とに證を爲さん爲なり。爾等を解さん時、如何に或は何を言ふべきを慮る勿れ、其時言ふべきこと爾等に與へられんとすればなり、蓋爾等言はんとするに非ず乃爾等の父の神は爾等の衷に言はん。

兄弟は兄弟を、父は子を、死に付し、子は親を攻め、且之を殺さん。爾等我が名の爲に衆人に憎まれん、惟終に至るまで忍ぶ者は救はれん。爾等を此の邑に窘逐する時は他の邑に奔れ、蓋我誠に爾等に語ぐ、爾等が未だイスライリの諸邑を巡り盡さざるに人の子來らん。

門徒は其師の上に在らず、僕は其主の上に在らず、門徒は其師の如く、僕は其主の如くなりて足れり、若し家主を呼びてベエルゼブルと云ひしならば、況んや其家人を

や。故に彼等を懼るる勿れ、蓋覆はれて露はれざる者なく、隠れて知られざる者なし。我が暗の中に爾等に言ふ事を、爾等光の中に述べよ、耳を附けて聴く事を屋の上に傳へよ。身を殺して靈を殺す能はざる者を懼るる勿れ、寧靈と身とを地獄に滅すことを能する者を懼れよ。二の雀は一錢にて售らるるに非ずや、若し爾等の父の旨なくば、其一も地に隕ちざらん、爾等に於ては首の髪も皆數へられたり、故に懼るる勿れ、爾等は多くの雀より貴し。

然らば凡そ我を人の前に認めん者は、我も亦彼を天に在す我が父の前に認めん、我を人の前に諱まん者は、我も亦彼を天に在す我が父の前に諱まん。

我和平を地に投せん爲に來れりと意ふ勿れ、我が來れるは和平に非ず、乃刄を投せん爲なり、蓋我が來れるは人を其父と、女を其母と、婦を其姑と分たん爲なり、人の家人は其敵と爲らん。

父或は母を愛すること我に過ぐる者は、我に宜しからず、子或は女を愛すること我に過ぐる者は、我に宜しからず。己の十字架を負ひて我に從はざる者は、我に宜しからず。其生命を得る者は、之を喪はん、我が爲に其生命を喪ふ者は、之を得ん。

爾等を接くる者は、我を接くるなり、我を接くる者は、我を遣しし者を接くるなり。

預言者の名に因りて預言者を接くる者は、預言者の賞を受けん。義人の名に因りて義人を接くる者は、義人の賞を受けん。門徒の名に因りて此の小子の一に、惟冷水一杯を飲ましめん者は、我誠に爾等に語ぐ、其賞を失はざらん。

（八六）主及び門徒相別れて傳道に往く。（マトフェイ一一ノ一。マルコ六ノ一二。ルカ九ノ六。）

主イエス十二門徒に命じ畢りて、彼處より移り、其諸邑に教を傳へ、道を宣べたり。門徒等出でて、鄕村を行き、遍く福音を宣べ、悔改を傳へ、醫を施せり。且多くの魔鬼を逐ひ出だし、多くの病める者に油を傳けて、之を醫せり。

（八七）先驅者イオアンの斬首。（マトフェイ一四ノ六―一二。マルコ六ノ一九―二九。）

イロデアダはイオアンを怨みて、殺さんと欲したれども、能はざりき。適好き機會の日は至れり、即イロド、其誕生日に於て、諸大臣千夫長及びガリレヤの尊者の爲に筵を設けたり。

イロドの誕生日に値り、イロデアダの女入りて舞ひ、イロド及び共に席坐する者の喜を獲たり。王女に謂へり、爾が欲する所を我に求めよ、我爾に與へん。又彼に誓へ

り、凡そ爾が我に求むる所は、我が國の半に至ると雖、爾に與へん。

女出でて、其母に謂へり、何をか求むべき。彼曰へり、授洗イオアンの首。女、母に囑められ、直に急ぎ入りて、王に求めて曰へり、我爾が授洗イオアンの首を、今盤に盛りて我に與へんことを欲す。

王憂ひたれども誓の爲、又共に席坐する者の爲の故に、之を拒むを欲せざりき。王直に一卒を遣して、其首を携へんことを命せり。彼往きて、之を獄に斬り、其首を盤に盛り、携へて之を女に與へ、女之を其母に與へたり。

其門徒之を聞きて來り、其屍を取りて、墓に藏めたり。

又往きて此の事を主イイスに告げたり。

（八八）イロド、主の事を聞きて擾動す。（マトフェイ一四ノ一―二。マルコ六ノ一四―一六。ルカ九ノ七―九。）

當時門徒はガリレヤに往きて傳道し、主はその諸邑を傳道せられし時、分封の君イロド、主イイスの聲聞と、凡そ主イイスの行ひし事を聞きて惑へり。蓋當時主の名は揚れり。或者は是をイオアンの死より復活せしなりと言ひ、他の者はイリヤの現れしなりと言ひ、又他の者は、古の預言者の一人の復活せしなりと云へり。

イロド自ら謂へり、イオアンは、我已に其首を斬れり、今我が是くの如き事を聞くは、斯れ何人ぞ、その良心は遂に彼をして、イオアンなりと想はしめたり。イロド其侍臣に謂へり、此れ授洗イオアンなり、彼死より復活せり、故に彼に由りて異能は行はる。而して他の者は是れイリヤなりと曰ふに、唯イロド我が首を斬りしイオアンなり、彼は死より復活せりと曰ひ、乃彼を見んと欲せり。

（八九）門徒等の歸還。（マルコ六ノ三〇―三一。ルカ九ノ一〇―一一。）

主イイスに告げたり。彼は之に謂へ使徒等歸りて、其行ひし事敎へし事を以て、主イイスに告げたり。彼は之に謂へり、爾等獨野の處に往きて、暫く休め。蓋來る者去る者多くありて、彼等食ふ遑だになかりき。其後イロド彼を見んと欲すと聞き、主自ら退かんと欲して、彼は門徒等を携へて、潛にワイフサイダと名づくる邑に近き野の處に退けり。彼等乃舟に乘りて、獨野の處に往けり。民其往くを見て、多くの者彼等を識りたれば、諸の邑より徒歩にて共に趨り、其往く所に先だちて、群衆主に隨へり、主が病者に行ひし奇蹟を見

たればなり。

（九〇）奇蹟にて五千人を飽かしむ。（マトフェイ一四ノ一四―二三。マルコ六ノ三四―四六。ルカ九ノ一一―一七。イオアン六ノ三―一五。）

彼方の岸に濟り、主イイスス山に登りて、彼處に門徒と偕に坐せり。時にイウデヤ人の節筵なる逾越節近づけり。

主イイスス出でて、群衆を見て、之を憫みたり、其牧者なき羊の如き故なり、乃多く之を教へたり。神の國の事を語り、且醫を需むる者を醫せり。

時既に暮くなりて、日の尺く時、十二門徒彼に就き曰へり、此は野の處にして、時已に晩し、民を去らしめよ、鄉村に往きて、己の爲に食を市はん爲なり。蓋彼等は食ふ可き物なし。然れども主イイスス彼等に謂へり、其往くを要せず、爾等之に食を與へよ。且フィリップに向ひ問ふて曰く、我等何處より餅を市ひて、彼等に食はしめんか、之を言ひしは、彼を試みん爲なり、蓋自ら何を行はんとする事を知れり。フィリップ答へて曰へり、銀二百を以て餅を市ふとも、彼等の爲に各少しづゝを受くるに足らず。其時他の門徒も亦彼に謂へり我等往きて、銀二百を以て餅を市ひ、之を與へて食は

しめんか。往きて觀よ。彼等往きて之を知りたり、其門徒の一、シモン、ペトルの兄弟アンドレイ、彼に謂ふ、此に一の童子ありて、麰麥の餅五と小き魚二とを有てり、然れども是れ何をか此の多數に爲さん。蓋其人約五千ありき。他の門徒も亦謂へ、我等には五の餅と二の魚との外に有るなし。彼曰へり、之を此に携へ來れ。且彼等を五十づつ並び坐せしめよ。其處に多くの草あり、衆人を青草の上に區區に坐せしめたり、乃百人或は五十人づつ列列と席坐せり。

主イイスス、其時、五の餅と二の魚とを取りて、天を仰きて祝福し、餅を擘き、其門徒に與へて、衆の前に陳ねしめ、又二の魚をも衆に分てり。各欲する所に從へり。皆食ひて飽きたり。

衆既に飽きて、彼門徒に謂へり、餘りたる屑を聚めて、廢る所無らしめよ。乃聚めて、食ひし者の餘したる五の麰麥の餅の屑を十二の筐に盈てたり。食ひし者は、婦と幼童との外、約五千人なりき。

人人、主イイススの行ひし奇蹟を見て曰へり、是れ誠に世に來るべき預言者なり。其後主イイススは彼等が來り、急に彼を執りて、王と爲さんと欲するを知りて、復獨

山に遁れたり。

（九一）主、海を履みて往く。（マトフェイ一四ノ二四―三三。マルコ六ノ四七―五二。イオアン六ノ一六―二一。）

日の暮るる時、其門徒下りて海に至り、舟に登りて、海の彼の岸なるカペルナウムに往けり。既に昏くなりて、主イイスス彼等に來らず。風大に吹きて、海に浪たてり。時に舟、海の中に在りて、浪に撼られたり、風の逆ひし故なり。主イイスス、彼等が舟を漕ぐに苦めるを見、海を履みて彼等に就けり。夜約四更の頃、二十五或は三十小里を漕ぎ行きし時、彼等に近づき、而して彼等を過ぎんと欲せり。然るに門徒等、彼が海を履みて、船に近づくを見、是れ怪物なりと意ひて惶れたり。而して是れ怪物なりと曰ひて、乃懼に出りて呼べり。彼等皆彼を見て惶れたり。

然れども主イイスス直に彼等に語りて曰へり、心を安んせよ、是れ我なり、懼るる勿れ。ペトル彼に答へて曰へり、主よ、若し是れ爾ならば、我に水を履みて、爾に至らんことを命せよ。彼曰へり、來れ、ペトル舟を下り、水を履みて、主イイススの許に往けり。然れども風の烈しきを見て懼れ、溺れんとして呼びて曰へり、主よ、我を救へ。主イイスス直に手を伸べて、之を援けて曰く、小信の者よ、何ぞ疑ひたる。乃舟に登

りて彼等に就き、共に船に登るに迫びて、風息みたり。船に在る者就きて、彼を拜して曰へり、爾は誠に神の子なり。

（九二）ゲンニサレトの地に於て奇蹟を行はる。（マトフェイ一四ノ三四―三六。マルコ六ノ五三―五六。）

門徒等、喜びて主を船に接け、船は直に往く地に着きたり。彼等ゲンニサレトの地に至りて、船より出でし時、人人直に彼を識り、地を馳せ廻りて彼の事を傳へたれば、病ある者を牀に載せ、彼の在る所を聞きて、彼處に昇き至れり。病ある者を悉く携へ來らしめ、唯彼の衣の裾に捫らんことを求めたり、之に捫りし者は愈ゆるを得たり。

何時も凡そ彼の入りし所、或は村、或は邑、或は鄉、人其市に病者を置き、唯主の衣の裾にだに捫らんことを求めたり、彼に捫りし者は愈ゆるを得たり。

（九三）カペルナウムに於ての、天の糧の事の教訓。（イオアン六ノ二一―七一。）

奇蹟にて五千人を飽かしめたる翌日、主は其處より、朝早くカペルナウムに到れり。此の日、前夜に海の彼の岸に立てる民は、彼處に門徒の登りたる舟の外に他の舟な

く、且主イイスは門徒と偕に舟に登らずして、門徒のみ往きしを見たり。時に他の船はテイワェリアダより主の感謝して後餅を食ひし所に近く來れり。是に於て民は主イイスの此に在らず其門徒も在らざるを見て、己も亦舟に登り、主イイスを尋ねてカペルナウムに來れり。

海の彼の岸に於て彼に遇ひて曰へり、夫子、爾は何の時にか此に來れる。主イイス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等の我を尋ぬるは、奇蹟を見し故に非ず、乃餅を食ひて飽きたる故なり。朽つる糧の爲に勞する勿れ、乃永遠の生命に存する糧、人の子が爾等に與へんとする者の爲に勞せよ、蓋父なる神は彼を印證せり。

彼等曰へり、我等何を行ひて神の事を爲さんか。主イイス答へて曰へり、神の事は爾等が彼の遣しし者を信ずること、是なり。彼等曰へり、爾何の休徵を行ひて、我等をして之を見て爾を信せしめんか、爾何を爲すか。我等の先祖は野に在りて、マンナを食へり、錄されしが如し、天より彼等に餅を與へて食はしめたりと。

主イイス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、モイセイが爾等に餅を天より與へしに非ず、乃我が父は爾等に眞の餅を天より與ふ。蓋神の餅は天より降りて、世に生命を與ふる者なり。

彼等曰へり、主よ、恒に我等に斯の餅を與へよ。主イイス彼等に謂へり、我は生命の餅なり、我に來る者は飢ゑず、我を信ずる者は永く渴かざらん。然れども我爾等に嘗て、爾等我を見たれども信せずと言へり。凡そ父の我に與ふる者は、我に來らん、我に來る者は、我之を外に逐はざらん。蓋我が天より降りしは、己の旨を行はん爲に非ず、乃我を遣しし父の旨を行はん爲なり。我を遣しし父の旨は、即彼が我に與へし者の中、我其一をも亡はずして、末の日に於て悉く之を復活せしめんとするに在り。我を遣しし者の旨は、即凡そ子を見て之を信ずる者は、永遠の生命を有ち、我末の日に於て、彼を復活せしめんとするに在り。

時にイウデヤ人、其我は天より降りし餅なりと言ひしに因りて、彼を怨みて云へり、此れイオシフの子イイス、我等が其父と母とを識れる者に非ずや、如何にして彼は我天より降れりと言ふか。

主イイス彼等に答へて曰へり、爾等相共に怨言する毋れ。我を遣しし父之を引

かざれば、人我に來る能はず、我に來る者は、我末の日に於て、之を復活せしめん。諸預言者に錄せるあり、彼等皆神に教へられよと、凡そ父に聽きて學びし者は我に來る。此れ人曾て父を見たりと曰ふに非ず、惟神よりする者は、彼父を見たるなり。我誠に誠に汝等に語ぐ、我を信ずる者は、永遠の生命を有つ。我は生命の餅なり。爾等の先祖は野に在りて「マンナ」を食ひたれども、死せり。夫れ天より降る餅は、乃之を食ふ者死せざるを致さん。我は天より降りし生ける餅なり、此の餅を食ふ者は世世に生きん。我が與へんとする餅は即我の體なり、我が世の生命の爲に與へんとする者なり。

時にイウデヤ人互に論じて曰へり、彼如何ぞ我等に其體を與へて、食はしむるを得ん。主イイスス彼等に謂へり、我誠に誠に汝等に語ぐ、爾等若し人の子の體を食はず、其血を飲まずば、己の衷に生命を有たざらん。我が體を食ひ、我が血を飲む者は永遠の生命を有つ、我末の日に於て彼を復活せしめん。蓋我が體は眞に糧なり、我が血は眞に飲物なり。我が體を食ひ、我が血を飲む者は我に居り、我も彼に居るなり。生くる父我を遣し、且我父に由りて生くるが如く、我を食ふ者も我に由りて生

きん。斯れは乃天より降りし餅なり。爾等の先祖が「マンナ」を食ひて、死せし如きに非ず、此の餅を食ふ者は世世に生きん。

此等の事は、彼カペルナウムに教ふる時、會堂に於て言へり。其門徒の中多くの者之を聞きて曰へり、難い哉斯の言、誰か之を聽くを得ん。主イイスス己の衷に其門徒が怨言するを知りて、彼等に謂へり、此れ爾等を惑はすか。爾等若し人の子が曩に在りし處に升るを見ば如何。神は生す者なり、肉は益なし。我が爾等に語りし言は神なり、生命なり。然れども爾等の中に信せざる者あり。蓋主イイスは初より信せざる者の誰たる、及び彼を賣らんとする者の誰たるを知れり。又曰へり、故に我曾て爾等に、我が父より之に與へらるるに非ざれば、人我に來る能はずと言へり。

是より其門徒多く返りて復彼と偕に行かざりき。主イイスス十二徒に謂へり、爾等も去らんと欲するか。シモンペトル彼に答へて曰へり、主よ我等誰にか往かん、爾は永遠の生命の言を有つ。我等は爾がハリストス活ける神の子たるを信じ、且知れり。主イイスス彼等に答へて曰へり、我爾等十二を選びしに非すや、而して爾

等の中一人は惡魔なり。是れ彼はシモンの子イウダ「イスカリオト」を指して言へり、蓋此の人は十二の一にして彼を賣らんとする者なり。

（九四）「ファリセイ」等愚なる傳の爲に主に譴めらる。（マト一五ノ一―二　マルコ七ノ一―二）

三。イオアンセノ（一〇）。

厥後、主イエスガリレヤを巡れり、蓋イウデヤを巡んことを欲せざりき、イウデヤ人彼を殺さんと謀りたればなり。イエルサリムより來りし「ファリセイ」等と、或學士等と、彼の許に集れり。三度目の「パスハ」既に近づきたり。彼の門徒の中の或者が潔からざる手、即盥はざる手を以て餅を食ふを見て、之を咎めたり。蓋ファリセイ等及び悉くのイウデヤ人は、古人の傳を執りて、其手を潔く盥はざれば食はず、市より歸りて、自ら洗はざれば、亦食はず、此の外又多くの事あり、彼等受けて之を守れり、即杯、瓶、銅器、及び牀を洗ふが若し。是に於て「ファリセイ」等と學士等と彼に問ふ爾の門徒は何ぞ古人の傳に遵はずして、是を犯す。蓋餅を食ふ時、其手を盥はず、即盥はざる手を以て餅を食ふ。

彼答へて曰へり、爾等も何ぞ爾等の傳の爲に神の誡を犯す。蓋神誡めて曰へり、父

母を敬へ、又曰へり、父或は母を詈る者は死すべしと、然れども爾等曰く、人若し父或は母に對ひて、爾が我より得べき者は禮物と爲れりと云はば、其父或は母を敬はずとも可なりと、斯く爾等は其傳を以て神の誡を廢せり。斯く爾等は自ら設くる所の傳を以て神の言を廢し、且多く是くの如きことを行ふ。僞善者よ、イサイヤは爾等の事を善く預言して云へり、斯の民は口にて我に近づき、唇にて我を敬へども、其心は遠く我に離る、彼等は人の誡を數と爲して敎へて徒に我を尊むと。蓋爾等神の誡を棄てて、人の傳を執れり、即瓶、杯を洗ひ、其他多く是くの如きことを行ふ。又彼等に謂へり、爾等己の傳を守らん爲に、善く神の誡を廢す。乃衆民を召して、之に謂へり、皆我に聞きて悟れ、凡そ外より人に入る者は、彼を汚すを能はず、惟彼より出づる者は、斯れ人を汚すなり。耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

時に門徒彼に就きて曰へり、「ファリセイ」等が斯の言を聞きて惑ひしを、爾知れるか、彼答へて曰へり、凡そ我が天の父の植ざりし植物は、其根絶されん。姑く彼等を舍け、彼等は瞽にして瞽を導く者なり、若し瞽にして瞽を導かば、二人ながら坑に陷ら

ん。

彼が民を離れて、家に入りし時、門徒彼に譬の事を問へり。彼は之に謂ふ、爾等も亦斯く悟鈍きか、豈知らずや、凡そ外より人に入る者は彼を汚す能はず。豈凡そ口に入る者は腹を運りて外に遣てられ、是に由りて凡の食物は潔めらる、然れども口より出づる者は心より出づ、斯れ人を汚すなり。蓋内より、即人の心より出づる者は、悪念、姦淫、邪淫、兇殺、盗竊、貪婪、悪毒、詭譎、邪侈、疾視、褻瀆、驕傲、狂妄なり、此等の悪は、皆内より出でて、人を汚すなり。然れども盥はざる手を以て食ふは、人を汚さざるなり。

（九五）シロフィニキヤの婦の女を醫さる。（マトフェイ一五ノ二一―二八。マルコ七ノ二四―三〇。）

主イエス彼處を離れて、ティル及びシドンの地に往けり。視よ、汚鬼を患ふる女を有せるハナアンの婦其疆より出でて、彼に呼びて曰へり、主ダワイドの子よ、我を憐め、我が女魔鬼に憑らるること甚し。然れども、彼一言も之に答へざりき。其門徒就きて、彼に請ひて曰へり、之を去らしめよ、蓋我等の後より呼ぶ。彼答へて曰へり、我は惟イズライリの家の亡びし羊にのみ遣されたり。

主、家に入りて、人の知らんことを欲せざりしが、隠るるを得ざりき。蓋此の婦彼の事を聞きて、來りて、其足下に俯伏せり。此の婦は異邦人にして、シロフィニキヤに生れし者なり、彼は其女より魔鬼を逐ひ出ださんことを請へり。

然れども、主イエス之に謂へり、先づ兒曹に飽かしむるを容せ、蓋兒曹の餅を取りて狗に投ぐるは宜しからず。婦曰へり、主よ、然り、但狗も亦其主の食卓より遺つる屑を食ふ。

其時、主イエス答へて彼に謂へり、嗚呼婦よ、爾の信は大なり、爾が望む如く爾に成るべし、此の言に因りて、往け、魔鬼は爾の女より出でたり。其女斯の時より愈えたり。婦其家に來りて、魔鬼已に出でて、女の其牀に臥せるを見たり。

（九六）聾にして訥れる者を醫さる。（マルコ七ノ三一―三七。）

主イエス復ティル及びシドンの境を出で、デカポリの境を經て、即東方よりガリレヤの海に至れり。聾にして訥れる者を彼に携へ來りて、手を其上に按せんことを求むる者あり。彼獨之を携へて、民を離れ、指を其耳に入れ、唾して其舌に捫り、天を仰ぎて、歎息して、之に謂ふ「エッファファ」譯すれば啓け。直に其耳は啓け、舌の結は解け、

其言ふこと明になれり。

主イイスス彼等に、何人にも告げざらんことを戒めたり、然れども彼愈戒めて、彼等愈播揚せり。且駭異に勝へずして曰へり、其爲せる事皆善し、聾者をも聞く者と爲し、啞者をも言ふ者と爲す。

（九七）諸病を醫さる。（マトフェイ一五ノ二九―三一。）

其後主イイスス、山に登りて坐せり。衆くの民は、跛者、瞽者、瘖者、殘缺者及び他の多くの者を伴ひ來りて、主イイススの足下に置きたれば、彼之を醫せり。民は瘖者の言ひ、殘缺者の健になり、跛者の歩み、瞽者の見るを見て、之を奇として、イズライリの神を讃榮せり。

（九八）奇蹟を以て四千人を飽かしむ。（マトフェイ一五ノ三二―三八。マルコ八ノ一―九。）

當時、民極めて多く集りて、食ふものなかりき。主イイスス其門徒を召して、彼等に謂へり、我斯の民を憫む、蓋已に三日我と偕に在りて、食ふ物なし、我彼等を飢えて去らしむるを欲せず、恐らくは途中に憊れん。門徒彼に謂ふ、我等野に在りて、斯く多くの民を、飽かしむるに足る餅を、何處より得んや、主イイスス彼等に謂ふ、爾等に餅幾何かある、彼等曰へり、七つ及び些須の少き魚。是に於て民に命じて、地に坐せしめ、七の餅を取りて、感謝して之を擘き、其門徒に與へて、之を陳ねしむるに、彼等は民の前に陳ねたり。又魚を取りて感謝し、之を擘きて、門徒に與へ、門徒民に與へたり。皆食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひて、七の籃に盈てたり。食ひし者は、婦と幼童との外、四千人なりき。

（九九）マグダラ、ダルマヌファの疆に於て休徵を請ふ者に答へらる。（マトフェイ一五ノ三九。一六ノ四。マルコ八ノ一〇―一二。）

既に民を去らしめて、彼は其門徒と偕に舟に登り、マグダラとダルマヌファの疆に至れり。「ファリセイ」等出でて彼を詰り、彼を試みて、天よりする休徵を、彼等に示さんことを請へり。

主は謂へり、姦惡の世は休徵を求む、而して預言者イオナの休徵の外、之に休徵は與へられざらん。

主は乃彼等を離れて、復舟に登りて、彼の岸に往けり。

（一〇〇）「ファリセイ」「サドケイ」等の酵を防ぐ可し。（マトフェイ一六ノ五―一二。マルコ八ノ一三―二一。）

時に門徒彼の岸に濟りて、彼等餅を取ることを忘れたり、舟には惟一の餅の外有らざりき。彼は之に戒めて曰へり、謹みて「サッドゥケイ」、「ファリセイ」「イロド」の酵を防げ。彼等竊に相議して曰へり、是れ我等に餅なきを指すなり。

主イイスス之を知りて、彼等に謂へり、小信の者よ、何ぞ餅なしと言ひて餅を取らざりしことを議する、爾等猶未だ知らず、未だ悟らざるか、爾等の心猶頑なるか。爾等目ありて視ざるか、耳ありて聽かざるか、亦記憶せざるか。我五の餅を五千人の爲に擘きし時、爾等餘屑を拾ひて、幾籃に盈てしか。彼に謂へ、十二。又七の餅を四千人の爲に擘きし時、餘屑を幾籃拾ひしか。曰く七。我が爾等に「ファリセイ」及び「サッドゥケイ」等の酵を防げと言ひしは、爾等何ぞ餅の事に非ずと悟らざる。是に於て彼等、其言ひしは、餅の酵に非ず、乃「ファリセイ」及び「サッドゥケイ」等の教を防ぐべきことなるを悟れり。

（一〇一）　イヲルダン外のワイフサイダに於て醫者を醫さる。（マルコ八ノ二二―二六。）

主は彼方の岸に濟り、ワイフサイダに來れるに、醫者を彼に携へて、之に捫らんことを求むる者あり。彼醫者の手を執り、之を引きて、村の外に出で、其目に唾し、彼の上に

手を按せて、見る所ありやと問へり。彼仰ぎ視て曰へり、我人人の行くこと樹の如くなるを見る。後復、手を其目に按せて、彼に仰ぎ視ることを命じたれば、彼愈えて、明に庶物を見たり。乃彼を其家に遣して曰へり、村に入る勿れ、村の内の人に告ぐる勿れ。

（一〇二）　門徒等主イイススハリストスの神の子たるを認ひ。（マトフェイ一六ノ一―二〇。マルコ八ノ二七―三〇。ルカ九ノ一八―二一。）

其後、主イイスス其門徒と偕に、フィリップのケサリヤの諸村に出で、途中獨處に於て祈禱する事ありしに、門徒彼と偕にせり。彼は之に問ひて曰へり、民我を言ひて誰とか爲す。彼等答へて曰へり、授洗イオアンと爲し、他の者はイリヤと爲し、又他の者は古の預言者の一人復活したりと爲す。

主イイスス彼等に謂ふ、爾等は我を言ひて、誰とか爲す、シモンペトル對へて曰へり、爾はハリストス、活ける神の子なり。主イイスス答へて彼に曰へり、イオナの子シモンよ、爾は福なり、蓋血肉は之を爾に示ししに非ず、乃天に在す我の父なり。我も亦爾に語ぐ、爾はペトルなり、我此の磐の上に我の教會を建てん、而して地獄の門は

之に勝たざらん。且我爾に天國の鑰を與へん、爾が地に縛る者は、天にも縛られ、爾が地に釋く者は、天にも釋かれん。

主イエスス彼等に戒めて、此の事を人に告ぐる勿らんことを命じたり。乃彼等に戒めて、己の事を人にパリストスなりと語ぐる勿らしめたり。

（一〇三）主己の死と復活とを預言せらる。（マトフェイ一六ノ二一―二三。マルコ八ノ三一―三三。ルカ九ノ二二。）

是より主イエスス始めて其門徒に、己がイエルサリムに往き、長老、司祭長、學士等より多く苦を受け、且殺されて、第三日に復活すべきことを示せり、彼明に此事を語れり。

然るにペトル彼を援きて諫めて曰へり、主よ自ら憐め、此の事爾に及ぶべからず。

彼身を轉じて、其門徒を見て、ペトルを戒めて曰へり、サタナ、我より退け、蓋爾は神の事を念はず、乃人の事を念ふ。

（一〇四）十字架を負ふ可き事の教訓。（マトフェイ一六ノ二四―二八。マルコ八ノ三四―九ノ一。ルカ九ノ二三―二七。）

主、遂に民を其門徒と共に召して、衆に謂へり、我に從はんと欲する者は、己を舍て其十字架を負ひて我に從へ。蓋己の生命を救はんと欲する者は、之を喪はん、我及び福音の爲に己の生命を喪はん者は、之を救ひ之を得ん。蓋人若し全世界を獲とも己の靈を損はば、何の益かあらん、我及び我の言を恥ぢん者は、人の子は、己と父と聖なる天使等との光榮を以て來らん時、彼を恥ぢん。抑人何を與へて、其靈の價と爲さん。

蓋人の子は、其父の光榮を以て、其天使等と偕に來らん、其時各人に、其行に依りて報いん。蓋此の姦惡の世に於て、我及び我の言を恥ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て、聖なる天使等と偕に來らん時彼を恥ぢん。

主は其教訓を左の如く結べり、我誠に爾等に語ぐ、此に立てる者の中には、未だ死を嘗めずして、人の子が其國に來るを見んとする者あり。（マトフェイ一七ノ一―一三。マルコ九ノ二―一三。ルカ九ノ二八―三六。）

（一〇五）主の顯榮。

此等の言の後、約八日或は六日を越えて、主イエスはペトル、イアコフ、イオアンを携へ、獨彼等のみを率ゐて、高き山に登り、彼等と偕に此の山にて辯れり。

然るに彼禱りし時、ペトル及び之と偕に在りし者は皆倦みて寢ねたり、甚だしき光りに由りて、既に寤めて彼等主の光榮を見たり、蓋主禱れる時、悉く彼等の前にて容を變へたり、其時面は日の如く耀き、其衣は光の如く皎くなれり。地上の漂工の白くする能はざる者の如し。

視よ、二人の彼と語れるあり、即モイセイ及びイリヤなり、光榮の中に現れて、彼がエルサリムに成すべき逝世の事を言へり。

時にペトル主イイスに謂へり、主夫子よ、我等此に居るは善し、爾若し欲せば、我等此に三の廬を建てて、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん。蓋自ら言ふ所を知らざりき、彼等大に懼れし故なり。

彼が尚言ふ時、視よ、光れる雲は彼等を蓋ひ、且雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、彼に聽け。聲已に發して、主イイスの獨在るを見たり。

門徒此の聲を聞きて俯伏し、懼るること甚し。主イイスの就きて、彼等に觸れて曰へり、起きよ、懼るる勿れ。彼等其目を擧げて、獨主イイスの外に誰をも見ざりき。

山を下る時、主イイス彼等に戒めて曰へり、人の子が未だ死より復活せざる先に

主の顯榮
（第百五章）

は見たる事を人に告ぐる勿れ。彼等默して、常時には見し事を誰にも告げざりき。彼等斯の言を其中に留めて、相議して曰へり、死より復活すとは何の意ぞ。又彼に問ひて曰へり、學士等がイリヤ先に來るべしと云ふは何ぞや。彼答へて曰へり、然り、イリヤ先に來りて、萬事を整ふべし、人の子も亦之を指して錄されし如く、多く苦を受け、人に卑めらるべし。是に於て門徒は、其授洗イオアンの事を彼等に言ひしを悟れり。

（一〇六）惡鬼に馮られし者を醫さる。（マトフェイ一七ノ一四―二一。マルコ九ノ一四―二九。ルカ九ノ三七―四三。）

翌日、彼等が山より下りし時、衆くの民は彼を迎へたり。衆民、倏彼を見て駭き趨り前みて安を問へり。主イイスス既に門徒の所に來りて、群衆の彼等を環り、且學士等の彼等と議論するを見たり。彼學士等に問ひて曰へり、彼等と議論するは何の事ぞ。

視よ、民の中の一人、彼に就き跪きて呼びて曰へり、師よ、爾に求む鬼に憑られたる我子を眷みよ、彼癲癇を患ひて、苦むこと甚し蓋屢火に倒れ、亦屢水に倒る、鬼は何處に

彼を執ふとも、投げ仆し、彼沫を噴き、齒を切み、體枯る、彼を傷ひて、暫く離る。師よ、我が子を爾に携へ來れり、然れども爾は居ざりき、我之を携へて、爾の門徒に就き惡魔を逐はんことを願ひたれど、彼等醫すこと能はざりき。主よ我が子を憐め、此れ我が獨子なり。

主イイスス答へて曰へり、噫、信なき悖れる世や、我何時までか爾等と偕にし、爾等を忍ばん、爾の子を此に携へ來れ。

乃彼を携へ來れり、彼が來る時、彼主イイススを見れば、鬼忽彼を拘攣させ、彼地に仆れ、轉びて沫を噴けり。

主イイスス其父に問へり、彼に斯く爲りしは何の時よりか。曰へり、幼き時よりなり。鬼は彼を滅さん爲に、屢火に又水に投じたり。爾若し何をか能くせば、我等を憫みて、我等を助けよ。主イイスス之に謂へり、爾若し幾何か信ずることを能せざるこ となし。童子の父直に涙を垂れて、呼びて曰へり、主よ、我信ず、我が不信を助けよ。

主イイスス民の趨せ集るを見て、汚鬼を禁めて、之に謂へり、啞にして聾なる鬼よ、我

爾に命ず、彼より出でて、再彼に入る勿れ。鬼號びて、甚しく彼を拘攣させて出でたり、彼は死せし者の若くなりて、多くの者彼死せりと云ふに至れり。主イイスス其手を執りて、彼を起せり、其子斯の時より愈えて立てり、主彼を其父に與へたり。

衆皆神の大能を奇とせり。衆が凡そ主イイススの行ひし事を奇とする時、彼其門徒に謂へり、爾等此の言を己の耳に藏めよ、人の子は人人の手に付されん。

主イイスス家に入りし時、其門徒私に彼に問へり、我等が之を逐ひ出だす能はざりしは何の故ぞ。主イイスス彼等に謂へり、爾等信なき故なり、蓋我誠に爾等に語ん、爾等に若し芥種の如き信あらば、此の山に、此より彼へ移れと言ふとも、移らん、又爾等に一も能はざることなからん。此の類に至りては、祈禱と齋とに由らざれば出でざるなり。

（一〇七）主ガリレヤに往く。仍その死及び復活の事を預言せらる。

（マトフェイ一七ノ二二—二三。マルコ九ノ三〇—三二。ルカ九ノ四四—四六。）

彼等彼處に出でて、ガリレヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。ガリレヤに在る時、主イイスス又彼等に敎へて謂へり、人の子は人人の手に付されん、且

彼を殺さん、而して第三日に彼復活せん。

然れども、彼等は此の言を曉らざりき、此れ彼等の爲に掩はれて、其之に達せざると致せり、而して此の言を彼に問ふことを懼れたり。彼等甚哀めり。

（一〇八）カペルナウムに於て。―殿稅および奇蹟の「スタティル」（古銀）

此時、彼等カペルナウムに來れり。此處にて、彼等に念は起れり、彼等の中、孰か大なると。彼等、互に相議せしも更に決せざりき。

（マトフェイ一七―二七。）

カペルナウムに來りし時、殿稅を集むる者ペトルに就きて曰へり爾等の師は殿稅を納むるか。彼曰く然り。家に入りし時、主イエスス先んじて彼に謂へり、シモン爾如何に意ふか、地の諸王は貢者くは稅を誰より取るか、己の子よりか、抑外の者よりか。ペトル曰く、外の者よりす。主イエスス彼に謂へり、然らば子は與らず。然れども我等が彼等を惑さざらん爲に、爾海に往きて、釣を垂れよ、初に上る魚を取りて、其口を啓かば「スタティル」を得ん、之を取りて、我と爾との爲に彼等に與へよ。

（一〇九）カペルナウムに於ての門徒に對する說敎。

（イ）孰か大なる。（マトフェイ一八ノ一―五。マルコ九ノ三三―三七。ルカ九ノ四六―四八。）

當時、門徒等孰か大なるとのことを決せざりしかば、集りて主イエススに就きて曰へり、天國に於ては孰か大なる。主イエスス其心の念を觀て、彼等に問へり、爾等が途中相議せしは何の事ぞ。彼等默然たり、蓋途中孰か大なると相議したるは、當らざるを悟り、其良心を照されたればなり。彼坐して、十二徒を召して、之に謂へ、先たらんと欲する者は、衆の後と爲り、衆の役者と爲るべし。又幼兒に取りて、彼等の中に立て、且之を抱きて、彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等若し轉じて、幼兒の如くならずば、天國に入るを得ず。故に此の幼兒の如く自ら謙らん者は、是れ天國に於て大なる者なり。我が名に因りて、是くの如き幼兒の一人を接けん者は、我を接くるなり、我を接けん者は、我を接くるに非ず、乃我を遣しし者を接くるなり。蓋爾等の中の小なる者は、大なる者と爲る可し。

（ロ）爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。（マルコ九ノ三八―四一。ルカ九ノ四九―〇五。）

イオアン彼に答へて曰へり、師よ我等は爾の名を以て魔鬼を逐ひ出だし、而して我

等に從はざる人を見て、之に禁じたり、其我等に從はざる故なり。

主イイスス曰へり、之に禁ずる勿れ、蓋我が名を以て異能を行ひし者は、未だ幾ならずして、我を誹る能はず。蓋爾等に敵せざる者は爾等の與屬なり。爾等がパリストスに屬する故を以て、我が名に因りて、爾等に水一杯を飲ませしめん者は、我誠に爾等に語ぐ、其賞を失はざらん。

（マトフェイ一八ノ六―九。マルコ九ノ四二―五〇。）

（八）誘惑の事。

然れども、我を信ずる此の小子の一人を、罪に誘はん者は、寧磨石を其頸に懸けられて、海の深處に沈められん。

世は誘惑に由りて禍なる哉、蓋誘惑は來らざる可からず、但誘惑を來す人は禍なる哉。

若し爾の手爾を罪に誘はば、之を斷て、爾の爲には殘缺にして生命に入るは、兩の手ありて、地獄に滅えざる火に入るより勝れり、彼處には、彼等の蟲死せず、火滅えず。

若し爾の足、爾を罪に誘はば、之を斷て、爾の爲には、跛にして生命に入るは、兩の足ありて、地獄に滅えざる火に投せらるるより勝れり、彼處には、彼等の蟲死せず、火滅え

ず。

若し爾の目、爾を罪に誘はば、之を抉れ、爾の爲には、一の目ありて、神の國に入るは、爾の目ありて、火の地獄に投せらるるより勝れり、彼處には、彼等の蟲死せず、火滅えず。

蓋凡の人は、火を以て鹽せられん、入凡の祭物は、鹽を以て鹽せられん。鹽は善き物なり、然れども鹽若し其味を失はば、何を以て之を鹹くせん。爾等の內に鹽を有ち、亦互の和平を有て。

（マトフェイ一〇―一一四。一八ノ）。

（二）幼兒に注意すべき事。

愼みて、此の小子の一人をも輕んずる勿れ、蓋我爾等に語ぐ、彼等の天使等は天に於て、常に我が天の父の顏を觀る。

蓋人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。爾等如何に意ふか、人若し百匹の羊あらんに、其一迷はば、九十九を山に遺し、往きて、迷へる者を尋ねざるか、若し之を獲ば、我誠に爾等に語ぐ、彼が其羊の爲に喜ぶこと、迷はざりし九十九の者より勝れり。

斯く此の小子の一人の亡ぶるは、爾等が天の父の旨に非ず。

（ホ）若し兄弟罪を犯さば何を爲す可きや。（マトフェイ一八一五―二〇。）

若し爾の兄弟爾に罪を得ば、往きて、爾と彼と獨處る時に之を諫めよ、若し爾に聽かば、爾の兄弟を獲たるなり。

若し聽かずば、一人或は二人を伴ひ、往きて、二三證者の口を以て、凡の言を定むるを致せ。

若し彼等に聽かずば、教會に告げよ、若し教會にも聽かずば、爾の爲には異邦人と稅吏との如くなるべし。

我誠に爾等に語ぐ、凡そ爾等が地に縛る者は、天にも縛られ、爾等が地に釋く者は、天にも釋かれん。

又誠に爾等に語ぐ、若し爾等の中、二人地に於て心を合せて、凡の事を求めば、何を求むるに論なく、天に在す我が父より彼等に賜はらん。蓋二人或は三人の、我が名に因りて集る處には、我も其中に在るなり。

（一）罪を赦すべき事。（マトフェイ一八一二一―三五。）

其時ペトル主イイスに就きて曰へり、主よ、我が兄弟我に罪を得ば、幾次之に免すべきか、七次迄か。主イイスス彼に謂ふ、我爾に七次迄と言はず、乃七十次の七倍迄、是の故に天國は其諸僕と會計せんと欲せし君王に似たり。會計を始めし時、一千萬金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其債ふこと能はざるに因りて、主は彼の身と其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、債はんことを命せり。其僕俯伏して、彼を拜して曰へり、主よ、我を寬うせよ、我盡く爾に償はん。其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。

其僕出でて、一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇ひて、之を執へ、喉を扼めて曰へり、爾が負ふ所を我に償へ。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰へり、我を寬うせよ、我盡く爾に償はん。然れども彼肯はず、乃往きて、其債を償ふに至るまで、之を獄に下せり。

他の同僚之を見て甚憂ひ、來りて有りし所を、悉く主に告げたり。其時主は彼を召して曰く、惡しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債を悉く爾に免せり、我か爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ずや。主乃怒りて、其悉くの債を償ふに至るまで彼を獄吏に付せり。

若し爾等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に行はん。（ルカ九ノ五六。）

（一一〇）サマリヤの郷民、主を受けず。

主イエスが世より擧げらるる日の近づきし時、彼イエルサリムに面して行かんことを定めたり。使を其面前に遣しに、彼等往きて、サマリヤの郷に入り、彼が爲に備へんとしたれども、彼處には彼を納れざりき、其イエルサリムに面して往くが故なり。

其門徒イアコフ及びイオアン之を見て謂へり、主よ、爾は我等がイリヤの爲しし如く火の天より降りて、彼等を滅さんことを命ずるを欲するか。主イエス顧みて、彼等を戒めて曰へり、爾等は自ら如何なる神に屬するを知らず。蓋人の子の來りしは、人人の靈を滅さん爲に非ず、乃之を救はん爲なり。遂に他の郷に往けり。（ルカ九ノ五七―六二。）

（一一一）主に從はんとする者に答へらる。

彼等が路を行く時、或主イエスに謂へり、主よ、爾何處に往くとも、我爾に從はん。主イエス之に謂へり、狐には穴あり、天空の鳥には巣あり、惟人の子には首を枕する處なし。

又他の者に謂へり、我に從へ。彼曰へり、主よ、我に先づ往きて、我が父を葬るを容せ。然れども主イエス之に謂へり、死者に其死者を葬るを任せよ、爾は往きて、神の國を傳へよ。

又他の者曰へり、主よ、我爾に從はん、但先づ往きて、吾が家の者に別を告ぐるを容せ。主イエス之に謂へり、手を犂に著けて、後を顧みる者は、神の國に當らざるなり。

（一一二）七十門徒を傳教に遣はさる。

（イ）七十門徒の選定および派遣。（ルカ一〇ノ一―三。）

厥後、主は又別に七十門徒を選び、彼等各二人を己に先だてて、自ら往かんと欲する所の諸邑諸處に遣し、彼等に謂へり、穫は多く、工は少し、故に穫主に、工を其穫所に遣さんことを求めよ。往け、我が爾等を遣すは、羔を狼の中に入るるが如し。

（ロ）七十門徒に對する教訓。（ルカ一〇ノ一―六。）

爾等は金錢をも、行囊をも、履をも携ふる勿れ、途中にて人に安を問ふ勿れ。人の家に入る時は、先づ此の家に平安と曰へ。若し彼處に平安の子あらば、爾等の

平安は彼に留らん、然らずば、爾等に歸らん。其家に居りて、彼等に在る所の者を食飲せよ、蓋勞する者の其値を得るは宜しきなり、家より家に移る勿れ。

何の邑に入るとも、人爾等を接けば、其爾等の前に供ふる者を食へ。其中に在る病者を醫せ、又衆に告げて曰へ、神の國は爾等に近づけりと。何の邑に入るとも、人爾等を接けずば、其衢に出でて曰へ、爾等の邑より我等に著きたる塵をも、我等は爾等に對ひて拂ふ、然れども之を知れ、神の國は爾等に近づけりと。我爾等に語ぐ、彼の日に於てソドムは斯の邑より忍び易からん。

禍なる哉爾ホラジンよ、禍なる哉爾ワイプサイダよ、蓋爾等の中に行はれし異能は、若しティル及びシドンに行はれしならば、彼等は早く麻を衣、灰を裳り、坐して悔改せしならん。然らば審判に於てティル及びシドンは爾等より忍び易からん。

爾等に聽く者は我に聽く、爾等を拒む者は我を拒む、我を拒む者は我を遣しし者を拒むなり。

（八）七十門徒の歸還および主の教訓。（ルカ一〇ノ一七―二四。）

七十門徒喜びて返りて曰へり、主よ、爾の名に因りて魔鬼も我等に服す。主は之に

謂へり、我サタナの電の如く天より墮ちしを見たり。視よ、我爾等に蛇、蠍、及び悉くの敵の能を蹈む權を與ふ、一も爾等を害せざらん。然れども惡鬼の爾等に服するを喜と爲す勿れ、乃爾等の名の天に錄されしを喜と爲せ。

當時、主イエス神を以て喜びて曰へり、父、天地の主よ、我爾を讃美す、爾此等を智者及び達者に隱して、之を赤子に顯しし因る、父よ、然り、蓋是くの如きは爾の旨の嘉せし所なり。

門徒を顧みて曰へり、萬物は我が父より我に授けられたり、父の外に、子の誰たるを識る者なく、子及び子が顯さんと欲する者の外に、父の誰たるを識る者なし。

又門徒を顧みて特に彼等に謂へり、爾等が見る所を見る目は福なり。蓋我爾等に語ぐ、多くの預言者と君王とは、爾等が見る所を見んと欲して見ざりき、爾等が聞く所を聞かんと欲して、聞かざりき。

（一一三）永生を繼ぐ事の問に答へらる。（ルカ一〇ノ二五―三七。）

時に一の律法師起ちて、主を試みて曰へり、師よ、我何を爲して永遠の生命を嗣がんか。彼は之に謂へり、律法に何をか錄せる、爾如何に讀むか。答へて曰へり、爾心を

慈悲なるサマリヤ人
（第百十三章）

盡し、靈を盡し、力を盡し意を盡して、主爾の神を愛せよ、又爾の鄰を愛すること、己の如くせよ。主イエスス之に謂へり、爾の答へし所正し、之を爲せ、乃生きん。

然れども質問者己を義とせんと欲して、主イエスに謂へり、我が鄰とは誰ぞや。

主イエスス答へて曰へり、或人イエルサリムよりイエリホンに下る時盜賊に遇へり、彼等其衣を剝ぎ、彼に傷つけ、幾ど死するばかりにして、彼を捨てて去れり。適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同じく「レワイト」も彼處に至り、近づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此に至り彼を見て憫み、就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を己の家畜に乘せ族館に引き至りて、彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出だし、館主に與へて、之に謂へり、此の人を看護せよ、費若し此より益さば、我返る時爾に償はん。

此の三人の中、爾孰を盜賊に遭ひし者の鄰と意ふか。彼曰へり、此の人に矜恤を施しし者なり。主イエス彼に謂へり、往きて爾も是くの如く行へ。

（一一一四）　マルフヤ、マリヤの家庭に於ける主イエス。（ルカ一〇三八―四二）。

彼等主及び門徒が往ける時、主イエスス一の村に入りしに、或婦マルファと名づくる

者、彼を其家に迎へたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、主イエスの足下に坐して、其言を聽けり。マルファは供事の多きに因りて心を煩はし、就きて曰へり、主よ、我が姉妹我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。主イエス彼に答へて曰へり、マルファよ、マルファよ爾は多くの事を慮りて心を勞せり、然れども、需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪ふ可からず。

（一一五）主の祈禱。（ルカ一一―四。）

主イエス某處に禱りて、既に休めし時、其門徒の一人彼に謂へり、主よ、我等に禱ることを敎へよ、イオアンも其門徒に敎へしが如し。彼は之に謂へり、爾等禱る時斯く言へ、

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は、天に行はるるが如く、地にも行はれん、我が日用の糧を毎日我等に與へ給へ、我等に我が罪を免し給へ、蓋我等も凡そ我等に負ふ者に免す、我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へと。

（一一六）祈禱を止ひべからざるの教訓一譬。（ルカ一一ノ五―一三。）

又彼等に謂へり、爾等の中孰か友あり、夜半彼に來りて、友よ我に三の餅を借せ、蓋我友途中より我に來りしに、我之に供すべき者なしと曰はんに、彼内より之に答へて我を煩はす勿れ、門已に閉ぢ、我が兒曹我と與に牀に在り、我起きて、爾に與ふる能はずと曰はん。我爾等に語ぐ、若し彼は友なるが故に、起きて彼に與へずば、乃其切迫に依りて其需むる如く彼に與へん。

我も爾等に語ぐ、求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん。蓋凡そ求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者には啓かれん。

爾等の中父たる者、孰か其子餅を求めんに、之に石を與へ、或は魚を求めんに、之に魚に代へて蛇を與へ、或は卵を求めんに、之に蠍を與へん。然らば爾等惡しき者なるに、尚善き賜を其子に與ふるを知る況や天に在す父は、之に求むる者に、聖神を與へざらんや。

（一一七）啞なる魔鬼を逐はる。ワエルゼウルに藉りて云云の事に就

きて、ファリセイ等を譴めらる。（ルカ一一ノ一四―二八。）

或時主は瘖なる魔鬼を逐ひ出だせり、魔鬼出でて瘖者言ひしに民之を奇とせり。然れども其中の或者曰へり、彼は魔鬼の魁ワエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出だす。他の者は彼を試みて、天よりする休徴を求めたり。

主イイスス彼等の意を知りて彼等に謂へり、凡の國自ら分れ爭はば、荒墟となり、家自ら分れ爭はば、倒れん。若しサタナも分れ爭はば、其國如何にして立たん。然るに爾等は言ふ我ワエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出だすと。

若し我ワエルゼウルに藉りて魔鬼を逐ひ出だすか故に彼等は爾等の審判者と爲らん。然れども若し我神の指に藉りて魔鬼を逐ひ出ださば、則神の國果して爾等に臨みしなり。

強き者武器を執りて、其家を守る時は、其所有安全なり。然れども彼より更に強き者來りて、彼に勝つ時は、其恃とせし武器を悉く奪ひて賊物を分たん。

我と偕にせざる者は、我に敵し、我と偕に聚めざる者は散らすなり。

汚鬼人より出でて後、水なき地を巡り、安息を求ひれども、得ずして曰く、我曾て出で

し我家に歸らんと。既に來りて、其家の掃き且つ飾りたるを見、乃往きて、己よりも惡しき他の七鬼を携へ來り、偕に入りて、彼處に居るなり。是に於て其人の爲に後の患は先より更に甚し。

此を言ふ時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂へり、爾を孕みし腹と爾が哺ひし乳とは福なり。主は曰へり、然り、神の言を聽きて之を守る者は福なり。

（一一八）其後の他の教訓。（ルカ一一ノ三九―三六）。

民の多く集れる時、主イイスス宣べ始めて曰へり、此の世は惡しくして、休徵を求む、而して預言者イオナの休徵の外、之に休徵は與へられざらん。蓋イオナがニネワイヤ人の爲に休徵と爲りし如く、人の子も此の世の爲に是くの如く爲らん。南方の女王は審判の時に斯の世の人と共に起ちて、彼等を罪せん、蓋彼は地の極よりソロモンの智慧を聽かん爲に來れり、視よ、此にはソロモンより大なる者あり。

ニネワイヤの人は審判の時に斯の世と共に起ちて之を罪せん、蓋彼等はイオナの傳教に由りて悔改せり、視よ、此にはイオナより大なる者あり。

燈を燃して、之を隱れたる處、或は斗の下に置く者あらず、乃燈臺の上に置く、入る者

が光を見ん爲なり。

身の燈は目なり、故に爾の目の淨き時は、爾の全身も明なり、其惡しき時は、爾の身も暗し。故に愼め、爾が內の光の暗とならざらんことを。若し爾の全身明にして、一部の暗き所もなくば、則全く明ならん、燈の其光を以て爾を照すが如し。

（一一九）「ファリセイ」人と共に食せし時、「ファリセイ」及び學士等を譴めらる。（ルカ一一ノ三七―五四）。

主が言ふ時、或「ファリセイ」彼に共に食せんことを請ひたれば、彼入りて席坐せり。「ファリセイ」は彼が食する前に手を洗はざりしを見て、異めり。主は之に謂へり、爾等、ファリセイ、今杯と盤との外を潔ひれども、爾等の內には貪婪と惡慝と充てり。無知なる者よ、外を造りし者は亦內をも造りしに非ずや。惟所有の中より施濟を爲せ、然らば爾等の爲に皆潔からん。禍なるかな爾等「ファリセイ」よ、蓋爾等は薄荷、芸香及び凡の野菜十分の一を納めて義と神に於ける愛とを遺つ、此れ行ふ可きなり、彼も亦遺つ可からず。禍なるかな爾等「ファリセイ」よ、蓋爾等は會堂には首座、街衢には問安を好む。禍なるかな爾等僞善なる學士及び「ファリセイ」等よ、蓋爾等は隱れたる墓に似たり

其上を履む人は之を知らず。

律法師等の一人彼に答へて曰へり、師よ、爾之を言ひて、我等をも辱しむ。彼曰へり、爾等律法師も禍なる哉、蓋爾等は負ひ難き任を人に任はせて、己は一の指をも其任に觸れず。爾等禍なる哉、蓋爾等は其先祖が殺しし預言者の墓を建つ。是を以て爾等は先祖の爲ししことを證し、且之に與す、蓋彼等は預言者を殺し、爾等は其墓を建つ。故に神の智慧も言へり、我預言者及び使徒等を彼等に遣さん、彼等は其中或者を殺し、或者を逐はん、創世以來流されし諸預言者の血は、アヱリの血より、祭壇と殿との間に殺されしザハリヤの血に至るまで、皆此の代より索められん。然り我爾等に語ぐ、是れ此の代より索められん爲なり。禍なる哉爾等律法師よ、蓋爾等は智識の鑰を取りて、自ら入らず、入る者をも阻めり。

彼が之を言ふ時、學士等及び「ファリセイ」等迫りて、彼を詰り、彼に多くの事を答へしめ、彼を伺ひて、其口より出づる何事をか捕へんと欲せり、彼を罪せん爲なり。

（一二〇）其事に就きての他の敎訓。（ルカ一一二一—一二一）。

民數萬集りて、相蹂ひに至れる時、彼先づ其門徒に謂へり、謹みて「ファリセイ」等の酵を

防げ、是れ僞善なり。覆はれて露れざる者なく、隱れて知られざる者なし。故に爾等が暗の中に言ひし事は、光の中に聞えん、密なる室に於て耳に附きて語りし事は、屋の上に傳へられん。

我、爾等我が友に言ふ、身を殺して後に何事をも爲す能はざる者を懼るる勿れ。我爾等に誰をか懼るべきを示さん、即殺して後に地獄に投ずる權を有つ者を懼れよ、然り、我爾等に語ぐ、斯の者を懼れよ。

五の雀は二錢にて售らるるに非ずや、然るに其一も神の前に忘れられず。爾等に於ては首の髮も皆數へられたり。故に懼る勿れ爾等は多の雀より貴し。

我又爾等に語ぐ、凡そ我を人の前に認めん者は、人の子も彼を神の使等の前に認めん。我を人の前に諱まん者は、神の使等の前に諱まれん。

凡そ人の子に敵して言を出だす者は敎されん、然れども聖神を瀆す者は敎されざらん。

爾等を曳きて、會堂、又は政を執り權を有つ者の前に至らん時、如何に或は何を答ふべく、或は何を言ふべきを慮る勿れ。蓋其時、聖神爾等に言ふべきことを敎へん。